

---

# 魔法少女リリカルなのは～父で兄で主でチート～

jasper

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜父で兄で主でチート〜

### 【Nコード】

N7501K

### 【作者名】

j a s p e r

### 【あらすじ】

気が付いたらいきなり真っ白な空間で。

そこで出会った男は神様みたいな存在で。

それで俺は、父親で兄貴で主でチートになってしまった。

仕方ないからみんなを助けていこうか。



## プロローグ

ん……………？

あれ、なんで真っ白？

「その前に真っ白ってこと自体がおかしいんだけどな」

「目覚めたか」

その声に、振り向く。

正確には身体を反転させたの方が正しいかもしれない。

なにせ平衡感覚も重力も感じない。自分が前を向いていたかさえも若干怪しいくらいに感覚があやふやだ。

「単刀直入に言う。：頼みがある」

そう言うその男。外見は十代後半から二十代前半。

俺の感覚からすれば格好いい男に分類されるだろう。

一見、適当に切りそろえられた髪はさりげなくセットされているし、顔つきも精悍という言葉が合うタイプだ。

服装は黒をベースにシルバーのアクセサリや白のワンポイントで何処と無くワイルドに決めてある。

……そんな勝手な服装鑑定は今は必要じゃないな。

頼み、か。こんなわけわからない状況で見ず知らずの奴に頼まれるなんて普通は話も聞かないだろう。

態々対応する奴はよっぽど粹狂か、バカだ。

…で、俺はどっちか知らないがどちらかには該当するらしい。

「とりあえず聞くよ」

「『リリカルなのは』——という物語は知っているな?」

「…いや、確かに知ってる…っていうか好きだし、全部見たし……」

まさかこんな良い男からその単語が出てくるとは思ってたんだが。

「やって欲しいことがある」

「いや、何を……つかそれを知っててどうしろと」

「——そうだな。まずは世界のあり方について話をするべきか」

この後、長々話された内容と俺が質問した内容を要約するとういうことだ。

世の中上には上がいる。それは食物連鎖のような根幹的なものにも該当するし、上下関係のようなコミュニティ中にも該当する。

また、世界についてもそれが該当する。この男は俺たちの上位に存在するらしい。

マンガやアニメなんかの創作物の世界を『存在する世界』とすると、俺たちはその中の存在にとって神に等しい。

なぜなら俺たちは自由に設定を変え、キャラクターを動かし、物語を作り上げることが出来るからだ。

この男たちは俺たちにとってその『創作物を操る側』にあたり、俺たちは『創作』の方にあたる。

で、俺たちの上位に当たるこいつらは俺たちの下位である俺たちの創作物を読むことも出来るらしい。

「それで？　なんでリリなのが関係してくるんだ？」

「あの物語って、根本は『魔法少女』だろ？」

話してるうちに段々と砕けた話しかたになってきた。

で、確かに魔法少女だなあ…タイトルにもそう書いてあるし。

——魔砲とも言うが。

「その物語の世界で、『奴隷』なんて単語聞きたくないよな？」

「……………ああ、それは嫌だな」

「と、いうことでお前助けに行ってきたくれ」

「————は？」

「チートと呼べるだけの戦力は追加しておいてやる」

ここで、ようやく理解。

つまりこれは——

「神様がお前に力やるから転生してくれてやつだ」

「ふ、ふざけんなあああああああああああ！！！！！」

そんな声を置き去りにして、俺は突然開いた黒い穴に吸い込まれていった。



## プロローグ（後書き）

j a s p e r（以降j a s）「こんにちは。はじめまして」

??（主人公）「お前、せめて主人公たる俺の名前を出せよ」

j a s「いや、文量的にこれくらいかなと」

??「とか言うバカな作者だが、よろしく頼む」

j a s「しかもこの後も三話くらい原作キャラでない予定」

??「一度シバクか」

j a s「あとがきはあちらこちらの皆さんのやり方を倣って会話形式で行います」

??「仕舞いにゴーイングマイウェイか？本気でちょっとツラかせ」

j a s「さて、続きの執筆を……」

??「よしわかった。死にたいならやってやろう」

ずるずる……がん、ばき、どっかん、ぐしやぐしや♪

??「大変見苦しいところをお見せした。続きも楽しみにしてくれ

ると嬉しい」

## Situation 1

チートって、誰と戦っても弱いもの虐めだよね

「……………痛え」

背中に鈍痛が走って目を開けばそこは森の中。

時間帯は黄昏時。丁度空の色が茜色と夜色の中間だ。

<無事に着いたみたいだな>

「頭の中に響く声……お前、『神』だな？」

<お前がそう呼ぶ存在であることは確かだ>

「————説明は全部頭の中に叩き込んである……と」

<ああ。頼む>

つくづく面倒くさい奴だ。俺の友人にもこんな奴が居た。

お人よしだけどやり方が回りくどくて、言いたいことがうまく伝えられない奴。

「一つだけ聞く。…何で俺だ？」

＜——お前が、俺の観測した中で一番良い奴<sup>ヒーロー</sup>だったからだよ＞

その言葉を残して、あいつの感覚が途切れた。

一応、今みたいに俺に接触は出来るらしいけどあんまりやれないらしい。そういうものなんだとか。

それで——俺は、俺のやらなきゃならないことをやろう。

Situation 1 チートって、誰と戦っても弱いもの虐めだよ

森の中を歩いていく。

進む道は、道とも呼べないような獣道だけど全く疲れは無い。

これが『神』の言う追加した能力の一つ、身体能力の強化。

戦闘者として十分なだけの筋力や体力、心肺能力を与えたとか。

その際、容姿なんかは特に弄らなかつたらしい。∴別に何の問題も無いけど。身長は178cm、体格は中肉中背。

別に自分で良いとは言わないけれど、悪くは無いと思う。

歩いて数分。問題の館に来た。

「っ……………」

手近な窓から中を一瞥。いきなりこの窓をぶち破りそうになったが、なんとか自重した。

布切れ一枚着せられて、死んだような目をして無駄に豪華な机の上に立たせられる少女。

その手には手かせと鎖。四方から光の球——恐らくサーチャー——で撮影され、小太りの男が空間ディスプレイ越しに商談を始める。

冷静に、冷静にだ……………。

深呼吸を一つ。

「ファンネル展開」

そう呟くと三十機のファンネルビットが俺の周囲に現れた。

これが追加能力の二つ目。ガンダムの再現。

俺自身がガンダムシリーズに出てくる機体になったり、武器やパーツを自在に取り出せる。

何故ガンダムかというと、俺がガンダム好きだから。正確には、その情報を一番記憶してたからだそうだ。

能力を追加するに当たって、その使い方や魔法なんかだと術式などの情報を脳に詰め込まなきゃならないんだけど

あまり知らないものを大量に詰め込むより、なるべく知ってるものにプラスした情報のほうが脳の負担が少ないからだ。

さしあたって俺はガンダムが一番知ってて機体の情報なんかもいくつか記憶してたからこれになったらしい。

しかも結果俺はニュータイプでコーディネーターで純粹種のイノベーターらしいよ。チートだね。

——閑話休題。

今回はクイン・マンサのファンネルビットを使う。

通気口などから進入させ、準備する。今回の目的は奴隷とされている人々の解放。その人たちに怪我させちゃ元も子もない。

慎重にことを進めた。

「……よし」

ニュータイプとしての認識能力で館の中に居る人の数を認識する。

そのなかで、イノベーターの相互理解能力で中に居る人間の思考を理解する。

怯えていたり、人生を悲観したりしているのが四名。下衆が二名。

[illegible]

まずは、少女を取り囲っているサーチャーを打ち抜く。次いで、下衆を狙い打つ。

次いで呼び出す。機体…ガンダムエクシア！！

「目標を駆逐する！！」



壁をセブンスードでぶった切る。

ファンネルからの攻撃を避けたのか防いだのか。この豚野郎は魔導師だったらしい。

こちらに気付いて銃型のデバイスを向けてきた。

「トランザム!!」

すぐにトランザムを起動し、赤い閃光を残して男に肉薄。顔面に飛び膝蹴りをぶちかましてやった。

吹き飛んで壁に刺さる豚野郎。通信機はとっくに狙撃。

もう一人は………ファンネルで撃ち落されました。

「さて」

ファンネルを消して、身体も元に戻して数分。

屋敷中の奴隷っぽい子達を集めてきた。

「あ、あの……」

「ん？」

「こ、こ、この子達にには！ 酷いことしないでくださいっ。お願いしますっ！！」

一番年長さんっぽい女の子。ものすごいどもりながら俺に頭下げてきた。

………襲撃者だと思われてるね。俺、悪者？

## Situation 1

チートって、誰と戦っても弱いもの虐めだよね（後

j a s 「さて、一話です」

?? 「だから俺の名前を出せ」

j a s 「…………次くらいには」

?? 「大体描写が下手すぎるだろう」

j a s 「うるさい。どんな戦い方にするか迷った挙句こうなったんだい」

?? 「威張るなバカめ」

j a s 「だってさ。本気でハイメガキャノンとかぶっ放したら屋敷壊れるじゃん？」

?? 「いや、それはそうだが…………って！ お前まだ原作キャラは出ないのか！！」

j a s 「……………それも次には…………」

?? 「よし、ちょっと来い」

## Situation 2

だから兄とか主は百歩譲っても、父は無いだろう

あれから二十分。事情説明完了。

事情も何も、この子達のことを知って助けに来たという話だけだが。

「えと、ありがとうございます」

「いやいや」

状況がよくわかってないだろう一番小さな双子も、その子に合わせて頭を下げる。

真ん中の、先ほど見世物にされてた娘も安心したのかぐずりながら俺にしがみ付いて離れない。

「んじゃ……こいつら、俺が連れて行くから」

振り向きながら、こちらに銃を向けている豚野郎に言う。

そいつは憤慨したのか鼻息を荒くして、青筋を立てた。

「そいつらは俺が丹念込めて育てた奴隷だ！　ふざけるな！」

「ふざけるな……？」

流石に腹が立った。

そもそも、奴隷という言葉の意味を中世以降の人々は捉え間違えている。それが次元世界にも対応するかは知らないが。

奴隷というのは、古代において非常に有用な才能を持つ者として大切に扱われていた。

金の無い家に才能のある子が生まれた場合、財力に余裕のある者が金を渡して子を預かる。

子を預かったも者は、確かに家事などの雑用もやらせるが、同時に高等教育を受けさせ十全に子の才能を開花させていた。

そうして飛び立っていった奴隷たちは自分を買った者と売った親にも感謝をする。

それが奴隷という制度だった筈だ。

この話を知ってから、俺は奴隷という制度を利用して他人を道具に扱う歴史を嫌った。

何故に人はこうも歪んでしまったのかと、無駄な考察をした時期があったほどだ。

故に、俺はこいつを許さない。

「お前を、殺す」

ツインバスターライフル。

コロニーをも撃ち落す一撃を、目の前の男に叩き込む。……一応威力を絞ったが。

俺の撃ったそれは地面を軽く抉り、男を巻き込んで壁を貫通していた。直径3mほどの風穴を外壁に開けて。

——一応言うが、殺して無いぞ？ 子供たちの前でそんなこと出

来るか。

「さて、行こうか」

一度深く呼吸してから、言う。

子供たちは俺の放った砲撃とも言える一撃にポカンとしていたが、自分たちを酷く扱っていた男がやられたと気付いたのか大きく頷いた。

Situation 2      だから兄とか主は百歩譲っても、父は無いだろう

俺が、ここに呼ばれて早一ヶ月。

かなり生活も安定したもんだ。

次元間移動も、神に与えられた能力の一つだったため簡単にしようとして子供たちを連れて跳んだ。

向かった先は地球、海鳴。リリなのに来てここに来ないのはありえない。

次にやったことは戸籍の獲得。と、彼女たちの服の確保。

ここに落とされた俺は当然、この子達にも戸籍など無い。



ちよつと古めのネットカフェを探して、そこに入る。

子供たちは適当なコートを着させて転移したため、コートの中は結局あのボロ服だ。

各自に名前を聞いて、それぞれ順番にシャワーを浴びさせる。あとはジュース飲んでちよつと待ってて。

パソコンを起動。――『ハッキング』開始。

まずは市役所のパソコンにハッキング、戸籍を偽造。

それからネットバンク経由で銀行のデータを改造。俺の口座を作つて、適当に金額を入れとく。

ん？ファルコン？いやいやそれ以上。コーディネーター舐めんな。

店員にちよつと出てくる旨を伝え、ATMから金を下ろす。

服を適当に見繕って彼女たちへわたし、その後は不動産屋へ行つて家を買った。

「主、どうかしましたか？」

「いんや、なんでも」

あれからを思い出して、これから原作にどう介入していくか考えていたら話しかけてきたこの子。

この子達は皆、名前が無いというから俺が名付けた。といってもまあ、ガンダムで容姿の似てた奴から拝借したが。

つまり名前で容姿を創造してくれってことだ。年齢に合わせて退行した感じで。

最年長で、俺を主と呼ぶこの子はティファ。14歳。

何かと俺の世話を焼く。四人の中で一番俺に遠慮が無いのもこいつ。

「ルイスは？」

「お勉強中です」

真ん中の子、ルイス。9歳。図らずも原作メンバーと同年齢。

聖祥大付属に入学させてやりたいと話したら、すぐに追いつけるように猛勉強を始めた子。

放っておけば多分ぶっ倒れるまでやり続けるぞ、あれ。

「パパーっ」

「おいユラっ」

縁側に座っている俺にダイブしてくる、俺をパパと呼ぶこの娘――ユラ。ちなみにカガリね。あえてミドルネームの方を取った。

ユラを押さえる役目だが、さり氣にこいつも俺を父さんと呼ぶキラ。こいつら双子。

姓は一応、俺の浪川を与えた。なんか知らんがみんなすげえ喜んでた。

で、いい加減名前を出てこない俺の名は浪川<sup>なみかわ</sup>智<sup>ともや</sup>哉。

何故か四人も養ってるチートオリ主です。

「だからよ。お前ら良い加減俺を父呼ばわりするのをやめろって」

「だってパパはパパ！」

「なんか僕の中でもう定着してきたし…」

「17にして二児の父とか正直どうよと思うんだけど」

「もう諦めたらどうですか？」

ティファは全面的にこいつらの味方。

と、言うことで父と呼ばれてます。智哉です。

その晩、状況が動いた。

皆を寝かせて、酒をちびちびやっていたら突然空気が変わった。――これを封時結界と判断。

回り始めていた酒気が一気に飛び、戦闘へと思考が切り替わっていく。

と、そのとき。

「父さん…？」

「キラか。どうした？」

「なんか……」

「——大丈夫だ。おやすみ」

「……うん」

ドアを開けて顔を覗かせたキラの頭を撫でてやると、眠そうに目を擦りながら布団に帰っていった。

キラはやはりコーディネーターの気でもあるのだろうか？ 何故か周囲の異変に敏感だ。

この前、買い物に言ったときにティファに声かけたチンピラにイラッとしたら慌ててキラが止めてきた。

先行き不安といえは不安だな。

——閑話休題。

適当に靴を履いて庭に出る。

周囲の色が変異していることから、やはり結界の類と判断。時期からしても丁度守護騎士たちが動き出す頃だ。

「A、Sからの介入か……」

まあ、俺の能力的にも丁度良いっちゃあ丁度良い。無印なんか何も出来ん。

だいたい俺は魔法なんか使えないんだが、リンカーコアあるんだろ  
うか？ それとも『家族』の誰かか？

「どっちにしても……お前をぶん殴って聞きだしやいいよな？」

「やれるものならやってみるがいい」

上等だ————シグナム。

## Situation 2

だから兄とか主は百歩譲っても、父は無いだろう

智哉「と、いうことでシグナム登場だ」

jas「フルボッコの予定です」

智哉「女を殴るのは趣味じゃないんだが」

jas「じゃあ狙い打つか？」

智哉「もっと悪い」

jas「じゃあ…核を使いますっ」

智哉「お前に月光蝶をお見舞いしてやろうか」

jas「いえ、出来れば皆様の感想をお見舞いして欲しいです」

智哉「だ、そうだ。できることなら前向きな意見が欲しいとな」

jas「それでは、次回に期待が向けられることを祈っています」

「女剣士——いや、騎士。一つだけ聞きたい」

「聞こう」

周囲に他の奴は……居ないな。

だとすれば、俺が相手にすべきはシグナムのみ。

「お前が狙っているのは、俺か？ それとも……家の中で眠っているうちの家族か？」

前者なら正々堂々戦うんだが、後者ならお前を全力でぶっ飛ばさなきゃならない」

「……貴様、我らのことを知っているな？」

あり、ばれたか。まあバカじゃなきゃ気付くよな。



一目で『騎士』と見抜き、『狙っている』なんて回りくどく聞けば魔力蒐集のことを知っていると推測できる。

だけどな。今質問してるのは俺だ。

「まずは俺の質問に答えろ。それからだ」

「――貴方には魔力のようなものが感じられるが、リンカーコアを見受けられない。よって、本来の目的は後者になる」

「本来は、ね」

さて、それじゃあ魔力持ちは誰だ？

どいつもこいつも、不思議な奴ばかりだしなあ……。名前の元になった奴らも、みんな能力持ちだったし。

ティファは最後のニュータイプ。ルイスは人工だがイノベーター。キラは最強のコーディネーター。あ、ユラだけ普通か。

ここで裏をかいて、ユラが魔力持ちか？

「なるほど、つまり今の目的は違うと？」

「正々堂々と言い切る貴方と戦ってみたくなった」

「バトルマニアめ」

「よく言われる」

シグナムはレヴァンティンを抜いた。

俺は……あれにするか。

「もしかすれば貴方からも蒐集が可能かもしれんしな」

「俺に勝ってから言うんだな」

塀と電柱を蹴って屋根の上へ。

子供たちの気配が消えた。シグナムが結界から弾き出してくれたらしい。感謝。

あれ？ 結界の中に入ったってことは、みんなが魔力持ちなのか？  
俺はチートだからいいとして。

まさか本当にニュータイプとかコーディネーターだったりして。しかもそれが魔力に近似してて取り込まれたとか……。

——考察は後でも出来るな。今は戦いに集中しよう。

「守護騎士ヴォルケンリッター、烈火の将シグナムだ。愛剣レヴァンティンと共に貴方と戦おう」

「座右の銘とか二つ名は今のところ無いな。強いて言うなら今は主で兄で父、浪川智哉だ」

起動——ソードストライク。

瞬間、俺の身体はストライクガンダム・ソードストライカーパックへと変換される。

当然フェイズシフト装甲は起動。エネルギーは無限。これくらいは正々堂々の範囲だ。

個人的にはギャンとか一番騎士っぽくていいかなと思ったけど、あれでシグナムに挑むのは勇者過ぎる。ゲルググも大差ない。

「これはいい物だ」とか言ってる場合じゃない。正々堂々真っ向勝負はするけど負ける趣味は無い。

「浪川智哉、ソードストライク…出る!!」

Situation 3      実際、全部の機体使えたら宇宙世紀前半期はネタでしか使えない

まずは一閃。俺は袈裟懸けに、シグナムは真一文字に振るう。

一撃目は拮抗。まさかの対艦刀を弾き返すレヴァンティン…どんな強度？ マジでガンなんかでやったら瞬殺されたかも。

すぐさま流れを殺さず切り上げる。これはシグナムが半身にするこ

とで避けられ逆にカウンターを放たれる。

当然そんなものを喰らってやる道理は無く、左肩に付くパンツァーアイゼンのキャニスターで受け流す。

「つとおあー!!」

「ぐうつ」

鳩尾に蹴りを入れて距離を取る。

正直、俺って本当にチートなのか疑問になるぞ。普通チートって正面からぶつかっても圧倒するもんじゃないのか？

「……………強いな」

「むしろ俺は凹んでるんだけど」

そう言ってマイダスメッサー——ビームブーメラン——を投げる。

弧を描いてシグナムへと向かうそれは当たり前のように避けられる。が、当然投げた後何もしない俺じゃない。

投げると同時に飛び出してシグナムへと剣を振る。

何度も弾かれ、弾き返し、俺へと意識を向けさせる。

ブーメランは弧を描いて投げた場所へと戻ってくる。…つまり、ここへと。

『Warning』

「チツ…」

向こうには優秀なデバイスが居ましたよ。

レヴァンティンが警告を出して、それを聞いたシグナムはすぐにパ  
ンツァーガイストで防御。

そりゃなあ…酷い怪我させるわけにいかんし、出力落としてるから  
弾かれるわなあ……。。

「おおらああっ」

「なにっ!?!」

気合と共に、左腕のロケットアンカーを放つ。それはシグナムの胴体を掴み、こちらへと引き寄せ――

「カートリッジロード！」

「げっ」

俺の間合いに入る直前、俳優。

こっちは仕方ないからシュベルトゲベールの出力を上げる！！

「紫電――」

「ああああすらああああん！！」

「――閃！！」

ん？  
アスランはノリだよ？

結果は当然引き分け。実際のところチートで引き分けて一番難しくない？

俺もちょっと息切れ、シグナムも息切れ。でも満足そうな表情。

目的すりかわるほどのバトルマニアってどうよと俺は思うんだ。

「んじゃ、悪いな」

「なっ!？」

正面きつての喧嘩はここまで。シグナムの背後から一撃。うまく気絶させ、その身体を抱える。

レヴァンティンに頼んで騎士甲冑も解除してもらう。

こっからが俺のターン。原作崩壊のはじまりはじまり。

あ、どうやって後ろに回りこんだかって？

簡単簡単。——トランザム——!





### Situation 3

実際、全部の機体使えたら宇宙世紀前半期はネタで

j a s「ということで、トランザム多用」

智哉「いやいや、お前これじゃチートじゃないだろ」

j a s「お前の能力で相手に合わせて加減したらこんなもんだって」

智哉「チートって一方的にボコるから楽しいんじゃないのか？」

j a s「チートで改造したゲームってすぐ飽きるだろ？」

智哉「否定はしないけどなあ…」

j a s「だいたい、本気で女の子殴れないくせに」

智哉「いや男ってそういうもんだろ」

j a s「というフェミニストの智哉君でした」

智哉「あつ、てめえ！ 言い逃げか！？ ちょっと待てや！」

ユラ「えと…あの…ごいけん、ごかんそう、まっています。——これでいいの？」

ティファ「大丈夫ですよ。それでは、帰りましょうか」

ユラ「うんっ」

## Situation 4

魔導師たちにトライアルシステムを使ったらどうや

さて。シグナムはとりあえず俺の布団に寝かせて…と。

八神さんちはどちらでしたかなあ？

「タ○ンページ」

皆さんご存知黄色いあれで八神さんのお宅を検索。

最近は載ってない家も多いんだけどね…ありましたよ。

…どうすっかな。

シグナム抱えて八神家突入するつもりだったけど、よく考えたら深夜だよ。近所迷惑だよ。

いまさらだけどちよつと面倒なんじゃねえ？ 気絶なんてさせなきゃ良かった。

チートだって所詮人間なんで未来なんて見通せないですよ。

え、単なる俺のミス？ ……言うな。わかってる。

「とりあえずは子供たちの朝飯を作ろう」

考えた結果、当初の予定通り八神家突入に決定。と、なるものかしら朝まで帰って来れないかもしれない。

そういうことで明日——もう今日か——の朝食を作り置きしておく。

書置きの一つでも残せば、ティファが温めてくれるだろう。

……ちびっこたちがぐずらなきゃいいけど。

ったらどうなるんだろう？

「こんばんは」

帰ってこないシグナムを心配したのか、八神家の軒先で立ち尽くしていた女性――恐らくシャルに挨拶。

目の前でミラージュコロイドを解除したため、突然現れたように見えただろう。

驚いたように目を見開いた後、俺が抱きかかえるシグナムに目を移し警戒を顕にする。

「大丈夫。怪我らしい怪我は無い」

どちらかという満足そうに眠ってるように見えるのは気のせいかな。

「貴方は……？」

「シグナムに襲われて返り討ちに――」

「テートリヒシュラク――！」

「――シールドビット」

後方からの攻撃にシールドビットを展開して防御する。

当然攻撃は跳ね返すが、ビットもいくつか破壊される。シールドビットの強度はそこまで高くない。

ちゃんと防御するなら普通にシールド使った方がいいんだけど、今はシグナム抱えてるから無理。投げ出すわけにいかんし。

「てめーっ、シグナムに何した――！」

「なあ、魔導師や騎士っていうのは相手の言い分を聞く暇も与えな

いのが当たり前なのか？」

実際そういうところあるよね。何者だと聞きながら攻撃したり。一方的に宣言して攻撃したり。

お前が質問したんだから少なくとも聞けよって。

「はぁ……盾の守護獣、そのハンマー少女を止めろ。話が出来ん」

「む……」

上空の死角に居たことに気付かれたのに驚いたような声を漏らしながらも、ヴィータを制してくれる。

やっと落ち着いて参謀さんと話が出来るってもんだ。

「シグナムの件は置いておいて………単刀直入に言おう。闇の書と、主を助けに来た」



その後、参謀を名乗るだけあって冷静なシャマルに案内され家の中へ。

リビングで防音結界を張って、お茶を出してもらいました。

シグナムはソファに寝かせて回復待ち。そろそろ復活すると思うんだけど。

まずはシグナムが襲い掛かってきて正々堂々戦って振り返りにした旨を報告。

シグナムの強さを信用してるだけあって信じられなかったようだが、レヴァンティンの報告を聞いて一先ず納得。

それから思い出したようにお互い自己紹介。ヴィータはツンツンしてますよ。

「それで、だ。君たちの主――八神はやてを救いたい」

「どうやってでしょう?」

当然、内面からバグを破壊するに決まってるでしょう。

こちららコーディネーター。プログラムごとどこにかしてやるっ  
ての。

「デバイスを弄るだけの設備があればなんとか」

「無理ですね。闇の書には覚醒した主以外からのアクセスを拒否する機能が付いています」

「それなら一時的に主を誤認させるプログラムを作るだけだ。闇の書のバグを取り除き、正しいものに書き換えれば助けられる」

「……………出来るのですか?」

「むしろ出会ったばかりの俺を信用するのか?」

俺とシャルは視線を合わせる。絶対に逸らさない。

ヴィータとザフィーラはシャルに任せることにしたのか一切口を挟まない。

シャルの目の奥からは疑念と迷いが見える。

俺を信用するかどうか非常に迷っているんだろう。が、はやてを助けるためには藁にも縋りたい思いのはずだ。

「大丈夫だ。俺にも家族が居る。家族のために頑張ってる奴らを、裏切ったりしないよ」

「――っ」

シャルは目を瞑った。……あり、余計なこと言ったか？

「…お願いします。どうか、どうかはやてちゃんを救ってください」

「任せろ」

頼まれた。ここで治癒系のチートスキルあればいいんだろうけど、生憎まともな治癒スキルなんて持ってない。

今すぐはやてを助けるのは不可能という話。

とにかく、守護騎士たちには蒐集の代わりに近接世界の廃棄された

研究所などをさがしてもらいうことに。

「それでいいよな？ シグナム」

「ああ。我らが主をよろしく頼む」

「シグナムっ。起きてたのか？」

「先ほどからな」

実は起きてて軽く狸寝入り決め込んでたシグナムにも了承を貰う。

それから、予備知識としてシャマルにデバイスの基本構造や構成理論なんかの知識を教えてもらってたら案の定日の出を迎えた。

お陰で材料さえあればデバイスの一つや二つ作れそうな気がしてきた。

あ、これってはやてからしてみれば朝起きたら知らない男が家に上がりこんでる状態じゃないか？

## Situation 4

魔導師たちにトライアルシステムを使ったらどうや

jas「連日投稿が辛い……」

智哉「まあ、授業も始まったしなあ」

jas「そして眠い」

智哉「知るか。続き書け。人間一日や二日寝なくても死なない」

jas「……………ちよつと表出ろや」

智哉「上等だ。雑魚の分際でチートにたて突くとどうなるか教えてやる」

ティファ「仕事を放棄した主が変わって、この場を受け継ぎます」

キラ「よろしくお願いします」

ティファ「まずはPV10000を大変感謝します」

キラ「まさか初投稿3日目でここまで行くと思ってなかったって」

ティファ「所詮駄文ですが」

キラ「……………姉さん、黒いよ」

ティファ「続いて、感想を書いてくださった方にお礼を」

キラ「こういうのは作者としての原動力になります」

ティファ「ただ、頂いたミーティアは……………」

キラ「……………使えないよね。普通」

ティファ「とりあえず…魔王様を相手取るときくらいには……………」

キラ「砲撃VS砲撃で周りの地形が変わっていくのが想像できるよ……………」

「……………」

ティファ「そこは作者と主にまかせましょう」

キラ「はいっ」

ティファ「それじゃあ今日の夕飯の買い物に行きましょうか」

キラ「あ、じゃあ僕はユラを連れてくるよっ」

## Situation 5

ハーレムって聞こえはいいいけど肩身狭くて仕方ない

さすがにこのまま会うつていうのは常識的にも世間的にも問題を感じる。

と、言うことではやてが起きてくる前にお暇する。

「何かあったとか、丁度良い場所が見つかったら連絡を」

名刺を渡しておく。一応俺の仕事はシステムエンジニアってことにしてあるのだ。

茶の礼を言って八神家を出る。

この後は…どうするかな……。闇の書問題はこれで殆ど難なく終わりそうだし。

三期への介入の前準備でもするか？ いやいや、十年後だぜ？

うーん…子供たちの進路も考えなきゃなあ…。ティファは来年高校生。キラとユラは来年から小学生。ルイスは編入するし。

ティファはまあ、自分で進路くらい決めるだろうし。双子は聖祥でいいか？ルイスも居るだろうし。

げ、そういえばルイスたちも何かしらの力もってるかもしれないんだっけ。

なにかの拍子に魔導師組と遭遇してそっちの道に行きたいとか言い出したりして……。

あいつら無駄に正義感強いしなあ。

「――主、どこまでいくんですか」

「お？」

家の前を通り過ぎるところだった。

「態々待ってたのか、ティファ」

「いえ、なんとなくお帰りかな…と」

「なんというニュータイプ」



「…?」

調べるまでも無く確定な気がしてきた。もしくは現在進行形で覚醒が進んでいるのか。

それにしても。

「主、って言うのも正直どうかと思うんだけど。俺そんなに身分高く無いぞ?」

「ではご主人様で」

「虐めか?」

「いいえ」

「……………始めてあったときはもっと感情豊かで可愛かったのに、なんでそんなにかたつくるしいかなあ」

「私はこのような感じです」

「『こ、こ、この子達にには! 酷いことしないでくださいっ。お願いしますっ!!』…だったか。涙目で」

かあつ、と頬を赤くするティファ。

今度はぷいっとそっぱを向いて家の中に入って行ってしまった。

「…ばか」

聞こえてるし。なんか可愛いし。

Situation 5      ハーレムって聞こえはいいけど肩身狭  
くて仕方ないと思う

「いや、別に俺がつてわけじゃないけどさ。」

ん？　なんか電波受信した。わすれよう。

現在向かっているのは、私立聖祥大学付属小学校。隣にはルイス。

この度、編入することになりました。

私立なのに入学試験とか無い謎。理事長に書類いつた瞬間承認され  
たらしい。俺は何もして無いぞ。マジで。

大丈夫かこの学校…。

「兄さんはこの後何かあるの？」

「一応、お前の保護者だからな。呼ばれてるんだよ。年齢的に問題

視してるのか…?」

「兄さん仮にも未成年だもんね」

「仮でもなんでもなく正真正銘未成年だ」

未成年は酒を飲んではいけません。(↓S i t u a t i o n 2)

「ま、ルイスは気にしなくてもいいさ」

「いいの?」

「良いも何も。お前はしっかり勉強して友達作って、楽しくやればいい」

「うん」

友達、といえば。

俺が闇の書事件を解決してしまうと、なのはとフェイトが会えないのか?

そうでもないか。結局会いに来るだろう。ちょっと時期が遅れることになるのは勘弁して欲しい。

学校に到着して、職員室へ。

ルイスは担任に連れられて教室へ、俺は応接室へ。

「おはようございます」

「おはようございます」

応接室に入ってきた女性の挨拶を丁寧に戻す。

その後ろには男と…メイド。誰も彼もまあ美形なこと。

まずわかることは、こいつらは学校の教員じゃない。

「さて、どのような用件でしょう？」

「私はこの街の地主である月村家の長女、月村忍といいます」

「おや」

あらあら、月村家でしたか。つまり後ろの二人はボディガード代わりの高町恭也とノエル・K・エーアリヒカイト。

警戒されてる警戒されてる。さっきがびんびん伝わってくるよ。

「最近、市役所の方の戸籍一覧とうちで取ってあるバックアップとで差異が生じてまして。それが――」

「俺：もしくはうちの家族であるか？」

「――はい。あなたのご家族になります」

視線が俺を射抜く。この場で詐称は許さないとのことだ。

どうするべきか考える。この状況はいささか予想外だ。

適当な嘘でこの場を乗り切る自信が無いとは言わないけど、それでこれからのルイスたちに被害が行くのは避けたい。

逆に月村家や、運がよければバニングス家、高町家が味方についてくると地球で行動を起こすのに随分と有利。

話してみるか……？

「……正直な話、この学校って私の妹や彼の妹、ほかにも大企業の経営者のご家族とか居るから  
身分不明の人って近くに置いておきたくないのよ」

「身分不明というよりは身分がないって言う方が正確なんですけどね。  
だから作ってたってとこです」

「身分がない……？」

「私の家族たちは皆、人身売買の被害者たちでしてね。私がその買主を潰して引き取ってきたんですよ」

「……………」

この話の信憑性を探っているようだ。まあ、普通に考えて人身売買なんて耳にしないしな。

実際これは嘘じゃない。次元世界という規模をサバ読んではいら  
ない。

「そのバイヤーたちから見つかる恐れは？」

「無いですね。痕跡は全て消しましたし、貴方がたでもなければ戸籍のことについてもばれる筈は無かった」

「そうね。確かに巧妙に消されていた」

さて、これで気付かなきゃいいけど。

そこで「ひとついいか？」という恭也さんの声。

「君の家族のことは分かった。が、君自身の戸籍が無い理由がわからない。君は明らかに日本人だ。戸籍が無いというのは……」

ちっ。ばれた。

こっちはどうするべきかと。まさか上位の存在なんて話は出来ないし、次元世界の規模でも話は進められない。

だからといって地球規模で話が纏められもしない。

「そこはちょっと：察してくれると嬉しいですね。色々説明できない事情がありました」

「……………よし！　じゃあそれでオッケー！」

「しっ、忍！？」



「だってこの人、悪い人じゃないと思うし。年下にかたつくるしくするのめ疲れたし」

絶対後者が本音だこの人。

恭也さんが頭抱えてため息を吐く。同情しますよ。

それから、技術を買われて少々仕事の話がしたいと月村家に招かれました。

とりあえず恭也さん、本当に貴方の彼女さん大丈夫ですか？　こんなテキトーで。



智哉「貴方たちはこんな大量破壊兵器ばかり用意して俺に何をやらせる気だ？」

ティファ「特にこの無印・A・S期において使えなさそうなものばかり……」

智哉「だいたい俺は平和的に話を進めたいんだが……」

ティファ「何故にシリーズでも明らかに火力の高いものをチョイスするんでしょう」

智哉「宇宙世紀前半期はネタだといったら即行で宇宙世紀外を攻めてきたしな」

ティファ「そして私が『ティファ』だからですか？ Xを妙に攻めてくるのは」

智哉「Gビットくらいだろ。今使えそうなの」

ティファ「闇の書問題も戦闘なしで解決に向かってる現在、サテライトとか海鳴で撃つ意味わからないですし」

智哉「お、メールだ……作者より。『頑張っとうにか出してみます』だと」

ティファ「企画倒れの香りがします」

智哉「奇遇だな。俺もだ」

智哉「何はともあれ、次回に向かって羽ばたけっ  
○○○○<sup>ビー</sup>」

月村家に仕事を貰うようになって数日。

内容が微妙にアングラだったり、明らかにオーバーテクノロジー要求してるものもスルー。

ルイスが友達になったらしい子の名前を聞いてちょっと驚いたけどスルー。

キラだけじゃなくてユラの性能もなんかおかしいことにも気付いたけどスルー。

色々問題はある気がするけど、無視すれば随分と平和な日々だった。

「月村家……下準備………」

ふと猫がじゃれ付いているテレビを見て、月村家と関係を持ったことと、この前考えていた三期への下準備の話が繋がった。

俺としては、三期のスカたちはある程度更正の余地があると見て  
いる。

おれのせかい  
現実世界に居た時に三期のアニメを見た感想では、あれは自分の欲  
望に忠実なバカだ。

なればその方向性を修正しつつ、選択肢を広げてやればあれは素晴  
らしい人材といえる。

最高評議会の指示による鬱憤からの世界への復讐という視界狭小は、  
ある意味思考誘導とも言える。

実際のところ、俺は人体実験なんていうのは科学者としてアリだと  
思っている。

新薬の臨床試験なんていうのもある意味人体実験だし、命を掌に乗  
せているといっても過言ではない。

要はやってる本人の意識の問題だ。

法律なんていうのは基本的に作った奴らの都合のいいようにある程  
度なっているんだから、時と場合によっては邪魔なだけだ。

そして、『俺はガンダムだ』。

良い具合に月村家もロストテクノロジーという、過ぎたる科学の力  
を持っている。

あれ、ぴったりじゃない。

「第三勢力……それもアリだな……」

「……?」

何故か俺の膝の間に収まっているユラが首を傾げたが無視。

とりあえず、施設さえあればはやては助けられるしA・Sは終わる。

実際のところ、はやてやなのはたちが管理局で働こうが何しようがどうでもいい。

自分の信念さえ貫いてもらえれば、それもまた運命だ。敵対しようがしかたない。多分、負けないし。

他者のいいように使われるのならそれは己が愚者であっただけ。

また、真に賢者であるか愚者であるか。正義であるか悪であるか。全ては終わってから考えることもある。

俺が許せないことは、家族を蔑ろにすることと子供を傷つけること。

それだけ守ってくれれば好きなようにやってくれ。

さらにもう一つ、この案には利点がある。

俺はこれからもこのユラやキラたちのような、一部のふざけた輩に蔑まれた人たちを助けていくつもりだ。

そもそもそれが神アイツとの根本的な目的だし。

ぶっちゃけ非合法クズに対して非合法チートで挑むため、何かかしら大きな活動してたほうが隠れやすい。

望んで戦うならいいけど、望まない奴には平和的に暮らして欲しいしな。管理局なら殆ど前線行きになりそうだ。

「と、難しく考えてみたけど本心は『面白そうだから』」

「なあに？」

「ユラは難しいことと、面白いこと。どっちが好き？」

「面白いことっ」

「だよなあ？」

はい、台無し。



だってさ……子育てとか、保護者役とかしてると……こういう年相応のバカっぽいことも考えなくなるだろ？

見てみるよ…俺、本当は17なんだぜ？

貯蓄は出来たからそんなに頻繁に働かなくて良いとはいえ、親や保護者としての責任は常に付きまとうんだよ。

小学校行ったルイスは良いとして、来年からのティファやキラたちの勉強も見なきゃならないし。

家事はティファが手伝ってくれるし、子供たちも協力してくれるけど基本俺だし。

税金とか普通この歳であまり触れないようなものがつつりやらなきやだし。

頭良いとはいえ、下の二人は基本子供だし。ユラが奔放すぎるし。

………全国の親御さんを尊敬する今日この頃。

Situation 6 全身を装甲で覆えば次元空間で航行艦  
とも戦えます

さて、忘れてましたこの方々。

なかなか丁度良い施設も見つからない——そりゃ、無人で電源とか  
生きている施設なんてそうそう無い——ことだし、

はやてとの顔合わせも兼ねて八神家に顔出そうとしたら接触しまし  
た。

「ちょっと、来てもらおうか？」

「しかしそれはナンセンスだ」

「いいから来い」

ぬこ——もとい、猫姉妹。

そんでどこかで見ているはずのギル・グレアム。

あゝ、テンプレ。A・Sに手を出したオリ主のテンプレね。

なんだかなあ……こいつら大人しく……しててくれる筈無いよなあ……。

口の中で起動キーを呟く。

——トランザム。

トランザムの使用率高いなあ……。まあ、これ一番手っ取り早い強化だし。

ALICEとか他の強化系よりタイムラグ少ないし。

ついでにダミー人形をその場に出現させて離脱する。

話聞かない子供と話聞く気ないバカを相手にするときは、殴るか逃げるに限る。

この場合は八神家もう目と鼻の先だし、面倒なので後者をとった。

——俺は、殴っておくべきだったと後悔することになる。

## Situation 6

全身を装甲で覆えば次元空間で航行艦とも戦えます

jas「アンチ気味だけど、なのはたち原作組が管理局に行くのは  
どうでも良いオリ主です」

智哉「実際の。人間なんだから働いて金稼がなきゃ生きてけないし」

jas「…そこか？」

智哉「別に大きな組織で自分の才能を発揮するのは悪いことじゃない  
い」

jas「ふむ」

智哉「その中でNOと言えない人種になった時点で終わりだがな」

次回予告。

「またな、兄ちゃん」

「手を引け」

「アンタみたいな奴が居るから、戦争がなくならないんだっ」

「邪魔なんだよっ」

「皆さん引いてくださいっ。核を使います!!」

次回、Situation 7 将を射んと欲して先ず馬を射た  
ら将がバーサーカーに

※注 次回予告が本当かは知りません

## Situation 7

オリ主だって、チートだって、結局神じゃない

Side Hayate. Y

「ちょっと待ってな」

チャイムの音に玄関に向かう。

ドアを開けて、そこにおったのは背の高くてさっぱりした髪型の兄ちゃんやった。

「えっと…どちらさんですやろ？」

「ああ、シグナムたちは居ないか？」

シグナムたちは今ちようどみんな出払ってる。

そのことを伝えて、中で待ってもらうことにした。

案内すると付いてきてくれる兄ちゃん。私はまずはお茶を入れることにした。

お茶を淹れて、兄ちゃんの向かいに座る。少しお話でもして時間を潰してもらおうと思ったんや。

———そしたら、思案顔だった兄ちゃんが突然私に覆いかかってきた。

「んんっ!? うんんんん!!」

口を塞がれ、腕も掴まれて身動きが取れない。

脚は元々動かないからこれで私は何も出来ないことになる。

ど、どうなるんやろ……私、何されるんや……。

「主、ただいま戻り——貴様っ!! 何をしている!!」

「ぐぼっっ」



少し不安になったところで、丁度帰ってきたらしいシグナムが兄ちゃんをぶっ飛ばして助けてくれたんや。

S i d e o u t

S i t u a t i o n 7      オリ主だって、チートだって、結局神じゃない

「いててて……」

「す、すまん……」

シグナムに殴られた腹部にシップを貼る。

いやはや、はやてに見知らぬ人間を招きいれたら危ないんだぞと身をもって教えてやろうとしたらこのざまだ。

自業自得っちゃあその通りなんだが、なんだか微妙に納得がいかない。

だってさ。いくら家族の知り合いだって行っただころで本人に確認が取れてないのに招き入れちゃダメだろ。

シグナムはシグナムでタイミング悪いしなあ……。

「そんじゃ、改めて。浪川智哉だ。近所でシグナムに喧嘩売られてな。返り討ちにした仲だ」

「それって仲悪いんとちゃうん!？」

「いやいや、今では共犯者の仲だ」

「悪い方向に統一されてるやないかつ!」

「既に何人の辻斬りに成功したか数知れん……」

「どこからが嘘なんやああ!」

「浪川っ。お前も調子に乗るな!」

おっと。何故か暴走してしまった。

なんかこう…ぽんぽんツツコミが返ってくると気分良くてな?

「じゃ、シグナムとは友人や盟友と称しても良い仲だ」

「ふーん、そうなんや……」

「で、だ。シグナム…お前、どういう教育してんだ? この子、確証も無いのにお前の知り合いだって行ったら家に入れたぞ?」

「いや、その、教育…というか、私の方が世話になっている…というか」

知ってる。

だが、それとこれとは別問題だ。

関係がどうあろうと明らかに年上であるシグナムやシャル、素体が狼であるザフィーラや早くも年下に見えるヴィータだって

はやてよりは長い時を生きてるし、むしろ俺より人間という種の危険性を知ってるんだからそこは注意しないと。

いつか本気で襲われるぞ。

「うーん…でも、兄ちゃん悪い人に見えへんかったしなあ」

「悪い人に見えなかったら何されてもいいんか！」

「何されてもってのとは違うんよ？」

親御さんが居ないことをどうこう言うつもりは無いけど、ちょっと人の怖さを考えるべきかなあ…。

年齢一桁の家族が三人もいるせいか、こういうの気になる。変わったちまったな、俺……。

その後も、二時間ほどくだらないけど楽しい話をしてきました。

はやてもニコニコしてたし、多少は楽しめたんじゃないかと。

「じゃ、帰るわ」

「また来てな。智兄い」

「今度は妹も連れてくるよ」

「うん。よろしゅう」

「と、これ。俺のTEL番。何かあったらすぐに電話して呼べ。基本十秒以内に登場してやる」

「ええの？」

「あ？ 迷惑とか考えてるなら十年早い。俺より偉くなってから言え」

子供が相手の迷惑なんか気にしてんじゃないっての。

むしろうちの奴らの最近の自重しなさをどうにかしてくれよ。

あ、智兄いとか呼ばれるようになりました。

「浪川、ちょっといいか？」

「おう。それじゃあな」

「ほなまたな」

手を振るはやてに軽く手を振り返して、八神家を離れる。

道の一つ曲がったところで、付いてきたシグナムと対面する。

「で、どうした？」

「都合の良い施設が見つからない。シャルの診断では主の状態も少しずつ悪化してきている」

「…そうか。時間に余裕は？」

「あまりない。こうなったら、どこかの施設を制圧するか？」

「実際ミッドの違法研究施設なんかを制圧してもいいんだけどな…。例えば作業中に半端に管理局が来ても面倒だ」

「私たちが抑えればいいだろう」

「…：闇の書を弄るんだからそのプログラムであるお前らも暫らく身動きなんか取れないぞ？」

「む……」

「だいたい、それで目を付けられてはやてが管理局に追われるのも問題だと思うがな」

どっかかしらにプロジェクトFや戦闘機人の研究施設はあると思うが、それは恐らく最高評議会の息がかかってる。

手を出せば無駄に力を入れて管理局が動き出すだろう。

……………戦闘機人？

——自動人形？

「ちょっと待て。どうにかなるかもしれん」

「それは本当か!？」

あれ、月村家に協力してもらえば何とかなるんじゃない？

ファリンさんたちを作った機材があるなら、オーバーテクノロジーの一つや二つは余裕であるだろう。

それをいくつか流用してあとは魔力関係とかデバイス関係の専用機

器さえ繋がれば……。

「：数日待ってくれ。少し交渉してくる」

「その相手は、信用できるのか？」

「この世界の裏の方にも通じてる人物だからな。理解は深い筈だ」

「わかった。私たちは何をすれば良い？」

「電源を繋げば動くような機材を探して欲しい。この世界には魔法やデバイスを操作する機器が無いからな」

「了解だ」

そうなれば話は早い。

急ぎ家に帰り、交渉の準備をしなきゃ。

：そーいえば忍さんってマッド気味なんだっけ？　　うわ、ちょっと心配になってきた。

軽く走って家に帰る。



「ただいま――」

――扉を開くと、我が家の空気は普段と違うものだった。

## **Situation 7**

**オリ主だって、チートだって、結局神じゃない（後**

最低でも二日に一度更新つもりだったのが出来なかったので頑張  
て執筆。

連続投稿します。

## Situation 8

チートオリ主の過去にも色々あるんだよ

この空気、知ってる。

歓迎せざる者が居る気配。

———ドクン。

ふざけるな。そんなものはありえない。

頭の中で、二度繰り返す。

「進入者…二人」

何となく感じ取る。これがニュータイプのか。

警戒を最大限に、リビングへと歩いていく。

そして

見つけた

倒れ付す

四人の家族

「ようやく帰ってきたか」

Situation 8

チートオリ主の過去にも色々あるんだよ

「てめえら……」

一瞬取り乱しかけた。

が、俺の中のニュータイプの方が四人の無事を教える。

そして、この二人の男が何者であるかも。

「闇の書から手を引け」

「言うことはそれだけか？」

「何……？」

「朕が必要みたいだな…盛りの付いた獣が」

ダメだ。

理性が利かない。

俺の中で、何かが呼び覚まされていく。

俺という存在から忌々しいあれが呼び出される。

すてきじゃなかった  
捨てたはずの過去が。俺を蝕むあの思いが。

そして、俺ではない彼らの思いが。

どこかで、枷（seed）が弾けた。

「ALICE：MEPE：DFF…」

口が勝手に動く。腕が、脚が、俺の身体が俺の意識しないところで動いていく。

ALICEとは学習機能を超え、独自の機体操作を可能とした人工知能を指す。

この人工知能は最も最適な行動を弾き出し、自動で十二機のフィン

ファンネルを自律操作する。

また、MEPEとはF91ガンダムに採用された金属剥離効果による『質量のある残像』を生み出す。

現在は装甲を展開させていないが、その結果だけが俺の身体に適用されていく。

俺の視界も、思考もとてもクリアで、この空間の動きが全て掴めるようだ。

「動くなっ」

そう言って俺の居た場所に手を向けるが、遅い。

そこにあるのは既に残像。

俺はもはや貴様の後ろに居る。

「ロツテ!!」

（恐らく）アリアが俺の目の前に居るロッテに注意を促す。――遅いと言っている。

人体の急所、肝臓の位置に拳を叩き込む。

苦悶を漏らして吹き飛びリーゼロッテ。しかし、二メートルも吹き飛ばずに踏みとどまる。

その間にリーゼアリアが気を失っているユラに手を翳す。

「なっ!？」

甲高い音と共にその手から放たれた魔力の矢は弾かれる。

俺の意志とは関係なく、ALICEによってユラたちにはフィンフアンネルフィールドによる防御がしかれている。

そして、俺は地を蹴っていた。

攻撃が防御されていることに目を見開くアリアの頭を掴んで、床に叩きつける。

――床が凹んでしまった。ああ、これ以上家を傷付けちゃいけないな。



「このおとおお！」

「動くな」

身体を起こそうとしたアリア、殴りかかろうとしてきたロツテの両方の眉間にビームライフルを突きつける。

よってアリアは中途半端に身体を起こした状態で、ロツテは振りかぶった手を振り下ろせずに動きを止めることとなる。

怒りは収まらない、が家をこれ以上壊しては皆が悲しむという思いが俺を踏み留めた。

ここが外だったらこいつ等が挽肉になるまで止まらなかっただろう。

「闇の書は――夜天の書は俺が助ける。お前たちが手を引け。余計なことをすればお前たちの主ごと駆逐する」

「あれは！ 貴様のような奴にどうにかなるもんじゃない！」

「うるせえよ。抗うことを諦めたバカは黙ってろ」

「私たちはこのために何年も我慢してきたんだ！ それをのこのこ――」

「だあってろ！！ その煩いドタマぶち抜かれてえか！！」

口を閉ざした二人が足元に魔法陣を発生させて、転移する。

俺はビームライフルを落とした。

「……………クソが」

未だ目を覚まさないティファたちをそれぞれの布団に寝かせ、散乱した部屋を片付ける。

片付ければ片付けるほどなんか空しくなってくる。

一通り片付け終われば、既に夜。

仕方が無いので冷蔵庫から酒を取り出して窓枠に腰掛ける。

「…………ちっ」

気分が優れない。

段々荒んでいくのが、ささくれだっていくのが分かる。

嫌なことを思い出した。

なのはの世界に来る前に忘れたと思っていた。

なのはの世界に来た後はすでに切り捨てたと思っていた。

俺というアイデンティティを形成した一つの事件。

出来ることなら死んでも遭遇したくないであろうその場面。

まさか、自分の家族が。

——朝起きたら全員殺されていたなんて。

ビールの缶を呷る。

オーバーラップした風景を頭を振って振り払う。

悔しいが俺は割りと女々しい人種だ。いつまでもぐずぐずと引き摺るタイプだし、一度思い出したらなかなか忘れられない。

それから、明日は月村家に交渉に行こうと思っているのに、酒を飲み続けた。

眠りにつくまで呑み続け、本当に眠りについたのはもう夜空に浮かぶ満月の色が空と同化し始めた頃だった。

## Situation 8

チートオリ主の過去にも色々あるんだよ（後書き）

jas「はいはいはい、こんにちわ」

智哉「なんか文章がおかしいぞ」

jas「眠いから。ちゃんと頭働かないから」

智哉「書きながら船漕いでる辺り器用だよな」

jas「さてさて、次回予告でもするか」

智哉「って前回の完全に嘘予告じゃねえか!!」

jas「大丈夫だよ！ 十分の一くらいの確立で本当の次回予告やるから！」

智哉「どっちかに統一しろっ」

明かされ始めた智哉の過去。

過剰なまでに家族を守ろうとする智哉に、一体どんな真実が隠されているのか！

次回、守りたい人。

智哉「ま、まともな予告な気がする」

j a s 「感想、意見まっています」

朝、日が出て間もない時間帯に目が覚める。

いつまで経っても寝られなかったんだから、殆ど寝てないことになる。

それでも、今日は今日。これから寝るわけにもいかないから洗面所で顔を洗う。

「……………ひっでえ顔」

普段の俺からは考えられないような腐った表情。

こんなもの、流石に家族には見せたくないな。

さっと朝食を作り、ラップをかけた。

家の陰になる部分にALICEを搭載したGビットを配置して、家を出る。

適当に歩いていくと、街を一望する小高い丘に到着した。

自動販売機でコーヒーを買って、ベンチに座る。

「あ~~~~~~~~」

意味の無い発声。

朝の透き通った空気を肺に入れることで、少しは気分も晴れていく。

そこで、足音。

土を踏みしめる音が耳に入り、そちらへと視線を向ける。

「あ……………」

「た——っ?!」



高町なのは！？

そう叫びそうになったのをギリギリ抑えた。

特徴的ツインテール。首にぶら下げた赤い宝石。レイジングハート

多分、恐らく間違いない。

ああ…そういえばこんな感じのところで魔法の練習してる描写があったっけ？

「…すまない。ここは君の場所だったか」

「あ……………」

そう言ってその場から立ち去ろうとした。

「ま、待ってください！」

Situation 9      ガンダムで回復系補助って無いかなあ  
……

なのはに呼び止められた後、二人でベンチに座って沈黙。  
既に五分は経過している。

「それで、何で俺を引き止めたんだ？」

「それは…えと…その……」

「ん？」

「……………だって、泣いてるみたいに見えたから」

ああ、そうか。

ガキの頃のなのはってそういえばかなり感応しやすい子だったんだっけ。

——ダメだ。今日は抜けきってるな俺。『そういえば』ばっかりじゃん。

「そっか…」

「あの、何かあったんですか？」

「……それを聞いてお前はどうする？ 何も出来ないのに」

「話すだけで気分が楽になることだってあると思います。それに、何か出来ることがあるかもしれないじゃないですか！」

「いや、無いね」

ばっさりと切り捨てる。

これは俺の問題だし、だいたい助けてもらう義理も無い。

っと、なに俺はこんな子供にムキになってんだ？

「それでもっ、私は泣きそうな人を放っておきたくない！ 貴方からすれば子供のいうことに聞こえるかもしれないけど！

私はそんなのやだっ！」

「……私は、か」

——誇りを持てるように生きて見やがれ！

昔、聞いた言葉だ。

ああ、思い出した。俺がどんな人間になろうとしてたか。

何でこんなにも気分が悪いか。昔のことを思い出したからだけじゃなかったんだ。

自分に立てた誓いを破ろうとしてたから、無意識にも自分を責めていたんだ。

「——サンキュ。なのは」

「え……？」

俺はそうしてトランザムを使用してすぐにその場を離れた。

一時置いて、ビルの屋上。

朝の喧騒が街を支配し、足下では多くの人が学校へ会社へと足を速める。

「おい、神。出てこれるか？」

空に向かって呟いた。

意味は無い気がする。でも、意味がある気がした。

<——なんだ？>

「お、意外と本当に出てくるんだな」

<…やりたいことは何となく想像できてるよ>

「じゃ、頼むわ」

<本当にいいんだな？>

「あ、じゃあ一つだけいいか？」

<なんだ？>

「叔父さんと叔母さんに。どんな形でもいいから有難うと」

<わかった。それじゃあ、さよならだ>

「ああ」

<この世界に、少しでも悲しみが無くなる事を祈ってる>

「任せろ」

そうして、アイツとの繋がりが本当に途切れた。

今何をしたか。

俺の現在の本当の状況は、まさに夢の中だった。

現実世界の俺は眠っている状態ということだ。が、今完全に俺を切

り離してもらおうことにした。

現実の俺は死に、この俺が真実となる。

神が深く干渉できるのは一個下の世界の存在である俺<sup>アイツ</sup>だけ。

だが、今の俺はこの世界の住人となった。これで神は俺にもこの世界にも干渉することはできない。

これが俺の決意。俺の誇り。

守ると決めたものはどんな手を使ってでも守るし、手の届く範囲の悲しみは力技でも取り除く。

——俺は、家族と、大切な人と、全部守れるような人間になる。

俺が誓った言葉。

この守る対象に、この世界を入れてもいいだろう？

「と、いうことで」

まずは兄であることも、主であることも、父であることも受け入れてしまおう。

それが俺がこの世界に居る証だ。



jas「と、いうことでこの小説に原作キャラがなかなか出てこない理由にこんな訳が」

智哉「別に後付ってわけじゃないぞ！　ほぼ初期からあった設定だ！」

jas「……………なんかちょっとグダグダになってきた感は否めないですけど」

智哉「だが、これからはかなりの頻度で原作キャラと交流していく筈だ」

jas「ではではっ。次回予告！」

「ルイス・浪川だよ」

「わ、私はフェイト・テストロッサ」

「革新……だと……」

「いいですか、忍さん」

「警告は二度目だ。次は無いぞ。ギル・グレアム」

この世界への永住を決意した智哉。それにより積極的になる原作への接触。

動き出す世界。覚醒していく子供たち。

ついに智哉は武力介入を開始する！

次回、三度目だってバカ正直

※今回の予告は何処まで本当かな……？

午後、忍さんとのアポが取れたので月村家へ向かう。

ルイスは昼食の後、すぐに出かけてしまった。

キラとユラはティファと共にお菓子作りに挑戦するらしい。出来たら食べて欲しいとお願いされた。

四人とも昨日のことは覚えていないらしい。

幻術魔法でも使っていたんだろうか。気付いたら眠っていたことになっている。

これは助かった。あの猫姉妹も多少は気が利くみたいだ。

「で、お前何してる」

「兄さんこそ」

いや別に分からないわけじゃないんだが。

月村家に向かう途中、その月村の門から妹その他友人と思わしき少女たちが出てくる。

……うん。それが誰かも分かるんだけどね。

落ち着いた雰囲気の子は月村すずか。その隣はアリサ・バニングス。

皆さんご存知高町なのは。フェイト・テストロッサ。

はや——くもないか。俺が止めてなかったらなのはが襲われてる筈だからな。

「あ、あなたはっ」

「はじめまして。ルイスの兄兼保護者の浪川智哉だ。ルイスが世話になってるな」

この前顔を合わせたなのはが驚いているが、それを遮って自己紹介する。

なのはには人差し指を立てて口に当て、ウィンクと共に内緒にして欲しい意志を伝える。

こくりと頷いたなのはは偉く従順に見えた。

「こっちは月村すずかさん。アリサ・バニングスさん。高町なのはさん。同じ日に転入してきたフェイト・テストロッサさん。

この前話した人たちだよ」

「おう」

まさか、早速ルイスが友達になったという奴らの名前にこの四人が上がるとは思わなかった。

実際そんなことは些事だけだな。ルイスの人生はルイスのものなんだから誰と友達になろうと関係ない。

「それで、何で兄さんはここに？」

「ん？ 仕事先」

「えっ、うち…ですか？」

親指を立てて月村の家を示してやれば、さすがが驚きを表す。

これが偶然だったら世界は狭いねえ、なんていうところだが微妙に意図的なのが苦しい。

よく考えたら海鳴にこなければそうそう原作に関わることだって無かったわけだし。

「忍さんからちよいちよいとね」

「あ……お姉ちゃんが最近楽しそうにしてるのはその所為だったんですね……」

「楽しそう、というかマッドな雰囲気じゃないか？」

「え」と……」

すずかは明言を避ける。賢明な判断。

ちなみに沈黙は肯定。家族から見てもマッドにしか見えないそうですよ忍さん。

別にこいつらに会うのが目的だったわけじゃないから、適当に言葉を交わしてその場を後にする。

この後は五人で翠屋に向かうとか。

俺はそのままチャイムも鳴らさずに月村家へ。塀は飛び越えました。

アポをとったときについでに警備システムの動作チェックをして欲しいと頼まれた。

そんなの恭也さんがやればいいじゃないですかと言えば、曰く

「俺はよくやっているから参考にならん。他の者にも通用するのか調べる必要があるし、彼もかなりの実力者だ。大丈夫だろう」

……まあ、モルモットという奴ですよ。っていうか一目で見抜く御神の剣士がこえーよ。

ということで、早速進入開始。

「で、到着」

「ええええっ!?!」

所要時間五分。いやいや、絶対に恭也さんのほうが早いですよ。てな感じで。

鎮圧用の高圧ゴム弾や、電流トラップ、猛犬や、落とし穴、レーザー、毒針の乱射。ああ、高水圧銃なんかもあったな。

ぶっちゃけた話こっちはニュータイプなのでどこでどんな攻撃が来るか大体察知できるとです。

全部素面で反射してやり返すであろう御神の剣士様なんかとは比べてはいかんです。



と、ネタはどうでもいいな。

「さて、本題に入りましょう。仮にも人命に関わる話だ」

「……そうね。それで何が必要なの？」

「それがですね…前提となる話をするべきか、本題に入るべきか。いきなり本題に入っても色々問題ありますし、

前提の話をすると色々長くなるんですよね」

前提といえば、まずは次元世界と魔法の話から夜の一族や自動人形のくだりを知ってることを話さなきゃならない。

が、それを話さずにいきなり研究設備を貸してくれなんていっても話が拗れるだけかと。

「いいわよ。めんどくさいから本題いっちゃってっ」

「うわーい」

ここに恭也さんが居たら絶対に怒るぞ。

でも本人がこうやって言うので仕方なく嘆息。

「月村家にあると思うんですけど：ロストテクノロジーの研究設備を」

「————何処でそれを？」

急に、忍さんの表情が冷めた。

友人に対するような朗らかなそれから、一族の当主としてのそれに切り替わる。

「どこでもいいでしょう。俺は一族についてどうするつもりも無いし、都合よく過ぎた科学力を扱う人たちが居ただけだ。

とある——これもロストテクノロジーの一種ですがね——物がありませんして、それがバグって少女の命を蝕んでるんですよ。

が、俺にそれを直す技術があらうと設備が無い。そこで月村家に自動人形を整備している施設を借り受けたい、ということですよ」

「……………」

またこれだ。忍さんの探るような目。

俺の真意を探っている。この話の内容の真偽も。

だがある程度暈したとはいえどれも事実。俺に後ろめたいことは無いので視線を逸らさない。

しかし、忍さんの目があか——

「げっ」

目を逸らした。

「あ、目を逸らした。後ろめたいことがあるんだな？」

「卑怯だっ」

すでに忍さんの表情はいつものに戻っている。

それにしても、魅了の魔眼を使うのは反則だ！ 知ってる奴なら絶

対目を逸らすだろっ。

「ふうん…本当に知ってるんだ…それじゃ、掟のことも？」

「当然、忍さんたちとはこれからも友人関係を築かせて頂きますよ。それで、お願いできますか？ 忍さん」

「ええ。自由に使ってくれていいわ」

交わされる笑顔。

ついでに、「仕事の中に自動人形の制御ルーチンの一部整頓入れたでしょ？」と言ったら今度は忍さんが目を逸らしました。

## Situation 10

悲劇を回避するために（後書き）

jas「ちろっと名前だけフェイトそん登場」

智哉「会話も無いのか」

jas「そう、なっちゃいますよね」

智哉「前回言ったほど交流が無いんだが？」

jas「そう、なっちゃいますよね」

智哉「次回は夜天の書の修復作業か？」

jas「そう、なっちゃいますよね」

智哉「……………ぶっ飛ばす!!」

作者、及び主人公不在のため次回予告へ。

「君たちっ、何をやっているんだ!!」

「俺の力はこのためにあるっ」

「主!」

次回、S i t u a t i o n 11 三本の矢も気合入りや折れる

※毎度おなじみ適当予告。実はたまに予告でフラグが立ってたり。

p. s. 感想返信って個別にちゃんと返したほうがいいですね  
? 次からやるか……。

**Situation EX-01 ユニーク10000記念。**

この日は早朝まで仕事をしていたから、起きるのが遅かった。

朝起きると、みんな居なかった。

「そうか……みんな学校か……」

Situation EX-01 それはきつと、何処にでもあ  
る出会い

みんなはこの春学校に行くことになって、俺は日中暇を持て余すようになった。

実際のところはそんなに暇でもなく、あちらこちらでやることがあるって忙しいわけだが。

朝方まで頑張ったため、今日は完全なオフとなった。

で、なんとなく気が向いてミッドチルダに来てみたわけだ。

「んゝ…買い物でもするかあ？」

意味も無くとりあえず来ただけだったため、特に目的があるわけでもない。

折角だからミッドでしか買えない魔法関係のパーツとか買っているのかな。ミッドの料理本を買ってもいいし。



そう考え繁華街をぶらぶらと歩く。

目に入ったデバイス用のパーツとか、料理本、生活雑貨、加工品なんかを見ていく。

そうそう、やっぱりミッドチルダで料理の材料とか買おうと若干地球のものと味や香りが違う。

と言っても日本のものと欧米圏のもの程度の味の差だけど、それでも同じものを作って微妙に味が違うときは面白い。

家事が続けていると、何故か料理って趣味になってくんだよねあ…。

「わぷっ」

「おっと…?」

ぼうつとレストランの食品サンプルを眺めていたら脚に何かが一見してみれば少女がぶつかっていた。

うちの末っ子たちと同じくらいだろうか？

思いつき顔面からぶつかった辺り余程呆けて歩いていたか慌てていたものと見受けられる。

「どうした？ お前」

「えと、あの、ごめんなさいっ」

「気にするな。それより、怪我は無いか？」

少々鼻の頭が赤い。そして涙目…だが怪我らしい怪我は見られない。  
しゃがみ込んで少女と視線を合わせる。

「うん」

「で、どうした？ 迷子にでもなったか？」

「……………う」

げ、涙目進行。凶星だったか。

そりや指摘されたら自覚して余計に心細くなるわなあ……。

仕方ない、と嘆息して零れかけた少女の涙を拭ったのちその身体を抱え上げる。

少女は「わっ」と驚いたように慌てたがそれ以降は大人しかった。

俺だって驚いたわ。見た目より全然軽いし。小学生くらいだと思うんだが。

「肩車。このほうが良く見えるだろう？」

「……うん」

少女を肩に乗せる。一言だけの肯定だったが、幾分か楽しそうに聞こえた。

「それでティアナ。お兄さんの姿は見えるか？」

「んゝ…見えないよ」

びっくり事実。この少女、ティアナ・ランスターでした。

久しぶりに休日になった兄ティードにショッピングに連れてきてもらったところ、迷子になってしまったらしい。

SもSキャラかうなどと考えながらティアナを肩車。軽すぎです余裕でした。

迷子なら迷子センターかなんか行けよと思うけど、ぶっちゃけ遠い。

着くまでティアナを肩車して高いところから探してもらってるわけだ。

「なあティアナ…お兄さんは好きか？」

「うんっ。大好き！ 兄さんの魔法で打ち抜けないものは無いんだよっ？」

「そりゃ凄いな」

にっこにっこしやがって。可愛いじゃねえか。

……いや、性的な意味じゃないぞ。子供としてだ。StS期なら  
まだしもこんな子供に欲情するかっての。

そして、気配。濃密な殺気。瞬時に意識が切り替わる。

「…?」

その気配を感じ取ったのかティアナがきよろきよろと周りを見回す。

俺は、それをすぐに見つけた。

「貴様……俺の大事な妹を誘拐したのは……貴様かアアアアアア  
アアア……!」

「な、ナニィーーーー!!!?」

ちょっと待てシスコン!!!!

ギリギリ理性は保っているのかデバイスを起動させたり、魔法を使ったりはしないけど異常な速度でこっちに迫ってくる!

これは何の能力が無くても分かるだろう。――――捕まったら殺<sup>や</sup>れる。

事情を説明してる余裕も無い。||逃<sup>つま</sup>げる!!

「待て貴様アアアアアッ!」

「んな形相で言われて待つか!!」

「わっ、わわっ!」

「ティアナ口閉じてろっ。舌嚙むぞ!」

「ん!」

「勝手にティアナの名を呼ぶなあああ!!」

のおおあああああああっ!

生まれて初めてじゃないかと言うくらい全力で逃げる。

今なら見える。アイ○ールド21の見た光の道が。駆け抜けるための人の波の隙間が！

「まあてええええええええ」

「待つかあああああああ」

例えば、そんな一日。

逃げて走って、散々だったけど。ティアナ（こども）が笑ってたから、いいじゃない。

当然、いい加減お互い疲れ果てて落ち着けば、ティアナ妹によるティードコンへのお説教タイムが始まりました。

その後に二人とも仲良くなったよ。

もう暫らくあの繁華街行けないけどな。

**Situation EX-01 ユニーク10000記念。(後書き)**

こういう番外編って、バカ話とフラグ立てのためにあると思うんだ。

本編からは少し未来のお話。シスコンと未来のツンデレとの出会い。

これがどんな風に本編に関係してくるのか。まだ先だけだね。

今回は番外編のため、会話ネタなし。

ユニーク10000HIT有難うございます！

早くも一万。このサイトの脅威を感じております。

次も目標はユニーク50000。かPV10000000。なんかす  
ぐな気がする。

さてっ、本編次の話書くよ！



翌日、八神家の皆さんを連れて月村家へ。

はやてには到着したら全てを説明しようかと。

今日は単純についてきて欲しいところがあると言っている。

さくつとプログラム改変して、リインフォース救出して、A・Sは  
終わり。

…そう考えていた時期が私にもありました。

「…貴様のお陰で、既に計画は破綻した」

「ああそうかよ」

仮面……三人。恐らくグレアム本人もだ。

老いていようと提督を名乗るほどの実力者。舐めてかかるなど笑止  
千万。

シグナム——臨戦態勢。

ヴィータを主力に、シャルとザフィーラにははやてを連れて先に行ってもらおう。

二対三。愚かな選択ではない。むしろ調子に乗って一人で相手するよりよっぽど利口だ。

「封時結界を張って、俺の家族にまた手を出さなかっただけお前たちも利口といえよう」

「アンタの所為で……!!」

「理想を追い求め、友を亡くし、捻じ曲がってしまったその根性——修正してやる!!」

S i t u a t i o n 1 1

実は作者はVとGは見たこと無い

武装選択——ウィングガンダムゼロカスタム。

果て無き演舞を舞う翼。

「おおおおおっ!!」

「くっ」

突撃と共にビームサーベルを振り抜き、簡単に避けられる。

散開した中の二人にロックオン。移動方向を予測、ツインバスター

ライフル発射。

両手を広げるように撃ち、身体が開いて無防備になる。

そこに残った一人が突撃してくるがシグナムが応戦し、その刃を受け止める。

「つとお！」

まさかのバスターライフルを一人はなんとかよけ、もう一人は喰らって変身魔法が解けながらも突っ込んでくる。

俺はそれを翼をはためかせて直上に飛翔することで回避する。

：強い。性能も火力もチートだが、如何せん経験値は向こうが裕に5倍は軽い。

その差でどうにか対応されてるんだからニュータイプが聞いて呆れる。

変身魔法が解けた方は、グレアム本人だった。

老いた身体でよくやるもんだ。本当に現役引いてるのか疑問になる。

「どうした？　八つ当たりはもう終わりか？」

「ぐうつ」

上空からのバスターライフル三連射。――本来ならもう弾切れだが、そこはチートで無視。

もう一人の仮面の魔法は翼でガードする。翼に隠してビームサーベルを両手で抜き、翼を広げると同時に呐喊。

ゼロカスタムは火力も俊敏性も最上級。仮面――リーゼアリアはビームサーベルの餌食となった。

落下するアリアにビームサーベルを投げてビルの壁に貼り付ける。

「二人目」

「アリアっ!!」

仲間の撃墜は動揺を誘う。動揺した敵は直情的になる。直情的になれば攻撃は単調になる。

グレアムの攻撃は中遠距離からの射撃一辺倒になっていた。

俺はその隙間を高速で縫って接近、もう一本のビームサーベルを投げつける。

さすがにグレアムも幾多の戦いの経験者。もはや条件反射といってもいいくらいの反応で避けきった。

が、その面前にバスターライフルを突きつける。

「BANG」

「――！！？」

ほぼゼロ距離でのバスターライフルを喰らったグレアムは、悲鳴すら上げられず落下していく。

俺はそれを摘んで、死なない程度の高さで手を離す。

――大概、俺も甘いよな。

こいつらが何度俺に、俺の家族に刃を向けようと、俺は全てつき返す。

だけどやり返しはしない。こいつらだって一つの家族だ。家族は増えてもいいけど欠けちゃいけないんだ。

シグナムの方に視線を向ければ、ほぼ五分五分くらいだったが若干シグナムが押されている。

それでもいくらカロッテのほうに動揺はあるようだ。

「さて、ご退場願おうか」

バスターライフルを連結し、チャージ。

……あ、念話使えねえや。シグナムに当たるか……？　って通信で  
きるわ。

<シグナム>

<なんだっ>

<三カウントで避けろ>

<なんだと!?!>

< 3 >

翼を広げて反動に備える。

< 2 >

シグナムがこっちに気付いた。

< 1 >

慌てて逃げ始めた。

同時にロツテがこっちに気付く。

——充填完了、発射。

恐らくは現在のなのはのスターライトブレイカーを越える極光に包



まれてリーゼロッテはKOとなった。

……永遠にトラウマもんだな。

三人を集めて、ビームリボンで縛る。ノーベルのあれね。

適当な木陰にぶん投げて、聞いて無いだろうけど言い放つ。

「闇の書も、はやても、俺が救う。お前たちは新しい時代をそこで指銜えて見てろ。で、いつか改心してはやてに謝って来い」

「…どういう意味だ？」

「気にするな」

シグナムが首を傾げているが、グレアムが今まではやてにしてきたことを知ったら激怒するだろう。

気を失い続ける三人を背にその場を立ち去る。

実際、ギル・グレアムという人物の根本は善人なんだろう。きっと俺の偽善なんかよりもずっと尊いものだ。

苦悩もしただろう。後悔もしただろう。

それがある程度共感してやることも出来るがやらない。そんなのお断りだ。

とりあえずは、そこで暫らくゆっくり眠れや。まともに心休まる時なんて無かったんだろうしさ。

——さて、やつらを早く治してやらなきゃな。

封時結界を維持していた魔力が切れたのか、いつもの喧騒へと戻っていた。

智哉「いきなりバトル勃発かよ」

jas「この方々とバトるタイミングってここしかないのよ」

智哉「まあ、そうだな。次でA's終了か？」

jas「世の中そんな簡単に行くわけ無いじゃない」

智哉「マジかよ……」

jas「P・S・P。頂いたDXでも使おうかと思ったけど、そういえばマイクロウェーブ発信する場所無くな？　とか思って別の設定考えてたら時間掛かりそうだったから結局ゼロカスタムに」

智哉「Pが一個多いんだよっ」

「闇の書、起動確認しました」

「お前を救ってやる」

「何故だ！　何故こんなことに！！」

次回、泣きっ面にバズーカ

「それじゃあ、始めるぞ」

「よろしく頼む……」

「が、がんばる」

シグナムが緊張したように硬直し、はやてがぐつと拳を握る。

俺はスイッチを押し、プログラムを起動する。

「んあっ…あ…ぐ………?」

「う…ひあっ! ……んゝゝゝっ…」

身体の中を探っているんだ。何にも感じなかった方が問題ある。

もはや嬌声とも呼べるそれを俺は聞き流して作業を続ける。

……いや、無駄に聞いたら色々反応しそうだ。それでも健全な男だから。

何故かシャルが微妙に頬を染めているのが凄く気になる。

「……やましいことは何も無いからな」

Situation 12 世の中そんなに単純じゃない

月村の家に到着すると、すぐにラボの方に案内してもらえた。

そこに着いたらはやてに説明。

闇の書が本来の姿を失っていることや、足の麻痺の原因はこいつだ  
ってこと。

夜天の話は守護騎士たちも驚いていたけど割愛。

はやては快く闇の書の修復を了承してくれた。

まず、闇の書の根本的修復の前に守護騎士プログラムの安全の確保  
と、はやてへの侵食の停止が必要になる。

そこでヴォルケンリッターを代表してシグナムと、当然本人である  
はやては闇の書とどのようにリンクしているのか調べることに。

で、シャマルに手伝ってもらいながら魔力を辿るという作業をして  
るんだが。

「じ、自分に無いものを探るのがこんなに大変だとは……」

「えーっと、魔力が全く無いのに魔力を辿れる方が凄いですけど  
お……」

「んあっ!？」 と、智兄い…もうちょっと、どうにかならへん？

くすぐったくて…ひうつ…しゃあないんよ」

「ん…よし。掴んだ。これだ」

二人の胸部につけたパッチから機械にデータが吸い上げられていく。

闇の書をデバイス補修装置の中に入れて…。

——意識の奥で種が弾けた。

画面に流れるデータを高速で認識していく。

第一関門、マスター認証プログラム。

「マスター認証プログラムを解析、解析結果および主はやてとのリンク情報を参照」

三つのディスプレイに文字が流れていく。

その中から必要情報を拾い上げて脳内でプログラムパターンをくみ上げる。



「修正値プラスマイナス三パーセントでマスター誤認証システムを起動。反応値解析。オールオーバー」

「す、すげえ…」

ヴィータがなんか言ったけど無視。

続いて守護騎士プログラムを解析、闇の書から分離しはやてと直接リンクさせる。

同時に管制人格を出現させる。

「闇の書の構成情報を解析、管制システムを掌握、守護騎士プログラムを防衛システムから乖離、主とのダイレクトリンク開始。

管制人格を起動、一時的に主とダイレクトリンク、必要魔力超過のため休眠状態で起動」

眠った状態の管制人格が呼び出され、闇の書の隣で横たわる。

一瞬視界に入れるが無視。作業続行。

「さらに侵攻——エラー!?　ちっ、誤差範囲拡大、再び管制システム掌握、バグ部分を検索、防衛プログラム、転生機能を検出

該当部分の基礎構成プログラムを解析、——修復不可能、防衛プログラム駆除、転生機能…排除」

「智哉さん、エラーの数が20を超えたわっ」

「プログラム削除による影響を検索、解析、汎用化ダミープログラムを挿入、さらにエラーを解析続行」

パッチを当てればエラーの数は片手で足りる数に減る。

それを手動で解除していく。

「データ数値化、手動入力、——成功」

プログラム解析完了、全エラー解除。

管制人格、守護騎士プログラムのリンクを闇の書——夜天の書に譲渡。成功。

全プログラム終了。

一度全てのプログラムを終えて、再度エラーが出ていないかチェック。

何の問題も見受けられず額に滲んだ汗を拭う。

「終了だ。これで闇の書のバグは消えた」

「本当か!？」

「ああ、これではやてへの侵食も止まる」

俺の服を掴んで聞くヴィータの頭を撫でる。：ちようにいい位置にあったんだ。

同時にヴィータとシャルが喜びの声を上げた。

シグナムとザフィーラも静かに喜んでいるのが分かる。

はやてだって両手を挙げて万歳だ。

「一応終わったけどな、基礎構造を弄ったわけじゃないから無理を

させるとバグがまた発生するかもしれないぞ。

全部直すまで守護騎士たちも絶対に無理をしないことだ」

「うん。ありがとう智兄い」

「おう」

流石の俺も疲れたんだが。

いくらチート能力持ったって精神力が無限になるわけじゃないからな。

こんなに集中すれば当然疲れるわけだ。

そして当然俺も何事も無くバグ修正が終わったことで軽く浮かれていたわけで。

————未だ眠り続ける管制人格の身体から染み出す闇に気付いたときには、遅すぎた。



j a s 「はい、おわらない」

智哉 「お前俺たちのこと嫌いだろ」

j a s 「とりあえずお前は嫌いだな」

智哉 「…まあ、俺はいいから他の奴にはハッピーエンドくらい用意しろよ？」

j a s 「それがね」

現在StSのルート考案中。

理由、作者が全員ヒロインとか書けないから。

ということ各ルートシナリオにつき特定のヒロイン数名を書くことに。

以下、ルートテーマ。シナリオ詳細やヒロインについては秘密。

1. ロンドベル
2. エコーズ
3. エウーゴ
4. ソレスタルビーイング

多分、名前から流れは予想できるかな？それぞれ所属勢力が違いま

す。

最終的に全部書くつもりですが、まずはどれが見たいかアンケートをお願いします。

よし、書きたいことは書いたはず。

次回予告省略。

次回、『二寸の虫にも魂はあるだろうけどそんなこと気にしてられないよね』

## Situation 13

今こそチートの實力を見せるとき

気付いたときには、その闇は指向性を持って動きを示していた。

「ちいっ」

「きやつ」

細長く伸びていく闇の進行先であるはやてを突き飛ばす。

そして俺は、闇の残滓に貫かれた。



ぐらりと視界が揺れる。

身体から力が抜け、がくりと膝を突いた。

俺が反応するよりも先に闇の残滓は俺の身体を貫通しきって、窓を突き破って飛び去っていく。

「く、そ……」

呼吸が辛い。

しかし身体に活を入れ力技で立ち上がる。

「浪川さんっ」

「浪川！」

シャルとヴィータが俺を支える。

が、それを振り切るようにして割れた窓ガラスに手を掛ける。

「お前たちはそこで待ってろ！ 管制人格もまだ動けん！」

「そんな状態でいくんですか！？」

シャルがしがみ付くようにして俺を止めようとする。

確かに今の俺は力もいまいち入らないし、頭もくらくらする。

血を大量に抜かれたような感覚がして気持ち悪い。

が、あれを始末するとしたのは俺だ。俺が行かなくて何をいうか。

「いいなっ、そこで待ってろ!!」

吐き捨てて窓から飛び出す。

同時に身体をガンダムキュリオスに換装。M A状態に変形後トランザムを使用し高速移動で闇を追う。

向かった先は、奇しくも原作と同じ海。

俺は結界なんて張れないから、ミノフスキー粒子を人の感覚にも作用するようにして散布する。

これで認識障害は出来た筈。

「——おいおい、嘘だろ？」

俺の身体を貫通した闇の書の残滓。

闇の書には蒐集機能がついている。貫かれたとき俺の身体から力が抜けた。

つまり、俺から蒐集された可能性が高い。

そこまでは、推測していたんだ。

でも、まさか。その形をとるなんて……………。

「ターンX……………!!」

ガンダム至上最悪の兵器と思われるターンタイプ。

何より凶悪なのが文明そのものを破壊していく『月光蝶』。

「月光蝶を、使うなああああああ!!」

換装を瞬時に変換。

選んだ機体は、ケルデイルガンダム。

距離は未だ数キロはあるが、GNスナイパーライフルIIを構え瞬時に引き金を引く。

「狙い打つ!!」

ターンXの背から月光蝶の光が伸び――る直前に、撃ち出したGN粒子の線がその胸の中心を撃ち貫く。

思ったよりも手ごたえが無い。

そう感じたときには既にターンXの身体はまた不定形な闇の残滓へと戻っていた。

次の瞬間。

「――――おい」

その姿は。

「何でだよ……………」

誰とも知らない女性の姿だった。

その女性——闇の書の残滓は俺を招き入れるように両腕を広げ、にこりと笑う。

「討って」

そう言っているように思えた。

「何でなんだよ!!」

今はこうやっていても、この存在は闇の書の闇たる防衛プログラムの残滓。

放っておいてはいろんな人に危険がやってくる。

俺には、こいつを救う術は無い。

俺の力は、戦う力でしかないから。

誰かを癒せるものではないから。

そう、教えられてるようでとても——とても悲しかった。

それでも俺は引き金を引く。他に皆を守ってこいつを助ける方法は

ないから。知らないから。出来ないから。

「――ダブルエックス」

換装、ガンダムDX。

本来月面からのスーパーマイクロウェーブを受けないと使えなかったサテライトシステムを工夫によって使用可能にした。

内部でエネルギーを生み出して、サテライトキャノンへ。

何故か月を視認出来ないと起動が出来ないが、仕様なのか？

「ツインサテライトキャノン…起動」

チャージ開始。闇の書の残滓へと狙いを付ける。

その、童女のような笑みを送る彼女と視線が合った。

――私の家族を、よろしくね。

俺のイノベーターの能力がそうさせたのか、そんな彼女の言葉が聞こえた気がした。

闇の書の残滓が、彼女が消滅して全てを確認した。

ニュータイプ有能力で周辺に異常が無いのも感じ取った。

これで、闇の書の問題は解決した。

「……………くそっ」

それでも俺は終わり方が気に食わなくて悪態をついた。



智哉「なんか、後味悪い」

jas「仕方ないさ。全部うまくなんていかない」

智哉「…そうさな。全部思い通りにいたら人生なんて面白くない」

jas「です。で、アンケートはなんか対管理局側が多いな」

智哉「あと更新二回分くらいはアンケートを続けるつもりだ」

jas「みなさんの意見を待ってます」

「あなたの名前を考えなあかなあ…」

「…ままならんな」

「貴方にはできる限りの感謝を」

次回、「笑うかど以外にも福来たっていいじゃない」



## Situation 14

後始末が大変なのよ。

あれからもう幾年もの時が過ぎた。

後味悪く終わった闇の書事件も、結果からしてみれば原作よりも良  
好な結果に終わっていて。

あとは平和な日々を吟味しつつStSへ向かって準備を進めるだけ  
だな。

……………なんてことは無い。

実際はそんなに日数が経った訳じゃない。

せいぜい三日ほどか？

やっぱり蒐集直後に動くのは無茶だったらしく、俺はあの直後公園で倒れた。

そこを心配して飛んできた守護騎士たちに助けられたと言うわけだ。で、暫らく寝込んで起きたのがさっき。

「なっさけねえ」

「全くです。せめて私たちに一報欲しかったんですけど？」

目覚めてすぐ愚痴ったら、目の前にはティファさんがいらっしやいました。青筋浮かべて。

……あゝ、連絡いれずに帰ってこなかったわけか。

で、心配になって携帯に電話したら八神家の誰かが出て、俺がぶっ倒れたと聞いたと。

「まさにその通りです」

「…心を読むな」

「気のせいです」

とにかく誠心誠意謝る。

ティファは「仕方ないです」と言ってくれたが、子供たちはどうだろうか。

「私たちを助けてくれたときみたいのものだもん」

ルイス。

「心配はしてないけどね。一応連絡は欲しかったかな」

「心配したっ！」

キラ。ユラ。

うん。ごめんなさい。

で、俺の方が終わったところで八神家の後処理をしなければならい  
な。

闇の書の安定性が取れたわけじゃないし。多分調整が必要だから。

八神家へ向かう。

途中ではやてに通信を入れておくことを忘れない。

「ちわゝ」

「智兄い！！」

「どわあっ!？」

玄関を開くと共に飛来した物体——名を八神はやて——をなんとか受け止める。

どう考えても車椅子ごと吹っ飛んでくるのは危険極まりないと思うんだが。

「はやて……危ない」

「心配したんやで!？」

「今の行動が心配した相手にすることか」

「きょうっ」

軽く小突く。

そのままはやてを抱え——車椅子は玄関に放置して——リビングへ。軽く見回してみると、シグナムとヴィータが居ない。まあ、何処かへ出かけているんだろう。

別に俺がぶっ倒れたからって引きこもってる理由は無いらな。

最初に目が合ったザファイラは軽く会釈するに留まったが、安堵してくれたようだった。

……って喋らねえのか、ザッファイ。

「大丈夫なのか？」

「ああ、お前こそ問題ないか——リインフォース」

ニットセーターとロングスカート姿のリインフォース。

うん。元気そうで何よりだな。

その後、シャルがお茶を入れてきてくれた。

一口啜って今後に向けての話し合いを始める。

「それで、今の状態はどんな感じなんだ？」

「私のことか？ それとも、夜天の書自体の事か？」



「両方だ」

話を聞けば、生活する上で問題は発生していないらしい。  
が。

「リインフォースのユニゾン能力がなくなったか……」

「ああ。いまや私はただの守護騎士の一人でしかない」

「——いいや、大切な家族の一人だろ？ はやて」

「そや。ただの、なっていったらあかん」

「……すみません」

ふむ、しょぼんとするリインフォースが少し可愛いな。

……げふんげふん。

ユニゾン能力の消失はある意味予想通りだ。むしろ、予想よりプラス修正と言ってもいいかもしれない。

俺がやった修正っていうのは、前後周辺のデータと比べて連続性や関連が明らかにおかしいものを片っ端から切り落としただけだ。

下手をすれば夜天の書の蒐集機能が無くなったりとか、リインフォースのリンカーコアが消失するとかもありえた。

その話はしないでおく。悪いifっていうのは聞いても気分のいいものじゃない。

それと、あの防衛プログラムにはもしかしたら一つの人格があった可能性も俺の中で封印する。

これは俺だけが知っていればいいし、この苦しみを子供に<sup>はやて</sup>背負わせる必要も無い。

「それじゃあ、今後ははやてのリハビリと同時進行で夜天の修正をしていこう。こればかりは急いでも仕方ない」

「それでいいと思う。主はやての成長に合わせた調整も出来る」

方向性は決定。

後始末はまだまだあるのでお暇する。

それじゃあ、こっちの様子をずっと伺ってる誰かさんにもお話をし

てきますか。

「全部終わったよ」

「……………そうか」

「どうだよ。今の気持ちは」

「どうだろうな……………疲れてしまったよ」

「そうかい。それじゃあ、力と意志は若い奴らに渡してゆっくりしたらどうだ」

「ああ…それもいい」

二人の従者を従えて背を向ける老人。  
にひき

俺はその後姿を見送ることにする。

——あ。

「これは俺の勝手な願いなんだが…闇の書はもう終わったことを管理局に伝えて欲しい」

「……報告しておこう。これも、一つの償いだ」

その後姿は、どこか寂しげに見えた。

復讐に駆られた人間の終末なんてこんなものなんだろう。

出来ることなら、俺の周りの奴らはこんな風にはなってもらいたくないな。

## Situation 14

後始末が大変なのよ。(後書き)

j a s 「後始末はまだまだ続くよ」

智哉 「本来出会う筈だったはやてとなのはたちを引き合わせなきゃならんしな」

j a s 「そしてそろそろ分岐点だ」

智哉 「エウーゴに一票、C Bに一票だったか？ 今は」

j a s 「…ぶっちゃけどっちも管理局入らないルートなんだよね」

智哉 「わお。ぶっちゃけた」

j a s 「あと一話、か二話くらいですかね。共通ルートは」

「はじめましてっ」

「…兄さん、なにやらかしたの？」

「ぱ、パパー!?!」

次回、  
S i t u a t i o n  
15  
鳶だって気合いで鳳凰くらい生  
める。

あれから数日。

来る十二月二十五日。と、いうか明々後日。

知らない奴はモグリなクリスマス。まあ、日本においてクリスマスなんて数ある年内のイベントの一つでしかないわけだが。

ちょっと遅かったかなあとか思いながらクリスマスケーキを予約しに翠屋へ。

個人的にクリスマスに興味があるかって聞かれたら無いんだけど、やっぱり子供たちには楽しんでもらいたいじゃない。

「いらっしやいませ」

「こんにち——て、あれ？ 恭也さん」

「浪川か」

「仮にも客に対してその反応はどうなんすか」

恭也さんのまるで営業スマイルすらない仏頂面。いや格好いいっちゃあ格好いいんだけどさ。

実際接客向けじゃない？

「手伝いですか？」

「そうだな。流石にクリスマス前一週間は手が足りない」

メニューを見ながらそう話す。

チョコケーキにするべきか：ショートケーキか。いや、このフルーツがたくさん乗ったのも捨てがたい。

む…全部…買ったら間違いなく食えないな。



「ピザみたいに四分の一ずつ違うケーキってのは無いんだろうか……」

「あるわけ無いだろう」

独り言にすっかり突っ込んでくれやがります恭也さん。

忙しいんじゃないかなってんでしょうか。

どちらかと言えばメインでケーキを食うのはうちの女性陣なので、どれが一番喜ぶか悩む。

あいつらの喜ぶもの……と考えると適当には選べない。

八神家のも選んどこうとか考えたらなおさら。どれもこれもうまそうなんだよ。

「恭也さん」

「なんだ？」

「おすすめは？」

「全部だ」

「真面目に答えましょうよ」

悩んでいると、そこへ救世主——というよりこのケーキを作った張本人の方が。

「恭也、お知り合い？」

「個人的にも知り合いだが、浪川はなのはの友達の保護者だよ。ほら、この前来た転校生の……」

「ルイスちゃん？」

「妹がお世話になってます。浪川智哉と言います」

深々と頭を下げる。

いいえこちらこそ、なんて頭を下げ返された。

頭を上げるときに俺の手元のクリスマスケーキのメニューを見て一言。

「ねえ、浪川君。クリスマスパーティー、やらない？」

Situation 15 まさかの料理イベント

12月24日。

俗に言うクリスマスイブ。

本日、翠屋終店後にパーティーがあります。

はやてをみんなに引き合わせるいいチャンスです。が、参加者にはハラウン一家の名前も。

……グレアムのとつつあんは闇の書の消滅を報告してくれたんだろうか。

ヘタすりゃ一触即発。

でもなあ……本来だったらここでははやては友達が出来る筈なんだけど、それこそ俺じゃ守護騎士たちの友人にはなれど、はやての友達ってのは無理だ。

兄貴か、親がわりがいいとこだな。

「あうあうあうあうあうあうあうあう」

某神様じゃないからな。

ぐでんとリビングのソファで垂れながら天井を仰ぐ。

闇の書がどうか、管理局がどうか、実際のところ俺の――大人の都合なんだよな。

だいたい、もう呼んじまったし。

……よし。面倒なことは全部俺が引き受けよう。もしかしたらリンフォースくらい巻き込むかもだけど。

そういうことで、台所に立つ。

桃子さんが料理は用意してくれるみたいなこと言ってたけど、何か一品くらい持ち寄った方がいいだろう。

とはいってもまともに料理じゃ味的に叶わないし……洋菓子の類持ってくとか馬鹿だし。

お手軽ジャンクスナックでも作っていくか。

「手伝いますか？」

「そうか？ 頼むよ」

掃除が終わって暇らしいティファが腕まくりをしながら手伝いに来てくれる。

ちなみにルイスはテレビ見てる。キラはパソコン弄ってるし、ユラ

は読書中だ。：行動が年齢不相応だ。特に下二人。

俺はまずジャガイモの皮を剥く。人数考えたらちよつとやさつとじや足りないな…。

ティファにはとうもろこしを茹でてもらう。

「カレー用の鍋…」

「量が量だ。しかたないだろ」

ちやつちやか剥いて、とうもろこしが茹で終わる前にはジャガイモを剥ききる。

さて次の工程に、と思ったところで家のチャイムが鳴る。恐らく八神一家だろう。

見たい番組が終わったのか暇そうにしてたルイスにとうもろこしの粒を解すのを手伝うように言って玄関へ。

「いらっしやい」

「お邪魔します」

口々に挨拶をしてくるが、無口すぎるだろう。その守護獣と元融合機。

家に招き入れると、家族と八神一家にそれぞれ紹介する。

茶を淹れつつ寛いでもらう。

ルイスとはやては同年と言うこともあって、ルイスの部屋に向かったようだ。仲良くなってくれそうで、重畳重畳。

ヴィータとユラがゲーム対決を始めるらしい。

それをキラが苦笑いしながら、リインフォースが微笑ましく見ている図だ。

シグナムは新聞を読み始めていて、ザフィーラはソファの横で丸まっている。

「…寛げとは言ったが、適応早過ぎないか？」

「この家ってとても居心地がいいですから」

とはティファの弁。

手持ち無沙汰そうにしてるシャマルを連れてキッチンへ。続きを始めよう。

解したとうもろこしと少量の生クリームをミキサーへぶち込んでスィッチオン。

同時にジャガイモをスライサーで薄くスライスする。

もうお分かりだろうか。チップスを作ろうとしてるのだ。

ペースト状になったコーンと、スライスしたジャガイモをそれぞれ塩を振ってキッチンペーパーに挟む。

そこで電子レンジへゴー。あとはチンで出来上がりだ。

その後は電子レンジの音が鳴る度に入れ替えて、家を出る時間まで話をしたり遊んだりして時間を潰した。



## **S i t u a t i o n    1 5**

**まさかの料理イベント（後書き）**

…後書きの会話形式めんどくさくなっちゃった。

ほのぼの日常A's編ラスト。

この次よりルート分岐開始。

クリスマスイベントを看破されたことに絶望した！！

連続投稿で話を進めます。

ここからルート分岐。

ディステイニープラン様が一足早く一票入れてくださったため、エ  
ウーゴルート。

サボテン様改め落雷様。申し訳ありません。CBルートはいつか書  
かせていただきますっ。

日も暮れて、午後七時半。

ここからゆっくり歩いていけば、集合時間の八時ちょっと前には到着する筈だ。

密閉できる袋に作った菓子類を詰めて、鞆に詰める。

こっそりと子供たちへのプレゼントの類も一緒に入れておく。（かなり苦労した）

はやてを車椅子に乗せ、リインフォースが押す。

それに合わせて俺たちは歩く。

予定通りに翠屋に到着。

覗けば残り二組ほどが注文と支払い待ちといった感じだった。

「こんばんは」

「あ、こんばんわ浪川くん」

何故か忍さん with 翠屋エプロン。

え、あんた一応お嬢様でしょう。何やってんですか。

「丁度暇だし、手も足りないみたいだから早めに来て手伝ってたの。  
あ、始めましての子達も居るわね」

「始めまして。八神はやて言います。こっちは家族のシグナム。シ  
ヤマル。ヴィータ。ザフィーラ。リインフォースや」

「で、こっちはうちの長女と末っ子二人」

まあ、うちの面子に関しては書類上で知ってるだろうし。

それぞれ適当に挨拶を交わす。詳細は後で全員集まったときにやれば  
いいからな。

数分後、全ての客が掃けて士郎さんが店を閉める。

さあ。ここからはパーティタイムだ。

Situation 16  $\sqrt{C}$  力を持つ者は選民意識を持ちやすい

桃子さんが店の仕事と並行して料理をある程度作ってくれていたよ

うなので、全員でそれを店内に運ぶ。

わいわいとジュースを運んだり準備をしていると、店の前に車が到着。

カランカランとドアの開くベルを鳴らして入ってきたのは、さすが、ノエル、ファリン、アリサ、鮫島さんのお金持ち組。

なのはや恭也さんたち高町一家も店の裏の方で手伝っていたらしく、それを終えてやってくる。

あと来てないのは…ハラオウン一家か。

一番面倒そうなのが最後だなあ……。

「浪川」

「ん？」

び、みよくに戦闘態勢入りそうなシグナムが俺に小声で話しかけてきた。

……………納得。

「なに？　高町家がモンスター過ぎるってか？」

「何だこの一家は。あのなのは…と言う子は魔導師だ。その父上、姉上、兄上も只者では無い」

「大丈夫だ。悪い人たちじゃない。ちなみに高町家のトップは母親の桃子さんだ」

「…なんだと」

驚いたようだ。実際、士郎さんがどれだけ凄い剣士だろうと、なのはさんがどれだけ魔王だろうと桃子さんには敵わないだろう。

しかし、俺の話を聞いて警戒を解いたようだ。

………合わせて士郎さんと恭也さんが若干発してたプレッシャーも霧散したことを付記しておこう。

そして待つこと数分。

拡大化された知覚が来訪者を認識した。ハラオウンの四人だろう。

「すみません遅れました…」

そう言うのは恐らくリンディ女史。

容姿から予想できる、クロノとエイミィ。…うん。なかなか分かるもんだな。

ハラオウンの親子——あれ、まだフェイトってハラオウンじゃないよな——が守護騎士たちを見て一瞬表情を変えた。

しかしすぐに平静な顔色に戻る。そこは組織の人間として流石だと言ってもいい。

そんな細かい挙動に気付いたのは何人か。多分士郎さんあたりは気付いてそうだが。

俺の考えを他所に、グラスが配られていく。

まずは乾杯ってことなのかな。

それぞれ自己紹介して、子供たちは仲良くなって、大人たちは酒が



回り始めて。

意外にも俺の作ってきたチップスが好評で、子供たちはプレゼント交換をして楽しそうだった。

盛り上がって盛り上がって、宴会の山を越えた辺り。

クロノがリインフォースを連れて店を出るのを確認した。

様子を見て違和感の無いタイミングで後を追う。

「――君たちは、闇の書の守護騎士ではないか？」

おっと、聞こえたところがいきなり本題だ。

リインフォースは努めて冷静に答える。

「違う。我らは夜天の書の守護騎士、ヴォルケンリッターだ。そういう貴様は管理局の人間だな？」

「夜天……？　　どういうことかは分からないが、説明してもらおう」

何でいきなり喧嘩腰なんだよ。

仕方ない。ため息を付いて、姿を現す。

二人は同時にこちらを向き、リインフォースは安堵し、対称的にクロノは警戒する。

「闇の書は消滅した。現在は修復され正常に動作している夜天の書、その主と守護騎士たちのみだ」

「君は…何を知っているっ」

「何をもって『闇の書』っていう改悪されたデバイスの最期<sup>おわり</sup>。いや、  
今代の闇の書の一部始終か？」

クロノが眉間にしわを寄せ、思考を始めた。

その時、俺の後ろから「闇の書は消滅したわ」の声が聞こえた。

「かあさ——艦長」

「もう、今は母さんでいいのに。…グレアム提督から報告があった  
そうよ。闇の書は消滅を確認したってね」

「まさか……もしかして、君が？」

「さあ……どうかね」

謙遜でもなんでもない。

元々消える筈だったものが、俺の手によって少し早く終わっただけのことだ。

クロノは数秒、俺とリインフォースを見てから警戒を解いた。

「まさか、ロストログアを修復する技術を持った人間が居るとはね。君は、何処かの管理世界の住人か？」

「いいや。地球こくの人間」

「……なのはといい、君といい。相変わらず、凄い場所だよこの世界は」

「………ねえ。貴方……この世界の人だって言ったわよね」

「ああ」

「どうして、魔導師でもない貴方が次元世界と魔法のことを知っているのかしら」

「っ!？」

お、やべ。ぼろが出た。

しくじったあ……。この女狐はこういう腹芸的なもの大得意だった  
っけ。

やましいことは無いから別にいいんだけどさ。

「別に何処かから逃げてきた犯罪者ってわけでもないし、後ろめたい  
ことも無い。ただ知ってるから知ってる」

「そう…？ まあ、貴方のご家族は幸せそうだし…後ろめたいことは  
本当にないんでしょうけど」

にっこり笑うリンディ女史。気味が悪いわ。

そしてポンと手を叩いて名案が浮かんだとばかりに言い出す。

「浪川くんっ、管理局に入らない？ 貴方ほどの技術者なら魔導師  
じゃなくてもゆうぐ——」

「断る」

「何故だっ。第一級ロストログアを扱えるほどの技術を持っていて何故正義のために使おうとしない！」

わーい。リンディ勧誘↓即答で断る↓クロノ激昂の図だよ。

だがしかし、俺からしてみれば既にそのクロノの発言がアウトだ。

管理局Ⅱ正義の公式は俺の中では成り立たない。

「どうせこの後はやても管理局に勧誘するつもりだろうけどな。それは勝手にやってくれ」

「答えろっ。君が協力すれば次元世界中で何人…いや何百何千と言う人が救えるかもしれないんだぞっ」

「知るかよ。神にでもなったつもりかっての」

話は終了、とリインフォースの背中を押して翠屋に戻る。

はやてはまず間違いなく勧誘されるだろう。守護騎士たちも。

下手をすれば俺の家族：とくになのはたちと同年で仲のいいルイス  
辺りは勧誘されるかもしれない。

が、それに答えて管理局の道を選ぶなら止めるつもりは無い。

それはそれぞれが選んだ道で、俺が強制するべきではない。

はやては己の身の安全性から管理局か聖王協会に属するのは必然だ  
ろう。

俺の家族に関しえては、この世の理不尽を身に染みて知っている筈  
だから管理局に入っても完全に染まることは無いはずだ。

そして、俺は管理局に属するつもりは無い。何があっても。家族と  
別離し、俺独りになるとしても。

俺は自分が独善的で偽善者であることを知っているから、与えられ  
た正義を振るうことはしない。

だいたい、管理局法は魔導師にだけ有利すぎる。そして管理局法に  
慣れすぎた魔導師は妙な選民意識を持っている。

先のクロノの発言もそうだ。自分が正義と言い切っている。

正義とは戦争の勝者が語り、後に残された者が決めるものだ。決し  
て自分で名乗るものじゃない。

つまり魔導師が一般人を力で押さえつけ、常に勝者であることに疑  
問を持っていないということだ。

理不尽を否定しておきながら、自らがその理不尽を実行していることに気付かないとは救いがたい。

いまここで、管理局と俺の道は分かたれたというのは明瞭だった。

ええ〜と、書きたいことはあったのですがいまいちまとまらず。

ここをこういう風に書き換えたほうがいいよ等の意見、待ってます。

主人公の意見、一応一貫性はあると思うんですけどなんかふらふらしてるみたいに見える…。

多少は見逃してくれると嬉しいなあ……。

「これは、お前たちへのクリスマスプレゼントだ」

「始めまして。浪川智哉くん」

「お前は……！」

次回、Situation 17 √C 悪党の誇り

智哉「次回予告が真面目なタイトルだと!？」



さて、面倒なことになった。

先の発言により管理局に目を付けられたらしい。

ミッドでいつも買い物してるとこの店長さんが連絡くれた。

ハラオウン派の判断じゃないと思うが、なんか俺が犯罪者になってるらしい。

罪状は違法研究及びロストログア所持容疑。

：うん。どう考えてもでっち上げ。まあ、GNドライブとか縮退炉とかサイコフレームとかヤバイのはあるけど。

やれやれ、自分たちの手元に置けない人間は犯罪者かよ。

幸い、一人で買い物のためミッドチルダに来た際知ることが出来たし、家族たちにはその罪状は向けられていない。

これは…逃げるか。

S i t u a t i o n   1 7   √ C   悪党の誇り

その日の晩、肅々と準備をした。

家の権利書やその他財産関係。これは纏めておけばティファがどうにかしてくれる。

何かあったときは…月村家に頼らせてもらおう。

あとは、あの時結局渡し損ねた子供たちのクリスマスプレゼント。一日遅れになってしまったが、喜んでくれるだろう。

俺の個人的荷物はバッグ一つに納まる量だ。

荷物を纏めて、振り返る。

家族が眠る、それぞれの部屋があった。

正直悲しいし寂しい。現実の世界にいた頃から家族がしばらくいなかったから尚更。

でもこいつらには幸せになって欲しいから。俺と一緒にいれば危険度は増す。

……なんで俺っていうやつはもう少し先を見越せないものか。管理局がこういう手段に出るのは想像ついたはずなのに。

過ぎたことを気にしても仕方ない。俺は神じゃない。未来の予測なんて不可能だ。

それでも、こいつらを陰から守り続けよう。

そう心で決意して、家の鍵を閉めた。

———Interlude. Side Kiran

朝、ティファ姉さんに教えられたことは、父さんの失踪だった。

幾つかのものと、一日半遅れのクリスマスプレゼント。そして置手

紙だけが残されていたらしい。

その手紙には詳しいことは何も書いていなかった。

簡潔に、追われる立場になったこと。そのため僕たちから離れること。何かあったら月村さんを頼って欲しいことくらいだ。

ごめん。

そう、最後に書かれていた。

まずはクリスマスプレゼントを見てみた。僕の方は小さな箱に入っていたそれ。

ティファ姉さんの分は、新しいエプロン。そろそろぼろぼろになっていたからだろう。

姉さんは、抱きしめるようにしていた。少し、泣いてるみたいだった。

ルイス姉さんにはバッグ。ユラにはポータブルプレーヤー。二人がそれぞれ欲しがってたものだ。

嬉しいのに、なんか悲しい。そんな複雑な顔をしていた。

「これ……」

僕へのクリスマスプレゼント。それは一つの鍵だった。

見覚えのある鍵。

僕は父さんの部屋に走った。

扉を蹴るように開けて、様々な物が置いてある部屋をまっすぐ机に向かって進む。

その中の一つ。鍵のついた引き出し。

間違いは無かった。引き出しがゆっくりと開く。

そこには一束の書類と、金属で出来た立方体。そして、一枚の手紙があった。

すぐにそれを読んだ。――父さんは、僕たちのことを良く見ていた。何だかんだといいながら、やっぱり父親のようだった。

「僕……やるよ」

僕の決意。まずは家族を守り抜く。そして、いつか父さんも助けよう。

I n t e r l u d e   e n d .

次元転移を繰り返し、地球からいくらか離れた。

すでに二晩野営した。まさかこの文明多き時代に狩をしてメシを食う破目になるとは思わなかった。

「さて、と。どうしたもんかなあ……」

目的地は無い。管理局に喧嘩売ること考えたけど、次元世界の大組織に個人で突っ込むのは流石に無理。

それこそA A Aオーバーの魔導師何十人に囲まれたりしたら俺だって自爆ぐらいしか選択肢なくなるじゃん。

悪党なら悪党らしく強奪でも始めてみましようか。

……いやいやいやいや！ ダメだろそれ！ ガチで悪党じゃん！

——不意に、視線を感じた。

今いるのは無人世界の筈だ。視線を感じることもなどそうそう無い。

野生の生物か……あり得ない。野生ってのは基本的に警戒心の強いもんだ。

「一人……二人……？ あれ、一人か？ ……ん？」

段々わかんなくなってきた。



腕組んで首を傾げる。その瞬間、死角からの攻撃を感じ取った。

首を傾げた勢いで倒れこむようにして避ける。身体を捻って攻撃の方向へビームライフルを向けた。

そこには、分かりやすいボディースーツを着ていらっしゃる人がいらっしまった。

「な、ナンバっ!？」

「浪川智哉、だな」

…ボディライン出すぎじゃね？

首もとの数字を見ている……?。

トーレ、だったっけ。

彼女の横に不意に空間ディスプレイが発生する。

そこには、白衣を着込んだ人の悪い笑みを浮かべた男がいた。

「始めまして、浪川智哉くん」

「お前は……」

「私はジェイル・スカリエッティと呼ばれる広域次元犯罪者だ」

「……えーと、その自己紹介はどうかと思うぞ」

「君と少し話をしたくてね」

「いや俺の話を聞けよ。いいけどさ」

「話と言っても目的は簡単だ。僕たちは君と同じ作られた悪だ。なら手を組もうじゃないかという相談だよ」

「……あれ？　これってラッキーじゃね？」

願っても無いけどこれはいい機会。仲間が出来るのはいい話だ。

「で、その本心は？」

「ふむ…そうだね。いずれ淘汰される悪だとしても、悪党には悪党の誇りってものがあることを見せ付けたいだけさ」

ふむふむ。なんか格好いいじゃない。悪党の誇り。

とりあえず手を組んでみようか。そろそろちゃんとしたところで寝たいし。

あ、人体実験はパスの方向で。

## Situation 17 √C 悪党の誇り（後書き）

あるえ〜？ 文章能力が低下していくよ？

落雷様、ディスティニープラン様、感想多謝です。

なんか更新するたびに一日辺りのアクセス数が増えていく……。び  
っくり。

っていうかまさかの超展開に自分でびっくり。

この先どうしたいんだろ……。

見放さないでくれると嬉しいです。感想・意見お待ちしております。

「そうか…これが……」

「私、管理局で働こうと思うんだ」

「喧嘩売ってんの？ お前」

次回、Situation 18 √C 七転び涙目不貞寝



「おっじゃまっします」

転送され、案内される地下施設の中を歩く。

中は案外広い。

部屋らしい部屋に案内されるまで二分は歩いた。

「で、ここ？」

「そうです」

なんか俺だけ入んなきゃいけないらしい。

無然と立つトーレを横目にその部屋の扉を開く。

「やあ、浪川君。始めまして、だね」

「むしろ会ったことがあったらこえーよ」

ふむ。何故だろう。

こいつを前にして初対面らしい丁寧な対応を取れない。

促されたスカリエッティの正面に座る。

同時に小柄な少女――ナンバーからしてチンク――が紅茶を出してくれた。

「で、薬物混入済みか？」

「滅相も無い。客人にそんなことはしないよ」

「胡散くせえっつの」

でも、飲む。喉渴いたから。

あら…美味しいじゃない。

「なんかいい茶葉でも使ってる？　それか相当熟練した奴がいるか」

「多少いい物を使わせてもらったよ。君とは是非対等なお付き合いをしたいのでね」

「白々しいったらありゃしねえ」

だけどうまい。美味しいものに罪は無い。

十分にのどを潤して、話を始める。

「で、俺を仲間に取り入れてどんなプランを動かしたいんだ？」

「ふむ…まずは僕の予定を話したほうがいいかね。この後、十年以内に自立型のAMF装備式兵器を数百機。」

それと、彼女たちのような戦闘機人が十二機ロールアウトする予定だ。それで管理局に勝てると思うかい？」

「…無理だな。組織のレベルが違いすぎる」

「そうだ。恐らく、君を仲間にしても結果は変わらないだろう」



原作のSTSにおいてもこいつらは結果的に惨敗した。

機動六課という若いエースチームにすら負けるということは、さらに戦力が追加されれば俺が居たところで変わらないということ。

実質俺が六課の余りとその他のエースやストライカーを相手取るところと大差ないからだ。流石に勝てない。

「先ほど言ったとおりだ。悪党には悪党の誇りと言うものがある。悪あがきをしたいだけさ」

「そうか。まあ、とりあえずあの選民意識はぶっ潰したいな」

「魔導師として優秀なものだけが優遇される世界……これだけ歪で成り立っている世界も奇跡だと言えるね」

「これもある意味人間の神秘って奴か？」

「はっはっはっはっ!! まさにその通りだよっ」

なんかつぼに入ったらしい。

一通り笑った後、これからの俺のポジションについて伝えられました。

戦闘機人たちの教育係をやればいいらしいです。

……あ、こいつ俺が色々知ってること前提で話してやがったなあ。

Situation 18  $\sqrt{C}$  ナンバーズのスーツをどうにか  
してくれ

「さて、教育係ってたってなあ？」

ケース1。ウーノ。

「私はあくまでドクターの補佐です」

っていか別に教えることなさそうだし。

ケース2。ドゥーエ。

「……………」

ハナから居ないし。潜入任務中だし。

むしろどうしろと。

ケース3。

トーレ、チンク。

「貴方に聞くことなど無い」

「流石にまだ信用できない」

……………どうしろと。

「仕事がないです。安西先生」

「私はアンザイと言う人物ではないんだがね」

「お前殆どのナンバーがロールアウトしてない今何を教育しろってんだよ。なんだ？ 性のお勉強かこんにゃろう」

「ああ、それかもしれないね」

「マジかお前落ち着けよ何を教えさせる気だよお前落ち着けよバカヤロウぶっ殺すぞ」

「君が落ち着くことをお勧めするよ」

すー、はー。すー、はー。

ういうい。落ち着いた。危なかった…キャラを見失うところだった。

よし。次いでだから色々聞いておくか。

「なあ、ナンバーズのボディースーツの話なんだが？」

「どうかしたかい？」

「身体のライン出すぎじゃないか？」

「…ふむ。機能性を重視したんだけどね。確かにかなり浮き彫りになる」

「一応女の子なんだしさ…っていうか、何で女の子ばかり」

オットーがちよっとボーイッシュだけど結局みんな女じゃん。

「物理的に同じ体力と筋力を持たせた場合、身体づくりから男性よりも女性の方が強くなるんだよ」

「そりゃ確かにそうだけどさ」

仮に同じ体力、筋力だとして。

男性に対して女性は骨盤の形状上、脚が外側についている。よって下半身の稼動域が大きい。

また、肩幅など骨格が小柄になるための小さくなり、潜入などにも有利になる。

が、実際そんな理由だけでは無いと思っている。

「で、本音は？」

「君は何かしら処置をするのに男性の身体が見たいかい？      どちらかなら女性の方がいいだろう。」

私も性欲の強い方だとは思わないが、枯れてはいないからね。むさ苦しい男よりも女性がいい」

「……お前、意外と男だな」

なんか、こいつを尊敬できる気がする。

まあ…基本的にアジトに籠ってるのに男ばかりだったらむさ苦しいわな。

俺だって女性体作るわ。納得。

「じゃあ、もう少しボディースーツどうにかしてやれよ。あれじゃ、人並みの羞恥心も付かないだろ」

「そうかい？　むしろ君には目の保養になるんじゃないかい？」

「モラルの問題だバーカ。だいたい羞恥心に耐えてる姿が良いんだよ」

「なるほど。そういう考え方もあるかね」

広域次元犯罪者と、次元犯罪者のそんなバカな会話。

なんかマッドなところを度外視すれば、いい友人になれそうです。





シリアスに…耐え切れなかったんだ…!!

なんかバカなスカと智哉。二人のキャラが崩壊していく……。

毎度毎度感想感謝です！<<落雷様、ディスティニープラン様。

次回はまたシリアス路線の筈…。だって地球に残された組の話だもの。

そして時代はぶっ飛びますよ。二年くらい。いや、五年くらい。三年くらい。

……。リリカルマジカルっ、頑張ります!! ↑え

「智兄い……」

「こんなところでお前を殺させやしない！」

「はーっはっはっはっはー!!」

|                   |  |
|-------------------|--|
| 次回、               |  |
| S i t u a t i o n |  |
| 19                |  |
| √C                |  |
| 棚から生首             |  |

――Side Kiray

父さんが姿を消して、まもなく2年。

僕とユラも、父さんと出会ったときのルイス姉さんとあと半年で同じ学年になる。

今の僕は、キラ・ヤマト。偽名だ。

現在、浪川智哉と言う人物は広域次元犯罪者となっている。

父さんが残した手紙には、こうなったときの為の偽名が四人分考えられていた。

「…寒いなあ」

降り注ぐ雪を見ながら呟く。

色々考えることがあって、ルイス姉さんが管理局に勧誘されたとき、僕も所属を申し出た。

現在ではキラ・ヤマト一等空士。魔導師ランクはA。父さんを追う側に居る。

そんな僕も、管理局にずっと居たいわけじゃない。

父さんが残したお金もあまり無駄に使いたくないから、金銭的にも出来る限り家族として協力したいというのが考えの一つ。

だから週末に一日だけ管理局で仕事をするにしている。

そして、今日の任務はこの人たちとの合同任務。

「今日は、お世話になります。高町空曹長、ヴィータ空曹」

「ああ、よろしく」

「にやはは、そんなに硬くなくてもいいのに」

この人はバカなんだろうか。この高町と言う人は。

管理局ばかりを優先して、学校にも行かず、家の人にも心配をかけている。

管理局やミッドチルダではいい話しか聞かないが、地球でまともな噂を聞いたことが無い。

…だいたい、貴女管理局辞めたら最終学歴中学卒業ですよ？

「姉さんがお世話になってます」

「ううん。こっちこそいつも助けられてるよ」

そんな社交辞令を交わしつつ、任務に向かう。

雪が降ってて寒いことを除けば、このメンバーでそこまで難しい任務じゃない。

むしろ僕の出番が無かったほどだ。これは給料泥棒と罵られても文句言えないかな。

差ほど時間もかけずに任務を完了し、帰還するときその事件は起きた。

「――攻撃反応!!」

「なのはっ、後ろだ!!」

「くっ」

高町さんが振り向き――動作が一瞬止まる。それが致命傷。

後方から赤い粒子のビーム攻撃。

それが高町さんの右胸を貫いた。

「なのはあああああ!!」

落下していく高町さんをヴィータさんが救助しに行く。

僕は逆に周りを警戒した。

確認しただけで、回りを取り囲むように8機。姿は見えない。

何より、僕はあの赤い粒子が気になっていた。

何処かで見たことがある。とてもよくないもの。

頭を振って、切り替える。まずはこいつらを掃討することが先。

胸ポケットから立方体をしたメカニカルなそれを取り出す。

父さんが研究していたらしいGUNDAMという何か。

その資料と、父さんが僕にあの日プレゼントで残してくれた原型を  
元に作り出したMSデバース。

超小型魔導炉を搭載した、待機状態で所持しているだけでも適性さえあれば魔法を使えるこれ。

その真の姿を今ここに。

「MS－003、ストライクフリーダム――起動!!」

手にした立方体――MSデバイスが起動し、僕の身体に纏わりつく。白と黒の装甲を基調とした、機体。背には青い翼のように展開されるスーパードラグーン。

デバイスの展開と同時に僕の認識力が拡大される。

1…2…4…7…8。全敵機ロックオン。

「あたれええええっ!!」

八機のドラグーンを全発射。同時に両手に持つビームライフルを撃って逃げ道を残さない。



ビームの直撃と同時に消えていたアンノウンの姿が現れた。

「敵機撃墜…」

「なのは…！　なのは！」

もはや血溜まりとなっている二人の下へ行く。

ヴィータさんに抱かれた高町さんは気を失っているようで動かない。

傷は右胸を一箇所貫通。心臓は避けている。が、主要血管と肺がやられていたみたいだ。

生憎、僕にもヴィータさんにも回復系の魔法のストックがない。

医療班の到着を待つしかなかった。

「なのはは、なのはは怎么样了んだ!？」

「……………」

シャルさんが目を伏せる。

そこから推測されるのは、悪い知らせ。

「出血は止まりました。外傷は大きくありませんし、脳に影響はありません。だけど…」

「けどなんなんだよっ」

「脊髄に大きなダメージを負ったため、下半身が一時的に不随になるかも…もしかしたら、魔導師としてはもう……」

「…それだけですか？」

僕にはどうしてもそれだけに思えなかった。

なぜか、そんな予感がしたんだ。

「デバイスの記録で見た…あの赤い粒子が原因だと思うんだけど…肺に出来た傷が塞がらないの…」

だから、その周辺組織は壊死したまま。魔法でどうにか生活に影響は出ないように出来るけど、長時間の運動なんかは出来なくなるわ」

「なんで、何でこんなことに…！」

「自業自得なんじゃないですか？」

「何だとテメエ…！」

「ヴィータちゃん止めてください！！ キラ君も煽らないで！」

「事実でしょう？ 自分の限界も分からず、周囲の心配も無視して、バカみたいに戦ってた本人に非は無いっていうんですか？」

二人は押し黙る。

正論を突きつけられると人は黙るか逆上するしかないんだろう。

……何で僕は8歳でこんなに達観してるんだろ。悲しくなってきた。

それより、その赤い粒子が気になった。

あの毒々しい赤。覚えがある。

確か…父さんの資料で……父さんの資料で…？

**Situation 19 √C 残された者たち I (後書き)**

先ず初めに、トンでも設定ごめんなさい。

設定上の「おっ？」は寛容な心でスルーしてください。

とりあえずなのはさん弱体化イベントです。

デイスティニープラン様、感想感謝です。

まだまだ地球サイドが続きます。

次は、ティファさんサイドかな？

「主……」

「やっと、見つけた」

「かかってこいよ」

次回、Situation 20 √C 石橋を叩いて壊す



**Situation 20 √C 残された者たち II**

Side Tiffa. A

「ふう…」

家中のお掃除を終えて、一息つく。

今日は日曜日。折角のお休みなのにルイスとキラは朝早くから出かけてしまいました。

二人とも…特にキラはしっかりしてるから、心配はしてないですけど管理局のお仕事と言うのは不安があります。

——だって、私たちの大切な家族を犯罪者に仕立て上げた組織ですから。

「あら？ ユラ…何をしてるの？」

「キラばかり…私だってやれるのに……」

リビングに戻れば、はむはむと大量のお菓子を口に運ぶユラ。

眩きから察するにやけ食いみたいですな。

とりあえず私の質問は聞こえていないようです。

主——浪川智哉が姿を消して二年。

私も無事に高校に入学してみんな学生をしています。

その傍ら、ルイスとキラは時々お仕事を請けてあちこちの世界を飛び回っています。

対して、私とユラは地球から基本的に出ることはありません。



ユラはキラに毎回「私も行く」と言い張っているようですが連れて行ってもらうのを見たことがないです。

私は戦う力ありませんし、態々管理局で事務仕事を選ぶつもりもないので地球で穏やかに過ごしています。

S i t u a t i o n    2 0    √ C    残された者たち    I I

「あとは……冷蔵庫の中が少なかったかな」

これだとお弁当が作れなくなっちゃう。

買い物に行かなきゃ……。

買い物袋と、お財布を持って準備をする。

ユラにも声を掛けたけど、行くつもりは無いみたい。

外に出て、鍵をかけて————私を呼ぶ声に気が付いた。

「……………? 猫さん?」

声の聞こえた方向に振り向けば、塀の上に猫さんが。

真っ白で綺麗な毛並み。何処の家の子だったかしら…。

「あ、そうそう。ミイナちゃんだったかな」

「みゃあ」

私は時々動物さんの声が聞こえていました。最近では殆ど言いたいことがわかります。

この子はたまに現れては私の横で丸くなって暫らく眠る、良く分からない子です。

それが今日は私を何処かへ案内しようとしているみたい。

ついてきて、と言わんばかりに歩き出すミイナちゃん。

私は慌てて追いかけ始めました。

「まって、ミイナちゃん。何処に行くの？」

「みゃ…みゃあ……」

——この先。もうちょつとだけ。

そう言います。

仕方がないので後を追いかけて……気付きました。その感覚に。  
懐かしい、大切な、その感覚。

ミイナちゃんが駆け出して、道を曲がります。

私も走り出してその角を曲がって——急に視界を失いました。

合わせて段々と意識が遠ざかっていきます。

「参ったな……完全にニュータイプじゃないか……様子見に來ただけ  
なのに……」

「え………あ、……る………じ………」

「悪い。また今度。もう少し落ち着いたら來るわ」

そうして、抱きとめられた暖かい感触を全身に感じたまま、私は深い闇の中に落ちていきました。

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t.

参った…。まさか猫に連れられてくるなんて。

おもわず気絶させちゃった。

「なんだかなあ…」

「みゃあ…」

「別にお前が悪いことしたわけじゃないんだぞ？」

不安げに見上げてくるその子猫を撫でてやる。

ごろごろと喉を鳴らして気持ちよさそうにした後、塀の上を走って何処かへいってしまった。

たぶん家に帰ったんだろう。

抱きとめたティファを見て、どうしようか迷う。

「ニュータイプ……か」

動物と会話ができることや、視認出来ない人物の察知。

間違いなく覚醒したニュータイプの行動だった。

元からその素養があったのか、俺が居たせいでそのきっかけが出来たのか。

まあ、そんなことより。

「……成長したな」

この二年、時々顔を見に来てはいたが触れたのは初めてだ。

出会った頃より随分と女性の体つきになった。

抱いていて若干ときどきする。

「ってそうじゃねーよ」

ティファを抱えなおして、家に向かう。

家にはユラが居た筈だけど……まあ、窓から侵入してベッドに寝かせとこう。

適当に上手く誤魔化してくれることを願う。

家族たちが元気そうで何より。

何かあればいつでも戻ってこれる体制は作ってるけど、それとは別に顔が見たいときもある。

「……………くっそ」

強い力は、自らをも傷付ける。

強すぎるニュータイプ之力、純粹種のイノベーターの力は、人が死ぬ瞬間の絶望や、絶叫、痛み、感情を余すことなく俺に伝える。

一人や二人なら他人のものとして自分に言い聞かせ、受け流すこともできる。

それがたまに居る感情の特に強いもの、五人や十人などの大人数だつたりすると押しつぶされそうになる。

この二年で気が狂いそうになったのも一度や二度じゃない。

そんなどん底に落ちたときはこちらに戻ってきて家族の顔を見ていた。

それで少し落ち着いて、また頑張れる。

だから、もう少し。もう少しだけ、眠っててくれ。

俺の、情けない顔を見ないでくれ。

ティファを寝かせたそのベッドの横で、声を殺して少しだけ泣いた。





と、いうことでシリアスが続く地球サイド二話め。

GXのティファはイルカさんとお話したりしてますよ。

まだまだシリアスは終わらない。次は主人公サイドのお話。

このルート…実はかなりシリアスなんじゃ……；

ディステイニープラン様。感想ありがとうございます。

赤い粒子はそれです。九割九分間違っていないです。

さて、なんで更新が若干遅かったかと言うと、PCのマザボが一回死んだんですよ。

今は応急処置だけして少し安定してるみたいだけど、またいつなるか…。

HDDも不安定だしブルーバック出るし。PC古いしなあ…もう何年目だっけ。

次はまたPCがどっかいかれてなきゃ二日後までに。

「痛い……痛い……」

「やめろおおお！ やめてくれえっ！！」

「ぐ、おえ……げほっ、があっ」

次回、弘法に筆の誤りは世間的に許可されない。

**S i t u a t i o n   2 1   √ C   人を撃つ覚悟（前書き）**

※注意報。

なんかシリアス通り越して重い話に……。

背に展開した擬似GNドライブTよりエネルギーを移動。

長距離狙撃モードのGNランチャーを構える。

雪降る世界。スコープの先には、管理局の白いエース。スコープの端にはいくらか成長した息子の姿もある。

自分の中に渦巻く全ての感情を掻き消して、引き金に指を掛ける。

……殺すつもりは無い。だが、腕の一本は貰っていく。

「悪いな」

誰に謝ったのか。

これから重傷を負う彼女に対してか。未だ訴え続ける自身の良心に対してか。子供を撃つ事に感じる忌避感に対してか。

引き金は酷くあっさり引かれた。

まっすぐ飛んでいく赤い粒子の線。それは彼女の右肩を貫く予定で――予想外にも彼女の反応は良すぎた。

肩を貫く予定の凶弾は振り返りかけた高町なのはの右胸を貫く。

――痛いつ、痛い痛いいたいいたいイタイイタイイタイイタイ  
!!!!!!

頭の後ろで彼女の悲鳴が響く。奥歯を食いしばってその感情を受け流す。

「ぐ、う……………」

それでも彼女の苦痛は俺を訴え続ける。

右胸、出力からして心臓は傷付けていない筈。恐らく直撃したのは肺。しかし擬似GN粒子が身体に何処まで被害を与えるか。

段々と彼女の声は遠ざかる。なのはの意識が失われていつている証拠だ。死にはしないと信じたい。

スコープを通さなくても見える爆発の光は、恐らくキラだろう。

よくもまあストライクフリーダムなんて再現したものだ。MSデバイスは俺一人じゃ完成できなかったんだけどなあ……。

子供の発想力っていうのは重要なんだろうな。

そんな考えも現実逃避。

意識を失う直前の、彼女の魂からの眩きが俺を引き戻した。

——わたし…しんじやうのかなあ……みんな…ごめんね……

「……！」

死を覚悟した彼女の声。それは俺にフラッシュバックを引き起こした。

Situation 21 √C 人を撃つ覚悟



「ひとつ、頼まれてくれないかな？」

そんなスカリエッティの一言がきっかけだった。

内容はある研究所の殲滅。

スカリエッティが言うには「著作権や特許と同じだよ」だとか。

聞くにスカリエッティの出した研究成果を無断で使用し人造実験を行っているらしい。

「プロジェクトFか？」

「やはり知っているんだね。君は何処から情報を仕入れているのか」

「んなことはどーでもいい」

「その通りだ。正確にいうなら私が作り出したわけじゃなく、刻まれたアルハザードの知識をどうにか再現したに過ぎないんだがね」

「……何処にある？」

モニターを表示して、ある無生物世界の場所を示した。

微生物程度しか生き物の居ない世界の一角に研究所を作り、実験を行っているらしい。

「行ってくれるかね」

「…ああ」

教えられた世界に飛ぶ。

アシストとしてセインを付けてくれた。

この子のISは潜入に使えてなかなか便利だ。なんか妙に懐いてるし。

俺がスカリエッティの下についてからすぐに、クアットロ、セイン、ディエチがロールアウトされた。

チンクには少し信用されたみたいで、この四人の教育係が俺の仕事  
と言える。

「智兄、どうする?」

「とりあえず、中を見てこよう」

「りょーかい。IS、ディープダイバー」

セインの肩に手を置いて、地面の中を潜行する。

……研究所の中は地獄だった。たとえ記憶の中だろうと描写したく  
は無い。

研究者どもは皆一様に狂笑を浮かべていて、実験用に作られただろ  
う子供たちは——みんな壊レテイタ。

逃げるように研究所から離れた。

「…酷い……」

セインが呟く。

俺は何故か酷く冷め切っていた。何の感慨も沸かない。

とても冷静に、その兵装を選んだ。普段ならそんなもの絶対に選はないのに。

「セイン、ここから半径二十キロ以上離れろ」

「え？」

「命令だ」

「あ、うん…」

セインがディープダイバーを使って地面に潜行し、高速で離脱していく。

対して俺は身体を換装した。

絶対に使わないと決めていたはずの、ガンダム試作二号機。核を使うことを前提とした最悪の兵器。

冷静な筈なのに、頭の中は真っ白で。身体だけが勝手に動いているみたいだった。

ラジエーターシールドを構え、アトミックバズーカを構える。

俺が正気を取り戻したのは、引き金を引いてからだった。

――轟――

着弾地点から、爆発が始まる。

衝撃を受けつつ、すぐに転移離脱。セインの下へ着地した。

「と、智兄!？」

すぐに武装を解除する。

俺が目にしたのは、立ち上るきのこ雲。呆然と見ることしか出来ない。

直後、俺の脳裏に無数の声が響いた。

——痛い苦しいやめて熱い助けて死にたくない誰か痛い熱い暑い苦しい体が助けて助けて助けて!!!!!!!!!!

「が、ああああああああっ!!!!!!!!!!」

「智兄っ、智兄っ！」

頭を抱えて蹲る。

声が、声が響く。今俺が殺した人々の声が。俺が殺した子供たちの声が！

断末魔の叫びを俺の力が拾い、俺に共感させる。俺に再現させる。

「やめろやめろやめろ!!!! やめてくれえっ!!!!」

急に食道を逆流し、口から飛び出す胃液。

吐いても吐いても収まらない。

セインが俺の肩に手をかけるが、それすら気にならない。

涙を流し、絶叫し、嘔吐し、目の前がちかちかする。俺が狂う。俺が消える。誰か助けて！！

ふわりと、背中から感じる人の熱。

暖かい優しさ。

「だいじょーぶ。だいじょーぶ」

「がつ、あ…げほっ…」

セインの優しい声を聞いて、吐き気と頭の中の声が引いていく。

同時に俺の意識も遠ざかる。身体が精神を保護しようとして気を失うのだろう。

セインに抱きしめられて、意識を失う。

後から聞けば、このあとスカリエッティに連絡してラボまで転移したらしい。

ラボに着くまで、セインはずっと俺を抱いててくれたんだとか。

あの声が、俺の頭の中を支配する。

アトミックバズーカの引き金を引いた感触が蘇る。

「ぐ……………くっそ…」

あのときのように、吐き気を催したり意識を持っていられることは



無い。

が、強烈な頭痛と気持ち悪さが身体を巡る。

片手で頭を抑えて、歯を食いしばって、堪えた。

「……………そうだな」

あるときほど酷くなくても、気分の悪さは隠せない。手足の震えも止まらない。

こういうときは、いつもそうする。

ルイスとキラが今日は管理局の任務であることも知っている。

残りの二人の顔を…見に行こう。

家族の、笑顔が見たい。元あっちの世界にはもう無くて、こっちでやっと手に入れた家族の笑顔。

## Situation 21 √C 人を撃つ覚悟（後書き）

PCの調子がいつまた悪くなるか分からないし、レポートに追われると書く暇無いのでさくっと書いて高速アップ。

なんか無駄に重い話になった気がします、仕方ない。こんなこともある。

落雷様、デイスティニープラン様。毎度毎度感想ありがとうございます。ます。

お二人の感想はいつも私の燃料源です。かなり頑張れます。

……でも他の人の感想もほしいなあとか欲を言ってみたり。大した作品でもないくせに。

冗談はさておき、次はバカ話でも書こうかな。ナンバーズで。主に4番と6番で。

次回もちっちゃか更新できたらいいな。

「ちょ、ちよっとタイムっ。お兄様!!」

「私を巻き込むなバカ者！」

「おわあああああゝ!?」

次回、バカにつける薬が出来たらノーベル賞もの。

「お兄様？」

「何すんの智兄ー」

「一体何の話をするんだ？」

「…何で私まで」

「私も…？」

「ウーノはスカの手伝いだから免除。ドゥーエも免除。っていうかこの二人は最初から免除」

この前ドゥーエと通信越しに顔を合わせた。なかなかのサディスト。楽しそうにしてたけど、じかに顔あわせたらなんか虐められそう。

ちなみにこの二人が免除な理由は、俺観点で割かしまともだったから。

つまり、こいつらはまともじゃない。

「これからお前らに情操教育つてもんをやってやる」

そろそろ限界だったってわけだ。

Situation 22 √C 本気で恥じらいつてもんを覚えろお前ら

多分この中で一番まともな奴を挙げれば…チンク。この一言だろう。

「お前らさ、このラボの中には俺とスカリエッティしか居ないから  
って恥じらいが無さすぎなんだよ」

「そんな感情、兵器たる私たちに必要ではないだろう」

「うっせえ。テメーが節操なし筆頭だバカヤロウ」

トーレのブーイングを一蹴。

こいつがホントに容赦ない。マジで風呂上りとかマップでラボまで  
戻ってくるからな。隠せバカ。

「実際チンクが一番まともってどういうことだよ」

「む、それはどういう意味だ？ 姉の身体が貧相だとも言いたいのか」

「……そういうわけじゃない」

「今の間は何だ今の間は！！」

掴みかかって来そうな猛獣を宥め、やり直す。

ホントに今の間に意味は無い。

「多分、次に羞恥心があるのはディエチか？」

「…なに？」

「……………」

「っ！？」

試しに舐め回すように見る。多少卑猥な感情を目線に込めてやる。じっと見てやる。これでもかと言うくらい見る。

すると何かを感じたのか、あのスーツは着ているのに主要な箇所を

隠すかのようにディエチは身体を背けた。

…ちなみに、これが正しい反応。

これをクアットロにすると……

「あら、お兄様。もっと見てください……」

……変態め。

セインにすると。

「……………?」

まず気付きすらしない。

流石にこれは拙いだろう？



「よく考えろ。そのスーツ、恥ずかしくないか？」

「「別に」」

「多少…」

「若干…」

上より、羞恥心の無いバカ三人、チンク、ディエチだ。

「お前ら……戦闘機人のお前ら『女』だぞ？」

「逆でしょう」

「逆じゃねえ。正論だっつの」

「べっつに気にしたことないし」

「……………」

よおし、ぷつつんきた。

折角口頭でどうにかやってやろうとしてんのに、こいつらときたら聞く気がないな。

さて、ここで問題です。世の中の授業には、机上での理論の勉強と  
あと何があるでしょう。

正解は——実技——！

「…ようし、お前らが女だってことを自覚させてやるよ……」

「……ま、まて、姉はちゃんと羞恥心くらいあるぞ…」

「わ、私も恥ずかしいのは恥ずかしい！」

チンクとディエチが逃げようとするが、世の中連帯責任と相場は決  
まっている。

このクソガキどもは、いまいち子供<sup>ガキ</sup>とも割り切れない体つきで無防  
備に暮らしやがって。

俺の苦勞と苦悩を身体に刻み付けてやる……！

「があああああああ！……！」

『うわあああああ！？』

ラボの一室を飛び出す獲物。バカども俺はすぐさま扉を蹴り開けて追いかけた。

「わあああああ！？」 智兄、何で私を追いかけてくるのとおお！  
！」

「テメーが一番近くに居たからじゃあっ！」

「くっ、IS『ディープダイバー』！」

「させるかごるあああ！」

足の裏と背中だけにだけスラスターを換装して出力全開。

爆発的に加速して地面に潜ろうとしたセインに抱きつく。

「ひああっ！？」

「捕まえたぞおらっ」

後ろから抱きしめて沈黙。肩に顎を乗せて、頬をくっつけてやる。  
セインはかちん、と固まって…段々とくっつけた頬が厚くなってきた。

「あ…あ…あ……！」

「どうだ？ 恥ずかしくないか？」

抱きしめる力を強くする。

おなかの辺りに回した手を、撫でるように動かしてやる。

ひゃ、なんて妙に可愛い悲鳴の後、何故か俺の頭が捕まられる。

「わ、あああああ！！！」

「うおおおおっ！？」

首引っこ抜く。まさにこのことなんだろうな……なんて天地逆さまになって吹っ飛びながら地面の中に潜っていくセインを見ていた。

ギャグ補正、つてのは怖いもので。軽く壁に埋まった俺も一呼吸の後に復活。

次の獲物へと駆け出した。

「それでなんで姉なんだ~~~~~!」

「近くに居たからだってんだろぅが~~~~!」

追いかける。

なんかただの追いかけっこが、あっちは戦闘機人の能力全開で俺なんかスラスタ―噴かしてる。

……頭のどっかの冷静なところが「なんだこれ」と呟くが、それだけだ。

「なっ、チンク! こっちに来るな!!」

「そんなこといわれても姉は餌食になりたくは無い!」

「って二人とも来ないで！」

チンクを追いかけてきたはずなのに途中でトーレが追いかけてここに合流。

さらに追いかければいつの間にかクアットロも追いかける側に回っていた。

「ちょ、ちょっとタイムっ。お兄様！」

「誰が止まるか！！！」

「IS『ライドインパルス』！」

「ずるいぞ！」

「私もIS『シルバーカーテン』！」

「ところがぎっちゃん！」

覚醒者たる俺の敵ではない！！

トーレのISが発動する前にしっかりと捉え、クアットロに関して

はISが発動してから確保。

逃げ道を失ったチンクはとぼっちりでお縄についた。

「な、何で姉まで……」

「なんだ先ほどの速さは……」

「ガクガクブルブル」

「さうて、心の準備はいいか？」

『ひっ』

指をわきわきとさせて、ビームフープで捕縛した三人へと歩み寄る。

三人とも顔に恐怖を表して……

『いやああああああああああっ！』

それ以降、みんな羞恥心というものを感じるようになったようで。

無防備に身体を晒すこともなくなり、後期ナンバーたちにもちゃんとそこら辺が教えられるようになりましたとさ。

……一部なんか俺に熱い視線を送ってくるようになったけど。主に6番とか4番とか。

おまけ

「た、助かった……」



姉たちが犠牲になったその横で安堵のため息を漏らしている10番  
さんが、居たとか居ないとか。

：バカ話は筆が進むというか何と言うか。

人間痛い目見ないと学習しない↓じゃあ思いっきり辱めてやろう！

の思考回路で始まった追いかけっこ。

智哉も壊れてます。いや、だってさ……

『健全な性的嗜好を持った』『健康な』『男』ならナンバーズに閉<sup>ラ</sup>所で囲<sup>ボ</sup>まれてて、

なおかつ無防備に生活されるなんて……無理でしょ。

デイスティニープラン様、日陰様、落雷様、感想ありがとうございます。

欲しいといったらホントに貰える辺り何とっていいのやら……。嬉しいです。

件の薬は多分智哉がスカリエッティと開発してくれます。いつか。

たぶん、次もバカ話。それかほのぼの。

悪党サイドなら前者、地球サイドなら後者かな。

明日は時間ないし：木曜日にはレポート提出があるので：下手したら次の更新は四日後。

とか言いつつ恐らく明日とか明後日に更新したりします。そんな私です。

「にゃあっ」

「何でこうなるの~~~~~?」

「だからやめろってお前ふざけんなそこはやめうわちょっとマジで  
———」

次回、一寸先は闇でも一寸なんて近すぎてピント合わない：

**S i t u a t i o n   2 3   √ C   ガンダムVSガンダム**

「準備はいいかスカリエッティ……」

「完璧だよ…いつでも始めるといい」

「いざ……」

「勝負!!」

S i t u a t i o n   2 3   √ C   ガンダムVSガンダム

科学者だって常に研究をしているわけじゃない。

ずっと考えてたって新しい発想は生まれないし、作業効率も落ちてしまう。

時には休むことも遊ぶこともある。

つーことで、今日はスカリエッティ的に脳を休める日らしい。

で、丁度いいからゲームのワイヤレスコントローラを渡してみた。

「これで何をするんだい？ ゲームの本体が見当たらないんだが」

「違う違う。これ」

そういつて指し示すのは机の上に置いた…ミニチュアサイズのザク。大体1／100。

ガジェットの技術を活用させてもらって、形を形成。動力源を魔力にして、動作システムをぶち込んでみた。

本来のパイロット搭乗部にはデバイスコアもどき。もどきな理由はこれも適当に技術流用しただけで能力は通信とザク本体の制御のみ。

本体の想定はザクⅠⅠ F型。装備はザクマシンガンとザクバズーカ、ヒートホーク、クラッカー。

弾は実弾だと準備と片づけが面倒だから魔力弾で妥協。あとミサイルランチャーは作ったけど誘導性に問題があったので撤去。

反応性も操作性もなかなか悪くない。おもちゃにしては超高性能。

何でザクかって言うと一番簡単でオーソドックスだから。

「暇だから作って見たら、面白すぎて調子に乗った」

「それで折角だから戦ってみたいと？」

「ザツツライト」

「ふむ…まあ、面白いかもしれないね」

スカリエッティはコントローラを握る。

ボタンとそれに対応する動きを教え、動作確認をしたら…スタート。

「おおらあっ」

「むっ」

初撃いきなりクラッカーをぶん投げる。

それも意外とすんなり避けられたからちよつと凹む。

むしろスカリエッティのザクは、後方で爆発した俺のクラッカーの爆風に合わせて急加速して接近してくる。

接近戦か、面白い。なんて思ってヒートホーク抜いたら――

「甘いよ智哉君」

「なあっ!?!」

まっすぐ接近しながらザクバズーカを俺のザクに向けた。

慌てて肩に付いた装甲でガードしつつ横方向へとスラスターを噴出す。

が、バズーカの威力はそう簡単に逃がせるものではなく、左腕の機能が停止した。

スカリエッティの機体はバズーカ発射の反動を上手く利用して突進を止めていて負傷はなさそうだ。

「てんめえ…やたら上手いな…」

「なかなかこれは面白いよ」

初期型ザクであるが故に若干もっさりした動きをしていて、だからこそ使う側の技術が問われる。

つまり俺は圧倒的にスカリエッティに技術も作戦も頭脳も負けている！

作った人間としてのプライドがそんなものを許す筈が無い。



「んなろっ、おらおらおらおらおらおらおらおらおらおらおら  
！！」

「これはっ…」

ジグザグ移動をしながら呐喊し、同時にザクマシンガンをばら撒く。  
一撃に威力は無くとも、こうも全体にばら撒けばダメージを回避する  
ことは不可能！！

「ドクター、智兄…何やってるの？」

なんかどっかのセインとか6番とか水色とか地面から出てきたけど  
無視っ。

そんなことよりこっちが大事！

「これでも食らえっ」

「当たると思うかい！」

「うっせえ当たれ!!」

弾切れになったザクマシンガンを投擲する。

当然それは避けられるんだけど予定通り!

避けた方向には既に俺のザクが呐喊している。そのままヒートホークを抜いて…

「おらあ!」

「くっ」

一閃。

しかしそれも絶妙な動きでずらされてスカリエッティのザクの右腕右足を切り落とすに終わる。

しかも反撃でヒートホークを抜いて俺のザクの頭部が切り飛ばされた。

「たかがメインカメラがやられたただけだ!!」

「なにっ!？」

後方へジャンプと同時にザクバズーカを抜いて、一発。

脚を片方失ってバランスが狂い、機動力をなくしたスカリエッティのザクは大火力の一撃が直撃して沈黙した。

な、なんとか製作者の面子は保たれた……。

「なんだろうね……こう、所詮はお遊びの筈なのにどうにも悔しいのは」

「遊びなんてそんなもんだろ？」

「次っ、次っ、あたしがやっていい!？」

「セイン？」

あれ、いつの間にセインが。

つーか次も何も、これしか作ってないし。さらにたった今破損した

し。

ネタで作っただけだから予備パーツとか作ってねーよ。

「ええー！？」

ええーて。分かった分かったよ作りますよ。

ついでだからグフでも作ってみるか。ドムは作れるか…？

その後、何故かミニチュアガンダムバトルがラボで流行ったり流行らなかったり。

何故かトーレとセインが熱狂的。

以下、二ヵ月後の順位。どうでもいいけどね。

一位、俺。

二位、チンク。

三位、スカリエッティ。

四位、ディエチ、クアットロ。

六位、トーレ。

七位、セイン。

あとは不参加のウーノとドゥーエ。でも一回だけやったらウーノさん最強でした。

でもって、弱すぎだよ3と6。

## Situation 23 √C ガンダムVSガンダム（後書き）

完全にネタ回。実際意味は無い。

でもこんなのがあったら絶対買うよね。ってことで。

次回はなのはさんリハビリ話かにゃ。

デイスティニープラン様、落雷様。感想感謝です。

ちなみにフラグは無いと信じたいがががががg

「わたし、もう空…飛べないんだって」

「意気地なし」

「やだっ、そんなのやだよお!!」

次話、類は友を呼ぶだけじゃなくて周りも汚染する

Side Louise. H

「……………バカ？」

「うう…言い返せない……」

リハビリ中のなのはの下を訪れて、思わず口に出た言葉がそれだった。

Situation 24  $\sqrt{C}$  勘違いって基本的に原因が些細なことだよな

なのはが堕ちてから半年。

リハビリを始めてから四ヶ月になるわけだけど、リハビリは遅々と進んでいなかった。



肺機能が劇的に低下しているため、リハビリすら長時間行えない。

身動きの取れない人にどんな声を掛けたいかわからなかったから、暫らくお見舞いには行ってなかった。

事件後、私がお見舞いに来るのは初めてになる。

扉を開いて、見えた最初の病室の光景は四歳も年下の私の弟であるキラに勉強を教わって、

なおかつ分からなくて軽くパニック状態になっているのはの姿だった。

そして、冒頭に戻る。

「あ、ルイス姉さん」

「今日は非番なの？」

「うん。友達と遊ぶ約束もしてたんだけどね。向こうが急にお祖父さんのところに行かなきゃなくなっただとかで」

「なるほどね」

「にゃーっ、キラ君ここわかんないー！」

「……プライドとかないの？」

「言わないで……」

とか言いながら、私もキラに勝てる気はしない。

理由は知らないけど、キラは中学卒業までに大検を取るのを目標としていて、今は高校の範囲に入ってたってこの前言ってたっけ？

実際キラの優秀さはちょっと……ううん、かなり異常かなあとか思ってる。

異常さで言えば、姉さんの地獄耳とか、察知力とかも異常だなあ……。

——ぶるっ。

背筋に悪寒が走った。

やばい、姉さんが心の中の呟きすら聞き取ったかな……。あの人なら出来る気がする……。

「それで、なんで今更勉強なんて……そこら辺捨てたんだと思ってたけど」

「そんなことないよっ。やる暇が無かったからちよつと遅れるんだもんっ」

「ちなみに、数学と物理は高校級だけど国語と生物、あと社会かな。小学校中学年級だよ」

「なんでばらしちゃうのっ!？」

「あははっ」

「笑い事じゃないのゝゝゝ!」

腕を振り回して猛抗議するなのは。

それにしても、それはちよつと色々とまずい気がするんだけど。

しっかりキラに教えてもらいなさい。

それから一時間ほど、なのはが悪戦苦闘してるのを横目に読書をしてたら看護師さんがリハビリの時間を伝えに来た。

車椅子に乘せられてリハビリへと向かうのは。

病室の扉が閉じたところで、私は帰ろうかと荷物を纏め始める。

でもキラは逆にベッド脇の患者さんの容態管理ツールに自分の個人端末を接続し、捜査を始めた。

「…それ、もしかしくなくてもプライバシーの侵害じゃない？」

「うん。あとセクハラだね。身体の情報も全部入ってるし」

「わかってて何をやってるの？」

「……ごめん。姉さんにも言えない。ただ、父さんへの手がかりの可能性があるんだ」

兄さんへの手がかり……？

横から覗き込むようにキラの操作している端末を見してみる。

うわぁ…身長、体重、身体の状態、女の子の赤裸々な情報ばっかり…。

………粒子？ 身体へ、の、影響…？

「ガ、ン…ダム？」

「うわっ、見ないでよっ」

暗号化し解けばよかった…なんてぼやいて端末を隠すキラはもう私の意識には無い。

ガンダム？　それが兄さんを、私たちの大切な家族を奪った原因？

殆ど考えずにキラに先に帰る旨を伝えて病室を出る。

閉じた扉を背に、唇を噛んだ。

「ガンダム……！」

S i d e   o u t .                      A n d   s i d e   K i r a .   Y

まづかったかなあ…。ルイス姉さんにこれが見られたの。

まあ、多分一目見ただけじゃ意味は分からないだろうし大丈夫だと思ふ。

なのはさんの身体には、やっぱり擬似GN粒子というエネルギーが悪影響を及ぼしていた。

直撃した肺に細胞障害を起こしているみたいだ。

父さんの部屋を改めて漁ってみたら、擬似GN粒子の危険性が書いてあるメモを見つけた。

他にも、ガンダムシリーズで危険なものが纏めてあった。

PCとかの記録を見た感じだと、ガンダムという機体そのものをどうにかデバイスで再現しようとしていたみたいだ。

その上で危険だから間違っても再現しちゃいけないものを箇条書きで記録しておいたみたい。

微妙に暗号化してあったから解読に時間も掛かったけどね。

デバイスの方も片手間で作ってたみたいだから結局は完成まで至らなかったみたいだけ。

「でも、これが実際に使われてるってことは…父さんが直接…いや協力関係にある……？」

可能性は色々思いつく。

父さんが直接関係している可能性。

擬似GN粒子を扱えるだけの科学力を持った人に父さんが協力している可能性。

…考えたくは無いけど、父さんと同じだけの知識と科学力を持った人が居る可能性。

嫌な想像もつくけど、父さんが関係している可能性は高い。

そして、今のミッド、ましてや地球の医療技術でなのはさんの怪我は完治できない。

でも父さんなら何か知ってるはず……。

とにかく、これで何らかの形である事件に父さんが関係していることが確定した。

いつか…また、逢えるかな……。

S i d e  
o u t.



と、いうことで微妙に擦れ違う妹と息子です。

あるえ〜？ こんな話じゃなかったはずなんだけどなあ…。

もちよつとなのはさん絡む予定だった筈。あるえ？

デイスティニープラン様、落雷様。感想感謝です。

私もザク欲しいです。誰か作って。

次回、地球組にスポットが。主にユラとかアリサとかすすずかとか。

え、マジで？ そんなのあり？

「ね、二人もちよつと協力して？」

「私だってこれくらい！！」

「まっかせなさい！」

次回、親は無くても子は育つけど、大なり小なり歪むよ。

音を立てずに部屋の扉が開く。

その部屋の主は、未だ学校から帰宅していない。

まして、友人と予定があるため帰りが普段よりも遅いことは確認済みだった。

それでも、形跡を残さないように足下や物の配置に気をつけて進む。

机の鍵付きの引き出し。

鍵は同型のものを既に入手していた。

「よし…」

開錠の音が部屋に響く。

侵入者は微笑を浮かべて、その引き出しの中の約二センチ四方のそれを手に取り、痕跡を残さないように部屋を去っていった。

Situation 25 √C 残された者たち IIII

S  
i  
d  
e  
Y  
u  
r  
a  
A

「あんた、まさかその話本当じゃないでしょうね……」

「本当だけど？」

「馬鹿じゃないの！ それじゃ泥棒じゃない！！」

「だからそうだって言ってるのに…」

アリサの癩癩を聞き流して、手のひらのそれを見る。

形は立方体。角は丸みを帯びていて、基本的な色は金。

キラの部屋から盗み出したもの。MSデバイス。たしか、型番はMS-002。

これがあれば、魔力を持たなくても資質だけで魔法を使える。

魔法の資質自体は大なり小なりみんなあるものだからまず使えないことは無いといってもいい、んだって。

「私は、キラを助けたい。ルイス姉さんを手伝いたい。父様を探し出したい」

「……そうだね。私もなのはちゃんたちを手伝ってあげたいよ」

「私だってそうよ。でも、仕方ないじゃない」

「だから、これ。忍さんならグレードを下げて複製とか出来るよね？」

「お姉ちゃん？ うーん、出来るかも……」

話の根本的なところはこうだ。

まず、なのはの墜落を機にすずかとアリサは魔法や次元世界、管理局についてなのはたちから教えられた。

手伝いたいと思ったが自分たちにはリンカーコアが無い。それほどうにもならない。

そこでキラに手伝うことを許可されず悶々としていたユラと遭遇する。

ユラは悩んだ挙句、MSデバイスの強奪を思いついたということ。

以下、ユラ視点に戻る。

なのさちゃんの怪我を見て思った。キラとルイス姉さんはこんな危険があるところで父様の手がかりを探してる。

私だって、何か出来る。

友達や、家族を助けたい。

そう思ったら止まらなかった。

「ねえ、やってみよう？ みんなの迷惑にならないように練習して、驚かせてやろうよっ」

「でも……」

「…うん。やってみようか」

「すずか!？」

「アリサちゃん、私だって不安はあるよ？　でも、なのはちゃん…  
今回は助かったから良かったけど、

今度は誰かが死んじゃうかもしれない。そんなの私はいや。だから、私もみんなを守りたい」

「……………そうね。出来ることだけ、やってみましょうか」

二人も協力してくれる。

すずかちゃんにお願いして、忍さんに会わせてもらう。

渋った忍さんだけど、お願いしたらなんとかオーケーしてくれた。

半年か、長くても一年くらいで作るって。…すごいなあ。

でも……これで私も戦える。私だって戦える。これなら、父様を探しにいける。

待っててください、父様。



S  
i  
d  
e  
  
T  
i  
f  
f  
a  
.  
  
A

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t  
.

なにかユラがこそそと行動しているのは分かってるんですが、どうしたものでしょうか。

危険なことなら止めるべきなのか、それともやれるだけやらせてみるべきなのか。

でも、主の教育方針が『とりあえずやらせてみる』でしたからね…。

「ふう…」

美味しい茶葉を頂いたので、クッキーを焼いてゆったりとした午後の一時を過ごします。

今日はみんな出かけているから、ちょっと寂しいです。

子供は危険なことを経験して学びます。

火に近付いてその熱さを知り、火傷の危険を学びます。目の前を通り過ぎる車を見て、道路の危険を感じます。

だから、どんなに危険だろうとまずは経験させる。けれどその前に危険性だけは説いておく。

ただし自分の行動に責任を持つ。

主がそういう教え方をしてきたのを知っています。

けれど……

「みんな待てないんでしょうかね……そこが子供なんでしょうか？」

待つことは一番難しく、恐いことです。信じて信じて、待って待って。帰ってこないかもしれません。

子供たちにはそれは難しかったんでしょうね。

私は、待ちます。通わせて貰ってる学校へ行って、家の管理をして。

「そろそろ……私も限界なんですよー……」

ぽつり、呟きました。

来年私も高校を卒業します。

それから二年でこの日本における成人となります。

それまでに…それまでに帰ってこなかったら、私だって探しに行きますよ。

私も、主のこと大好きですから。

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t.

秀才過ぎるキラに対して若干わがままというか子供っぽいユラ。

同じく海鳴に残された身であるアリサやすすか悪巧み。

そんなユラもちょっと成長して智哉への呼称がパパ↓父様に。

でもって妙にいじらしいティファ。

うーん。暴走してるなあ…。

話は変わって、落雷様、いずむ様、ディステイニープラン様、感想  
ありがとうございます。

＜＜落雷様。

ザツツライトです。デビルは危険です。存在そのものが。

あとは：ゼロシステムとかバーサーカーシステムとか使いこなせり  
や強いけど、常人だったら壊れるとか周りに影響激しいものが多い。

本来の使ってる奴らがある意味尋常じゃないだけですからね。

その他は…まあ、確かに使い方さえまともならそうでもないかもで  
すね。

くくいずむ様

申し訳ないですが、多分出ないです。

オリキャラもどきとして出すにしてもこれ以上人が増えると収拾が  
付かなく（ry

くくデイスティニープラン様

応援ありがとうございます。

ふと思い立ってそれぞれ感想返しやってみた。

うん、ただそれだけなんだ。

じゃ、学校行ってきます。

「ふーん、これがレリック」

「逃がしません」

「私も…動きますか」

次回、猫は小判に興味ないけど馬は耳元で念仏唱えられたら嫌がる  
と思う。

注意

※今回の話に意味はありません

※山も無ければ落ちもありません

※むしろ本編の雰囲気ぶち壊しなので見ない方がいいかも



智哉「はいどーもこんにちわ。今回は某虎道場的なノリでやっていきたいと思いまーす」

ティファ「ま、まーす？」

智哉「声が小さいぞ弟子一号」

弟子一号「ふえっ？ 私がですか…っでもう名前も変わってる!？」

智哉「今日に限って色々なエググイ質問や、作者自身で気付いちゃった突っ込みどころにざくざく槍刺してくよ」

弟子一号「えっと…それはちょっと拙いのでは…」

智哉「なんのこれしき! そんなものでは時代に乗り遅れるぞ!」

弟子一号「そうですか…？ え、これを読みますか？ はい。えっと…『神のくだりって何だったの？』」

智哉「導入編だ。忘れてくれ。転生とかトリップ系のテンプレに逆らってみたかっただけなんだ」

弟子一号「次です。『キャラが変わりすぎ』」

智哉「成長だ。もしくは周りの環境の変化への適応。…そう信じてくれ。決して作者の実力不足を責めないで」

弟子一号「そうですか。『智哉の行動が体当たり気味？』」

智哉「だって俺、初登場時17だぜ？ それくらい見逃してくれよ」

一号「それはそうですけど…あれっ、私の名前短くなってる!？」

智哉「気にするな。『智哉って研究とか出来るの？』。コーディネーターの能力もあるから出来なくは無いな」

一号「それでも基本的に遊び心から始めますよね」

智哉「そりゃそうだ。面白くないことやって意味あるか？」

一号「極論ですよね…。次です。『毎度の適当すぎる予告とか微妙な諺タイトルに意味は？』」

智哉「基本にお遊びなんだけどな。そろそろ作者の脳内の諺ストックが切れそうで涙目なんだぜ」

一号「『話がいつの間にか進んでない？』」

智哉「間の状況は脳内補完でよろしくなんだぜ。……話が飛び飛ぶな雰囲気なのは仕様なのさ」

一号「『キラがもう一人の主人公？』」

智哉「エウーゴルトはその線だ。悪者サイドは俺で、逆サイドからメインはキラ。そうでもしないと両方の事情書けないし」

号「『原作キャラが空気すぎ』…って私の名前これ酷いです！」

智哉「俺も確かに酷い気がしてきた。意見の方はばっちしだ。作者自身も『あれ?』とか思ってる。どうにか出番を模索中だ」

号「私の名前直してください〜!」

智哉「…くるりんぱ!」

一 子 弟

号「そんなので直るんですか——って微妙に直ってません!」

智哉「遅れてきた反抗期か? いよいよしょお!」

○○○号「なんか放送禁止用語みたいです!」

智哉「なにくそどっせーい!」

全略

智哉「あり? ちなみに『もういや〜!』って言ってるからな。いい加減かわいそうだから何とかしてくれ」

ティファ「え、えと……あつ、直ってます！　それではっ、ありがとうございました！」

智哉「えっ終わりなのか！？　ど、どもでした！　以降もこの駄作品にお付き合いくださると光栄です！」

<<<<ありがとうございます。今後もよろしくお願いします。  
>>>>

———舞台裏

智哉「お疲れさん」

ティファ「酷い目にあっただけの気がします…」

智哉「気にするなって。番外編なんてこんなもんなんだから」

ディレクター、智哉に一枚の紙を渡す

智哉「ん？ あまってた？ 何々…ああ、さっきの質問コーナーのやつか。『これからの人生どう生きてらいいか分かりません』……」

ティファ「…あ、作者さんからですね」

智哉「……………！！！！ 知るかボケ！！ 自分で考えろやあ！！」

智哉、紙を地面に叩きつけて踏む。

ディレクター、すかさずもう一枚渡す。

智哉「まだあるのか…………… 『前回のEXストーリーと本編が繋がらない』」

ティファ「……………」

智哉「……………」

ティファ「えっと…可能性の一つと言うことで…」

智哉「他のルートだと繋がるからなっ。ホントだぞ！」

逃げるように立ち去る二人。

どっとはらい。山も落ちも無し。



## **Situation EX-02 ユニーク50000記念! (後書き)**

と、いうことで番外編。

なんとなくアクセス解析見たら丁度ユニーク50000ヒット超えてたので慌てて書いてみた。

だから若干やつつけ仕事。自分的に気合入れて書いたけど。

次回は本編なのだ。頑張るのだ。それではっ。



いいか、落ち着いて聞いてくれ。

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

おれは朝起きてパソコンを付けてみたら、昨晚までに八割方完成してた次の更新内容の意味がまったく分からなかった！

な… 何を言ってるのか わからねーと思うが

おれも何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…

アルツだとかド忘れだとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

——いや、言い訳です。どうぞ。

この日、本当は参加するつもりも無かったこの状況。

いつもどおり週末の任務だって呼び出されてみれば、まさかの状況。

ルイス姉さんも同様の手口で呼び出されたみたいで頭を抱えている。

「それでは、戦技披露会を開催いたします」

……どういふことなんでしょうか、リンディさん。

Situation 26 √C 試行錯誤した挙句、結果これですか

「えっとね…上の方からせつつかれちゃって…ごめんなさいねっ」

いや、あの…そんな「やっちゃった♪」と言わんばかりの表情で言われても怒りが収まらないんですが。

MSデバイスは管理局的にブラックボックスが多いから、あまり見せたくないって言ってるのに。

とっくにエントリー済ましてあるし。

「でもここで勝っておけば評価も上がるから、入ってくる情報も増えるかもしれないわよ？」

「それでもですね……」

肩を落としてる姉さん。

僕は…なんかこう…諦めた？ うん、それに近い。

とりあえず姉さんの使ってるデバイスはMSデバイスでは無いからいいとして、僕のは調整が必要だね。

端末を起動して、装甲——バリアジャケットをフィールド型部分だけを展開するようにしてごまかして……

武器は…とりあえずビームライフルと…ビームサーベルだけ出せるようにしとけば大丈夫か。

「ええっ!？」

「今度は何…」

「なのはたちも参加するって」

「……………」

リンデイさんをジト目で見る。…逸らした。

どうしよ…シールドも出しとこうか。でも装甲展開しないとエネルギー効率下がるんだよね…。

はあ、何で囑託のはずの僕らがこんなことになってるんだろう。

披露会自体はトーナメント形式で進むみたい。

ただ…僕の知る限り参加メンバーの強さが半端じゃないんですけど。

一人目、高町なのは。

先日リハビリを終え、それでも長時間の運動が不可能ということで前線部隊から教導隊へ異動。

が、「短時間決戦ならいいんでしょう？」といわんばかりの瞬間火力のバカバカしさ。

身体に負担のかかるカートリッジシステムの使用を禁止されたにも関わらず、Sランク相当の魔力砲の嵐。

時たま前線に出ては5分ほどで敵を全員昏倒させて事件が終結する

こともしばしばとか。

二人目、フェイト・テストロッサ・ハラオウン。

ようやく執務官試験に合格した直後の出場。

得意とする高速戦闘で右に出るものは居ないといっても多分過言じゃない。

そのくせクロスレンジの高速戦闘からアウトレンジの砲撃戦までこなすオールマイティ。

微妙に天然な人だけど一番洒落にならない。

同じく二人の幼なじみである八神はやてさんは欠場。

自分は後方からの広域殲滅しか出来ないからこういうのには向かないとか。

三人目、シグナム。

主の代わりにと言わんばかりに嬉々として出場した、言わずと知れた管理局のバトルマニア。

しかし古代ベルカの騎士、将を名乗るだけあってその実力は異常。

近接戦闘の鬼と言ってもいいかも。

一対一になった時点で敗北を認めた方が懸命だと僕は思う。

四人目、クロノ・ハラオウン。

提督ながら、この人も母親に騙されたくらしく参加。

「たまには身体を動かすか」とすぐに切り替えるその様子は達観している気がする。

なのはたちの才能が…とか、バカ魔力が…とか言いながらも何気なく負け無しの凄い人。

なによりデバイス二本の同時使用とか普通出来ないですけど。

五人目、ルイス・ハレヴィ。

と、いうか姉さん。

なのはさんと同系の後方砲撃型魔導師。

あのデバイスも僕がMSデバイスの応用で作った奴だけど、洒落にならない。

三本の砲撃を並行励起して発射することで途中でビームが曲がる。

実際戦いたくない。

……どうかこの人たちだけには当たりませんように。

——と、言う願いもすぐに崩れた。

一回勝てばたぶんフェイトさんとぶつかります本当にありが……何を言おうとしてたんだろう？

何はともあれ本当にフェイトさんと当たる。

とりあえず、第一戦で当たったのはさんとクロノさんの試合を見て現実逃避しよう。

「即行で決めるよっ」

「負けるわけにはいかないな」

どう考えても二、三ヶ月前まで病院でリハビリしてたと思えないのはさん。

対してクロノさんは余裕そうにS2Uとデュランダルを両手に構えた。



「デイベインバスター!!」

「プロテクション！」

抜き打ちで放った一撃をクロノさんは受け流す。

同時にデイベインバスターに沿うようにステインガースナイプが放たれた。

なのはさんはそれをプロテクションでガードして飛び上がる。

「甘い！」

飛び上がって向かった位置へ向かって、最初にクロノさんが居た場所から十本以上のスナイプが飛ぶ。

なのはさんは「そっちもね」などと言いつつ全て砲撃で掻き消す。

後方から呐喊してきたクロノさんに向かって振り向きざまにショットバスターを放つが身体を捻って避けられる。

……ああ、なんで無限書庫勤務のはずのユーノさんが呼び出されたのかわかった。

こんな人たちが本気で戦ったら普通の人じゃ結界持たないよね。

直接話したりしたことはないけど、結界魔法の名手だって聞いている。

：無限書庫は激務なのに。目の下の隈が見てて辛いです。

ぼーっと見ていたら、ブザー音。

ぴたりと試合は止まる。

「なのはちゃん。時間よ」

「えー……残念。負けちゃった」

「いや、時間制限が無きゃ分からなかったさ」

肩を落とすなのはさんと、宥めるクロノさん。

なるほど、時間制限だ。なのはさんは今回出場するに当たって、試合辺り10分の時間制限を設けたんだとか。

そうでもしなきゃ止まらないとか何とか。

とにかくこの試合の勝者はクロノさんに決定。

よくあの一撃必殺の砲撃の雨をくぐって攻撃なんて出来るよ。うん。

さて、今の試合を見て棄権者続出。

流れに沿って棄権しようかなあ、なんて動いてみたら凄い力で姉さんに肩を掴まれた。

「逃がすわけ無いでしょ♪」

そうですか。

つーことで続くキラ君サイド。

基本的に前書きどおり。いやマジです。

殆ど出来てた次の更新の分の意味とか内容とか全く理解できなくて新しく書き直した結果がこれ。

…多分、4、5回はこの話続きます。

終わった頃には……本編が進むといいなあ。

デイスティニープラン様、落雷様。感想ありがとうございます。

ずっと応援してもらってるのにこんなんですいません。

しばらくネタ回というかバトル回です。

「ふっふっふ…楽しみにしていたぞ」

「認めたくないものだな……若さゆえの過ちと言つものは」

「なっ、なんなんだそれは！」

次回、カエルの子はカエルじゃなくて赤ちゃんだよ！

続いての試合。

対戦相手が棄権したため、不戦勝。

勝ったのは…シャア・アズナブル三佐？ 良く逃げなかったねこの人。

つまり自分の実力に自身がある人なんだろうか。

「次…僕か」

「あ、よろしくねキラ♪」

「ね…姉、さん」

運良くシード権を引いたと言うのに。

なんで…ってルイス姉さんの相手が棄権したから不戦勝してきたのか。

くっ、なんで姉さんが僕を引きとめたか理解したよ。

S i t u a t i o n    27    √C    何気に話引っ張るの初めてだ

広い訓練場の真ん中で、ストライクフリーダムを起動。

装甲となるBJのフィールド成分だけを展開。ビームライフルとビームサーベルを取り出し、左手首にビームシールド発生装置を顕現

する。

対して姉さんはデバイスを起動、巨大な銃を構える。

「自分で作ったデバイスでやられるのね」

「姉さんこそ、四歳も年下の弟にやられるんだよ」

お互い挑発が洒落にならない。

試合開始のブザーと共に、僕は駆け出した。

まっすぐ姉さんへと走る僕に、巨大な砲撃が飛んでくる。

横にステップを踏んで避けようとするけど、やはり途中で折れ曲がって的確に狙ってくる。

「何だあれはっ」

「あれ、シグナム知らなかった？ ルイスの砲撃って途中で曲げられるんだよ」

「あたしは知ってたぞ。しかもあれってなのはのデイベインバスター並だからな」



「どんな魔法だ…」

外野煩いよ。

こっちは必死なんです。

姉さんはあの砲撃のワンパターン戦法だけど、なかなか突っ込めない。

ちなみにあのデバイスはかなり高性能。

曲がる機能はなくなるけど、連射とか三本の砲撃戦を拡散させたりとかもできるようにしてあったり。

そして撃つ機能以外付けてないから溜めもほぼ無し。

……敵にするとこうも面倒だとは。

「どうしよ」

うん。負けよっか。

とりあえず一撃くらい当ててからね。

クロノさんの真似事で向かってくる砲撃に沿うようにビームライフルを撃つ。

見え見えの攻撃は当然避けられる。しかも僕から視線を離さない。

呐喊しながら両手にビームライフル。

速射で短い砲撃を連発してくる姉さん。

避けて受け流して、シールドでガードする。

ギリギリまで正面から突っ込んで…残り一步で横に！

「チェックメイト」

そう言ったのはルイス姉さんのほう。

目の前には銃口。読まれてたようで。

放たれた砲撃によって僕は吹き飛んだ。

：うん。別に負けるつもり満々だったけど一撃も与えられないのは  
どうだろって思うんだ。

気持ちだけで、いったい何が守れるっていうんだ！　ってね。

頭の中のそんな戯言を笑いながら、次の試合を見る。

次といってもホントは三つ後の試合なんだけど、間二つは両者棄権  
で無効。

とか言いながら、結局これも無効試合なんだけどね。

「不戦勝。フェイト・テストロッサ・ハラオウン」

ね。

うん。不戦勝のところは飛ばそうか。次のシグナムさんも不戦勝だ  
から。

多分次はクロノさんとあのアズナブルとか言う人。

油断無く二つのデバイスを構えるクロノさんと、顔の上半分が仮面で隠れた怪しすぎるアズナブル三佐。

自然体で構え、ここから見た感じだと隙だらけに見える。

「こちらから行かせて貰おう」

「来いっ」

駆け出すアズナブル三佐に対してクロノさんはデュランダルを用いた氷結魔法で足止めを図る。

でもアズナブル三佐はまるでスライドするように横に動き足下に発生した魔法を避けた。

「当たらなければどうと言うことは無いさ」

そう言ってアズナブル三佐はステップを踏みながら接近する。

クロノさんもオールレンジで戦える人だ。そう簡単にやられやしな

い。

そう思ってた。

「ぐっ」

確実に射撃魔法を避けてくる相手に、同じく接近戦で対応しようと思っただろう。

クロノさんの間合いまであと一歩というところで……クロノさんが倒れた。

周りがみんなポカンと呆けている中、アズナブル三佐は倒れたクロノさんに背を向けていった。

「何故君が勝てなかったかわかるか？ 坊やだからだよ」

医療班がチェックしたところ、やはりクロノさんはアズナブル三佐にやられたという結果が出た。

あの人は…何者なんだ？



謎の仮面キャラ登場——いやあの人です。ありがとうございました。

こっちサイドの主人公とKY退場。え、マジで？

まだまだ続くよバカバトル(笑)

OOフリーダム様、落雷様、デイスティニープラン様、感想感謝です。

>>OOフリーダム様。

うん、なんか書いてるうちにそれもいいかもって思ってきました。

このルートなら成立するかなあ……。

勢いづけば、今夜か明朝にも更新するかも。

P. S. P.

誰かことわざ教えて。もうストックが(r y

「ま、たまには楽しめますか」

「ところがどっこい」

「その試合待ったーーーーー！」

次回、終わりよければ……って過程がダメなら結果も大抵ダメ。



Side ???

うつわゝ、性能良すぎだろこれ。三倍速どころの騒ぎじゃないぞ。

あのバカドクター…天才なのか馬鹿なのかわからんぞ。いや天才で馬鹿か。

性能チェックのためにノリで忍び込んだだけなのに注目されちゃったじゃねーか。

…え？ 仮面で最初から注目されてる？

うるさいやいっ。

…え、お前かよって。期待して損したって？

言うな…俺もこれはどうかと思ったんだ。上告もしたんだ。でもダメだったんだよ。

「ま、たまには楽しめますか」

息子と妹も居ることだしな。とりあえず全部忘れよ。

Side out.

Situation 28 √C 『無題』 ってある意味タイトル

だよね

続いて姉さんは対戦相手不在で不戦勝。次はアズナブル三佐と当てることになる。

残る試合はシグナムさんVSフェイトさん。

「負けません」

「決着をつけてやろう」

「ところがどっこい」

不敵そうに笑い、デバイスを構える二人。

そこへ、今日は参加できないはずの笑顔を浮かべたはやてさんが現れた。

「あ、主…」

「その顔はわかつとるようやな」

「これだけっ、この試合だけでも!!」

「あかん！　なんで他の部署の私のところまでシグナムを探すように要請が来るんや!!」

……呆然となる会場。

同じく観客席の隣に座るヴィータさんに聞いてみる。

「あのバカ…仕事放って来たらしい」

「……それは怒られるね」

「くそおおお！」なんて引き摺られながら会場を後にするシグナムさん。

何はともあれ、フェイトさん不戦勝。

「……結局、姉さんとフェイトさん、アズナブル三佐の誰かになるのかな」

「まあ、フェイトは次も不戦勝で決勝戦行きだからな」

完全に観戦モードの僕とヴィータさん。

ポップコーンでもあれば丁度いいのにな。

「あるよ」

「って何で持ってるんですか！」

「いや、なんか摘む物くらい欲しいかなって」

「……頂きます」

もぐもぐ。…ほんのりバターの香りが美味しいです。

うーん、飲み物も欲しいなあ。

「あるよ」

「…どこから出しました？」

「アイゼンの格納領域」

「……ごちそうさまです」

じゅるじゅる。あ、コーラだ。

もぐもぐ、ごくごく。

あ、食べます？ 一つどうぞ。

いえいえ。ホント、あの人たちもよくやりますよね。

えー？　僕なんてまだまだですよ。

「何をほんわか観戦してるんだ」

「あ、お帰りなさい」

「……何も言わないぞ」

ため息を一つついて隣に座ったクロノさん。

会場は準備が終わったらしく、アズナブル三佐と姉さんが対峙する。  
姉さんは、未知数の实力を持つアズナブル三佐を警戒しているみたいだ。

「掛かってくるといい」

「言われなくともっ」

初弾。曲がる砲撃。

しかし、限界まで引きつけて一足で避ける方法を取ったアズナブル三佐。

……あの砲撃の弱点を知っている？

当然砲撃を撃っている間にその発射軸をずらしたりなんて出来る筈は無いんだけど（なのはさんという例外が居る）、

ルイス姉さんのあれは三本分の砲撃を一度に発射するためそれが顕著に出る。

反動が大きいから身体を捻るくらいの動き以上のことが出来ない。

そして砲撃自体が曲がることも、急カーブが出来るわけじゃないから当たる寸前まで引きつけて見切ってしまうばかりかわせる。

そうそうそんな技巧が出来る人も居ないけど。

それをやって見せたっていうことだ。

「まだまだ甘いな」

「何をっ」



呐喊してくるアズナブル三佐に対して、すぐに砲撃を連射に切り替えて攻撃する姉さん。

アズナブル三佐は腰のホルダーから円筒型の恐らくデバイスを取り出す。

砲撃を軽々と避けながら構えたアズナブル三佐のそれは、まるでビームサーベルのようで――

「まさか…ね」

たまたま同じような形状だったに違いない。

姉さんは銃身で受け、弾き返す。

三佐は返す刀で切り上げる。

ステップを踏んで姉さんは距離を取った。

「ふっ」

「え――――」

何故か開いた間が一瞬のうちに詰められていて、姉さんは袈裟切りに切られて気絶した。

やっぱり謎の動きをするシャア・アズナブル三佐。

次は決勝のフェイトさんとの戦いだ。

「どっちだと思います?」

「わかんねー。フェイトだと思いたいけどな」

「アズナブル三佐の実力も相当のようだからな」

三人はもはや完全に観客。

姉さんももう五分もしないうちに目を覚ますだろう。

＜決勝を始めます＞

コールを受けて二人がスペースの真ん中辺りに立つ。

「デバイスの違いが戦力の決定的な差でないことを教えてやろう」

「誰が相手だろうと、負けません」

お互いにデバイスを構え、試合開始のコールを待ち――

「その試合待った――！！！」

某不屈のエースの乱入で事態は混沌と化した。

勢い付いて勢いで書いた。反省は…している。

新キャラなんか出さないよっ。そんなにキャラ増やして私が扱いきれるもんか！

へボ作者に期待なんかするんじゃないっ！

……………いやホント、期待させてごめんなさいorz

OOフリーダム様、ディスティニープラン様、落雷様。感想感謝です。

ちなみにOOフリーダム様。それ混ぜてどこの世界を消滅させに行くつもりですか？

最終兵器と呼んでも差異は無いと思います。  
アルデマウェポン

「はあ…どうなってるのこれ」

「頑張りましたまえ、少年」

「少し、頭冷やそうか」

次回、飼い犬に手を噛まれるってそんなに少なくて無いと思うよ。

「時間切れで負けなんてやっぱり納得できないの!!」

そうレイジングハートを構えてのたまうのはさん。

これから決勝戦を繰り広げるはずだったフェイトさんはおろか、三佐すら仮面の下で哑然としてる気がする。

と言ってる僕も思わず口が開いたままだ。

「何をやっているんだ……」

頭を抑えてのクロノさんの一言に激しく同意したかった。

S  
i  
t  
u  
a  
t  
i  
o  
n

2  
9

√  
C

若い発想力には勝てません

「なっ、なのは！ シャマルさんはどうしたの！？」

「シャマル先生はバインドでぐるぐる巻きにしてきたから邪魔する人は居ないよっ」

いや、満面の笑みで言われても。

身体に悪いから止めてるわけで決して邪魔がしたいわけでもないと思うんだけど…。

「と、に、か、くっ！ もう一回勝負！」

「なのは！ 大会なんだから一回負けたらもう——」

「そんなこと言ってフェイトちゃん逃げるんだ？」

「……………」

あ、ぷつんっていう音が聞こえた。

フェイトさんもバルディッシュに魔力刃を発生させる。

うん。遠くからだとわかりにくいけど、目が恐らく単色です。



「なのはあああああ！」

「やるよっ、レイジングハート！」

< a . . . All right, master. >

止めない——いや、止められないんだね。

勃発した若きエースたちのガチンコバトル。二人の戦闘の余波がとんでもないです。

「ディバインバスター!!」

「アークセイバー！」

結界が揺れてます。ユーノさんの表情を見ると、とても生きている人のものとは思えないです。

寝不足、過労＋結界維持の魔力消費とこの大暴れだからかなり辛そう。

「お前らやめろよー」

「いやヴィータさん止めてくださいよ！」

「だってあいつら口で言って止まるか？」

「それでもですね——」

「参加もしないで逃げたヴィータちゃんは黙ってて！」

「これは私たちの勝負だから!!」

ぷつん、と隣から聞こえたのは気のせいだと思いたい。

なんでグラーフアイゼンを起動してるんですか。なぜバリアジャケットを展開するんですか。

「行くぞアイゼン！　ベルカの騎士を侮辱したんだっ、アイゼンの落ちない染みにしてやる！」

「えええっ!?!」

飛び込んでいったヴィータさん。

ああ…結界を外からぶち破って乱入しちゃった。ユーノさんが反動を受けて倒れた。

クロノさん…って何冷静に避難指示だしてるんですかつ。

「ここは強化素材で出来ているからそうそう壊れるはずはない。ということは先ずは避難が優先だろう？」

「災害レベルが暴れてるんだし」と付け加えるクロノさん。

…もつともですね。僕も手伝います。

「私にも戦わせろおおおおお!!」

シグナムさん乱入。もう驚きません。

会場は酷い乱戦状態です。

そこへ隣から通信音。クロノさんの個人端末のようです。

「すまない、呼び出しが入った。私は行かせて貰うよ」

「お疲れ様です」

非難の列の後に続くように会場を後にするクロノさん。

僕はため息をついて振り返った。

爆発音や金属音を立てて暴れまわる魔導師たち。

その横で安らかな表情で倒れてるユーノさんが哀れ過ぎます。

同じく横で傍観するように立っていたアズナブル三佐と目が合う。

そうすると三佐は僕のほうへ向かってきて、擦れ違った。

「ここの後始末は任せるよ」

「えっ？」

肩にぽんと手を置いて立ち去るアズナブル三佐。

飛び交う砲撃と、はじける光を見を尻目に悠々と去っていった。

「……………え」

居なくなっちゃったんですけど。

あれ、僕一人ですか？ いや姉さんはまだ目覚めてないでしょ。

三佐もクロノさんも居ないってここをどうやって収めるつもりですか。

「うわっ」

飛んできた魔力弾をすんでのところかわす。

「もう…やめてくださいよ……」

頭を抑えて呟く。

しかし、その声は飛び交う爆音に掻き消された。

S i d e     ? ? ?     ……もとい、シャア・アズナブル     もとい     智  
哉。

「やめろと言ったろ！     死にたいのか！？」

お前、そこでその名言使うのか？

明らかにハイマツトフルバースト規模の爆音と、暴れてたバカどもの悲鳴が外にまで響く。

…とりあえず、あの戦闘狂どもは暫らく減給処分か？ 基準は知らんが。

「智兄」

「お、お迎えご苦労さん」

「…なんかすごい音してるよ？」

「気にすんな。馬鹿の屍が増えるだけだ」

「そっ」

地面から出てきたセインの肩に手を乗せる。

ま、馬鹿ばかりだけどうちの家族はちゃんと育ってくれてるよう  
で何よりだ。

とりあえずは……あのバカドクターに文句言いに行くか。

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t.



**Situation 29 √C 若い発想力には勝てません（後書き）**

何はともあれ、これで終了。智哉さんは面倒なので自主退場。

あと2、3話くらい間に挟んでStS編ですかね。

……ホントに行くのかな。

OOフリーダム様、ディステイニープラン様、落雷様。感想感謝です。

「ほ、本気でやるの？」

「MS-002、アカツキ……出るぞ！」

「にゃあ~~~~~！」

次回、Situation 30 √C 暖簾に腕押し…暖簾を押してたらただの変人



**Situation 30** √C なんかも30もいったよ…

「はあ…はあ…はあ………」

「もうやめないか？」

「やめま…せん！」

フェイトがバルディッシュを振りぬいてくる。

ビームシールドで受けつつ、横っ腹にビームマシンガンを突きつけてトリガー。

フェイトはビームの雨あられを受けて吹き飛んでいく。

ここだけ聞くとかなり俺が優勢に聞こえるけど、実は俺もあっちこっち痛い。

肋骨がつつり折れてるし、目の奥ちかちかする。

ハーケンスラッシュの直撃喰らいました。装甲展開してなかったから劇的ダメージっす。

なんかもう今更装甲展開もなんだからそんまま戦闘突入。

「別にレリック持って行きたいだけなんだけど」

「それが犯罪だと言っているんです!」

この平行線。

なんだかなあ。

だってさ、落ちてるもんを拾って、「それは私のものだから渡しなさい」なんていわれて渡すか?

相手は警察組織なんだから渡したら最後、むこうが黒と言えば白でも黒。

……いや分かってていつてるけどさ。犯罪者は俺ですよありがとうございました。

「あんま女の子傷付けるのやなんだけど…」

「じゃあ大人しく捕まってください！」

「それなら警察もとい管理局はいらないだろ」

飛んでくるフォトンランサーをビームライフルで撃ち落とす。

同時にビームブーメランを投擲。

横向きに弧を描いてフェイトへと向かう。

「いったいつ、いくつ武器を所持してるんだ！」

「たくさん！　つと」

プロテクションに弾かれるのは目に見えてるから同時にクラッカーを…ぽい。

爆音と共に土煙が立ち上がり、お互いの姿を隠した。

そもそも、なんでこの状況なんだっけ。

えーと、例によってスカリエッティにレリックというロストロギア

を取ってこいと言われた。

まんまと待ち伏せされてた↓ジャミングで連絡が付かない。移動できない。

しゃあないからフェイトと戦うか。

…うん。こんなかんじ。

ぶっちゃけ舐めて掛かったからやられまくって痛いんだぜ。正直早く助けに来て欲しいんだぜ。

「バルディッシュ！」

フェイトはソニックムーブで俺の後ろに回りこむ。

動きは分かってるから攻撃を受け流して蹴り飛ばすことで距離を取る。

以上の様に俺は完全に時間稼ぎに入ってる。

最近、俺だけこんなんばかりであんまり戦いたくない。

他のところいつてるナンバーズは全然見つからないのに何で俺だけやたら見つかるんだよ。

…おいそこ、隠れるのが下手だと言った奴ちよつとこっちこい。  
お話だ。

「いい加減に…！」

フェイトが魔力を溜める。

これは…サンダースマッシャーかつ。

俺は横へ逃げるか、上へ逃げるかコンマゼロ数秒の間考えているとき。

足下から生えた手に脚がつかまれる。

土煙が消え去り、フェイトの眼前に映った姿は果てしなく続く荒野だけだった。

「いい仕事だ」

「もう…なんでいつも罫に嵌ってるの…これで何回目？」

「さあ？　とりあえず両手で数え切れないくらいには」

「……………はあ。むこうでクア姉が待ってるから」

「さっすが。クアットロはバカスカと違っていい仕事するなあ」

俺を助けてくれたセインがため息を付くのを横目に、遠目に見えるクアットロの下へ。

はあ……信長的に人生五十年とするなら俺ももう折り返し地点だぜ？

こんなんでいいのかなあと思っちゃう、そんな日々。



Situation 30  $\sqrt{C}$  なんか30もいったよ…

Side Yura. A

「これが…」

「うん。劣化版MSデバイス。ごめんね、全然時間掛かったよ」

「ううん。ありがとう」

やっこのことで完成した、M1シリーズ。

制作期間は六年。

一年だったはずの予定がどうしてこうなってしまったかと言うと。

まずはフレームの構成を解析しようか、というところでプロテクト。

やっと解析が終わった、製作へ。というところで、解析結果にダミーデータが。

ダミーデータ除去完了、今度こそ製作へ。それじゃあ肝心の超小型魔道炉をつくらなきゃ、とまたプロテクト。今度は三重。

じゃあ次を：プロテクト。プロテクト。ブラックボックス。プロテクト。

っていう風にやたらと暗号化とかプロテクトが激しくて時間が掛かっちゃったんだって。

その間に忍さんは恭也さんとの結婚とか、色々忙しくなっちゃって。さらに延期。

逆に私たちは順調に成長。

アリスさんとすずかさんは高校生。私は中学生。

キラは本当に大検として中学校にはあんまり来なくなっちゃった。

「これで、私たちも魔法を使える」

「理論はちゃんと覚えたもんね」

「二人とも頭良すぎなんだよ…」

ミッドチルダの魔法の教本を使って三人で理論を勉強したんだけど、二人の吸収力はすごい。

多分、魔導師じゃないのに先生になれるんじゃないかってくらいだ。

わ、私？ 私は普通だ！

「でも実践練習はやっぱり必要だよね」

「うん。だから、もう少し」

よしっ、頑張るぞ！

Side  
out.

**Situation 30** √C なんかも30もいったよ…（後書き）

うん。なんか書き方忘れた。

とりあえず、レリック回収の一コマと地球組の状況を。

やばい…作文能力がメルtdownしてる……。

ぶっちゃけテスト前であまり話考えてる余裕無かったり。

OOフリーダム様、ディスティニープラン様、落雷様、感想ありがとうございます。

<<OOフリーダム様

うーん、うちの魔王様は弱体化してるからなあ…。

でも折角チートなんだからそれくらいのチートは出したいなあと思っ  
てはいます。

「やめろおおおお！」

「ちょ、それ待て待て待て待て！」

「バカーーーーー！」

次回、藪を突付いて変質者が出る…ぎゃーーーーっ

新暦75年、三月。

はやてさんから呼び出され、陸士部隊の会議室で姉さんと共に待つ。

用件は聞いていないけど、大体予想は付いてる。

はやてさんたちは新しい部隊を作ろうとしているとの情報がある。

十中八九そのお誘いというのが有力だと思う。

「待たせたな」

「いえ、それほどでも」

「待ったよ」

「…………ルイスちゃんはそうやって齒に衣着せないな」

知らない人にやったら絶対怒られますよそれ。

社交辞令でも待ってないって言おうよ姉さん。

「それで、単刀直入に言わせて貰うわ」

「私たちを新設部隊に入れようってことでしょう？」

「……分かってるなら話は早いんや」

どうだ、と言わんばかりに視線を向けてくるはやてさん。

姉さんは少し考えているようだ。

僕のほうは、アリ…だと思ってる。

ネームバリューの大きな部署に居ることは僕にとってハイリスクだけど、リターンは大きい。

一つ、父さんを探す際の情報が入りやすい。



これは裏で動くとばれやすいっていうリスクもある。

二つ、MSデバイスを隠すことが出来る。

MSデバイスはブラックボックスが多いからなのはさんたちの影で目立ちにくくなる筈。

これも下手に活躍するとかえって目立つというデメリットが。

あとは勘。なんとなくこの集団にいたほうが父さんに逢えそうな気がするっただけ。

「そうね……協力してもいいよ」

「ホンマに!？」

「天下のエース様たちには実力が遠く及ばないけどね。それでも友達達の頼みだもの。キラはどうするの?」

「僕も協力したいと思います」

「ありがとう! よおしっ、これで戦力十倍や!」

どんな計算をしたんだろう。

とても二人増えて戦力が十倍って計算はなかなかにおかしいと思うんだけど。

それじゃあ、もう少し細かい話をしようか。

「やはり我々の敵となるべき新しい部隊が作られるようだよ」

そう言ってスカリエッティは一つの資料を俺に見せる。

それには間もなく機動六課として動き始める新部隊の構成メンバーが一覧されていた。

「ほお……」

「どれどれ？」

「この中じゃ誰がつよいっすかね！」

「ふん……」

群がるように俺の後ろにセインとウェンディ、ディエチ。

この中期ロットナンバーは起動から即俺の教育下に入ったからやら人間くさい。

つーかどっちかっていうと子供だな。好奇心旺盛な子供。

むしろルイスとかキラのほうが全然落ち着いてるよ……ってあいつらは規格外か。

なあ、俺……子育て……間違ったかな。

「な、何を絶望してるんだい？」

「嫁さんも居ないのに子育てに苦心する自分に」

「……それについてはこう、申し訳ない気もしなくも無いよ」

俺の後方で騒ぐセインたちでもなく、何処か遠くを見ながら男二人。  
なんかこれもこれで空しくなってくるから小隊リストを閲覧するこ  
とにする。

第一小隊…これはスターズかな。

第二小隊…ライトニング。

第三…第三小隊！？

は？ ロングアーチは…後方支援は別に分けてある。

もっと細かく読み進めれば、すぐに気付く。あ…いつらだ。

「キラ…お前か」

こいつらも何だかんだ育児放棄したような俺を未だに慕って探してくれてるんだよな。

……うん。せめてやると決めたことは終わらそう。

「私こいつもーらいつ」

「違う！ こいつは私が相手する！」

「じゃ私はこっちで」

「んだとお！？」

「ふっ、ならば私は彼女の相手をしよう」

「トーレの相手はこっちっす！」

……とりあえず、こっちのガキどもを黙らせよう。

「準備は出来た？」

「当然」

「忘れ物は無いよう」

M1シリーズは持った。着替えも持った。

すずかとアリサと一緒にキラの部屋に設置されている転送装置の前に立つ。

「それじゃあ、ここからは楽じゃないわよ？」

「別にここまでだって楽じゃなかったよ」

アリサとすずかはそれぞれの大学で、たった一年間で卒業に必要な単位のほぼ全部を取った。

あと一つか二つ、四年以内にちゃんと取れば卒業できる手筈。

わたしも今年中学校を卒業。二人に勉強を教えてもらいつつ頑張ろう。

「友達を助けるためだもん。少しくらい大変だって問題じゃないよ」

「ホント。あの三人はあれで頭足りてないところあるから私たちがカバーしなきゃね」

「わゝ、耳が痛いぞゝ」

恥ずかしながら私はいいい生徒じゃない。出来が良いとは言いがたいんだ。

兄弟なのにキラとは全然違う。アリサやすずかみたいな優秀さは無い。

それでも、やれることはやるんだ。絶対に諦めない。

「それじゃ」

「行こう」

「ミッドチルダへ！」

今、全ての力がミッドチルダに集結する。





はい。閑話終了。

え、早いつて。話が急だつて。

うん：知ってる。だって、あんまり細かくやると変なところでSt  
S編のネタバレだしそうだったし。

とにかく、次回からSTS編に入ります。

ディステイニープラン様、落雷様、感想ありがとうございます。

次回からも楽しんでいってもらえると嬉しいです。

次回予告：なしっ

もうマジでテスト前なんで暫らく更新なくても、ああ必死扱ってる  
んだなと見逃してください。

**Situation EX-03 キラのフラグ回収…え、マジで？（前書き）**

ヘタレさん。感想ありがとうございます。

作者の文才の無さ…っていうか実力不足描写不足でご指摘のところが曖昧でした。

と、いうことでその辺についての作者的考察を述べようか…と想了想んですが

なんかそれで短編一本書けそうだったんで書きちゃいました。

補足ついでに楽しんでいただけたら幸いです。

**Situation EX-03** キラのフラグ回収…え、マジで？

なのはがりハビリを終えて、ある日。

なのはは休日のキラの部屋を訪れていた。

「え、えと……」

「……………」

「…参ったなあ」

キラは後ろ頭を掻いて、目の前に座るなのはを見る。

突然何かを決意したかのような顔でやってきて、この部屋に招き入れて早十分。

言おうか言うまいかと表情をころころ変えるのはに対してキラは

どうしていいかわからなかった。

Situation EX-03 キラのフラグ回収…え、マジで？

「あ、あのっ」

「うん」

「お願いがあるの…」

それ以外に付き合いも多くない年下の男である自分のところに何をしに来るんだろう、とはキラは言わない。

わざわざ自分のところまで来るほどだから他の人には知られたくないんだろうな。と言うことにも気付いている。

「私、リハビリ終わったんだ…」

「うん。知ってるよ」

「それで……私、管理局に戻りたいの!!」

「……………はぁっ!？」

流石の発言に驚くキラ。

キラもそうだが、周りは皆これを機にやめると思っていた。

しかし戻りたいと言うなのは。

難色を示すが、キラはなのはの目を見て少し意見を変えた。

「長時間の運動は出来ないってわかってる？」

「うん」

「魔法を使っても戦えないよ？　つまり前線に出ることはできない」

「私、元々教導隊志望だからそっちだけでもいいんだ」

「む…」

決意は固い。

自分にはこの人を止める術がない、と悟ってしまうキラ。

「それで、何で僕に？」

「キラ君は私よりも全然頭いいし、魔法の技術も凄いから身体に負担の小さいプログラムを考えてもらいたいなあって」

「なのはさんが管理局に戻る協力をしろって？」

「おねがいしますっ」

頭を下げるなのは。

キラはどうしたものかと黙考する。

なのはの容態を知っているシャルは、性格上なのはに押し切られてしまうだろう。

管理局も強力な力を持つエースを手放さないために身体のこととは公表しない。

医師たちも管理局所属の者が殆どだったから上から指示されれば、止めはしない。

桃子や士郎などのなのはの家族も魔法技術は地球の数段先を行くた



め、なのはの様子からほぼ治ったと推測すると考える。

だいたい、なのは自身が詳しく教えるはずがない。シャルルに教えさせる筈もない。

ミッドの常識上なのはは社会人。他の医師たちは本人を通さずして管理外世界である地球の両親に連絡することはほぼ無い。

そこまで考えが至ったところでふと目の前のなのはに気付く。

黙り込んでしまったキラに対して不安を隠せない様子。

「……二つ、約束できる？」

「うん！」

「一つ、無茶をしないこと。絶対に他の誰かの援護が期待できないところで魔法を使わないこと」

「うん」

「二つ、魔法使用も時間制限を設けること。もしものの時の戦闘も一撃入れたら即時離脱を絶対に」

「うんっ」

気のいい返事。守る気は無いな、とキラは確信。

だったら強制的にリミッターをつけてやると腹の中で考えた。

「だったら協力してもいいよ」

「本当っ？」

「嘘はつかない」

「ありがとう!!」

「わっ!？」

抱きつかれるキラ。

飛び込んできたのはを受け止めつつ、顔を真っ赤にしてどうしたらいいか分からないと固まってしまふ。

なのはが離すまでの数秒間、キラは固まり続けたのであった。



なのはアホの子なのは仕様です。

リインフォース消滅イベントやってないので精神的に成長しきってません。

GN粒子の件については当然未完治。

といいますか原作でも完治はしていないと作者は考察しています。

原作では目に見える傷も無く、様子からして完治したように見えませんがブラスター使用後のダメージ率を考えると

リンカーコアや内部的にダメージは回復しきっていない、と考えてます。

また、この話でも述べたようなのは溜め込む性格上詳細は決して周りの人には教えませんし、ミッドではなのは成人どころか管理局のエース。

本人が望まなきゃ家族には詳しく伝えられません。

以上、独自解釈もりもりな考察でした。

ちなみに、このあとキラがなのはに渡した術式はレイジングハートに負荷を丸投げしてしまおうというもの。

そのためなかなか自分を省みようとしなないのはも、レイジングハートを壊さないように無理をしにくくなったとかならないとか。

今回のように『この設定ってどうなってるの?』『詳細を』『この点がおかしい』なんて意見をいただければ今回のように説明か小話にてどうにかします。

ただし、ネチケツトは守ってください。

一件、感想を頂いたのですが否定的な意見。  
否定的な意見があることは受け止められるのですが、その文章上マナーがなっていないなかったので、この小説を楽しんでくれている他の方にも悪いと思い、  
申し訳ないながら削除させていただきました。

作者本人は批判的意見も受け入れる所存です。  
感想等お待ちしております。

## V C Strikers Mission 01

それは始まりの事件。

新暦71年。ミッドチルダ臨海第八空港にて大火災が発生。

周辺部隊の魔導師の初動が送れ、事態は刻一刻と悪化していた。

燃え盛る炎の中、とぼとぼと歩く女の子が一人。

体中に擦り傷を作り暑さと歩き通しで疲れて体力を失っていく。

そして、体力と共に希望も……。

「誰か、助けてえ……」

躓き転んで涙を流す。

——みし。

石像が悲鳴を上げる。

根元に入った輝は大きく広がり、少女へ向かって石像が傾き始める。

「……………あ」

もう回避できない角度まで倒れこんだところで、やっと少女はその存在に気付く。

迫り来る脅威に呆然とするだけだった。

せめて、と身体を丸めて目をぎゅっと瞑る。

「……………?」

予想していたような痛みはやってこない。

恐る恐る目を開いてみた。

「よかった…間に合った…助けにきたよ」

石像を止める桃色の光の輪。

その隣には白色のバリアジャケットを着た、あの有名な高町なの  
が飛んでいた。

「もう大丈夫だからね……」

少女の周りを桃色の膜——結界が覆い、暑さが和らいだ。

「はぁ…はぁ…」

なののはの息が荒い。



バリアジャケットを着ているため、熱は殆ど通していない筈なのに顔に汗が伝う。

「だから……待てって言ったでしょう」

天井を抜こうと、デバイス愛機——レイジングハートを構えたところでその声が聞こえた。

「はあ……レイジングハート、デバイスモード強制終了、省エネモード」

<Limit mode.>

「えっ、レイジングハート？」

レイジングハートは待機状態に戻り、なのはさんは驚いたように愛機を見た。

僕は二人の元へ降りてゆく。

「キラくん!？」

「姉さんの言うとおりに追いかけてきて正解だったよ」

姉さんが空港内に飛び込んでいくのはさんを確認し、僕に追いかけるように念話してきた。

空港火災が発生したという報告を受け、こちらに飛んできて救助活動を開始した僕。

通信からなのはさんやフェイトさん、はやてさんと姉さんが来ているのを知った。

フェイトさんが空港内を飛び回って救助。はやてさんは氷結魔法での消火、姉さんは破碎鎮火を行っているらしかった。

そしてなのはさんはサーチャーを使用して空港内の一斉走査。

数十もサーチャーを展開して負荷が大きいはずなのに、長時間走査をやめなかった。

ついには飛び出して来てしまったみたいだ。

レイジングハートに頼んで僕の端末になのはさんの状態を送ってもらう。

……うん。疲労の蓄積。魔力消費。今日はここまでだね。

「なのはさん今日はもう魔法使用禁止」

「そんなこと言ってる場合じゃっ?!」

「救助の前になのはさんが危ないの。っと、それじゃあ君。捕まってもらえるかな」

なのはさんを抑えて隣の女の子に目の高さを合わせて言う。

ゆっくりしてられる状況じゃないけど、慌てて失敗したら元も子もないからね。

こくりと頷いた女の子を抱き上げて、もう一方の手でなのはさんを抱き寄せる。

「きっ、キラくん!?!」

「レイジングハート、アシストお願い」

天井の破壊も考えたけど、それで支えを崩して全部崩れてきたら危ないからやはり逐次落下物を破壊しながら脱出がいいかな。

浮き上がりながらドラグーンを展開。脱出コースを計算。……脱出開始。

ちなみに現在の僕はMSモードモビルスーツではなく、BJモードバリアジャケットを起動している。

本当はMSモードの方が強度も火力も高いんだけど、救助には向かなくて。

：だって知らない人が見たら怖いでしょう？ あれ。

BJモードは青を基調とした……えっと『パイロットスーツと言えば分かる』？ えっ、今の誰…？

あとはBJモードでのドラグーンの使用を可能にした。

これで随分と使い勝手が良くなったんだ。

閑話休題。

二人に負担が行かないようにしながら段々飛行速度を上げる。

途中崩れてくる壁などの建築材料をドラグーンで破壊しながら。

「さあ、到着だ」

崩落した隙間から飛び出せば、そこには満天の星空が広がっていた。

女の子——ギンガを抱いて、通路を飛ぶ。

妹さんもなのはとキラに救助されたみたいで、安心した。

：それにしても、なのはは後で少しお話するべきかな。

「—————!!」

突然崩落してくる天井を察知して高速機動で避ける。

碎けて飛んできた瓦礫はフォトンランサーで破壊。進行通路を確保した。

もうすぐ脱出、というところでまたも天井が崩れ落ちてきた。

「バルディ——」

横を通り過ぎる魔弾。

的確に私に向かってくる瓦礫だけを撃ち抜いて、消滅した。

振り向いても人の姿は無い。

とにかくギンガの安全を、とまずは脱出することにした。

その後も幾つか謎の痕跡を見つける。

結界：のような特殊な防壁で守られた要救助者たちや、明らかに危険箇所だけ破壊された後の崩落現場。

極めつけは、救助した人たちの言葉だった。

「仮面の人が助けてくれた」

「顔の上半分が仮面の人がやった」

「仮面の男の人が守ってくれた」



仮面の男。

恐らく、見当は付く。

ここに居る理由も、行動の理由も全く見えないけど……多分、あの  
人だ。

……この事件にも関係があるんだろうか。

その後、その仮面の男に出会うことはなかった。

S i d e  
o u t.

## √C Strikers Mission 01 (後書き)

本当はEX-03と同時に更新していたつもりの話です。

なんで正常更新されてなかったんだろう？

お陰である時書いた後書きの内容なんて覚えてません。

と、言うことで始めましたSTS編。

時間軸はちょっと戻って始まりの事件へ。

さして、どうなっていくのかなあ……。

デイスティニープラン様、落雷様、毎度感想ありがとうございます。

批判じゃなくて矛盾点とか話の流れの見落としとかの指摘は大歓迎なんですがね。

やっぱりマナーは大事です。守らなきゃダメ、絶対。

「つとに話をきけええええええ!!」

次回、Mission 02 テンプレも やはりまともに 終わらない

※定番となってきた諺似非予告。STS突入を機に変えてみようと模索中。案その一、5・7・5

## √C Strikers Mission 02

「うん。大丈夫。私はやれるっ」

そう言って少女――スバル・ナカジマは拳を握った。

今回の魔導師ランクB昇格試験。

信頼する相棒とともになら絶対に合格できる！

そう確信を持って試験に臨んだ。

M i s s i o n    0 2    暫らくは僕のターンらしいです

新人の二人が昇格試験に挑む。

それを眺める僕。

………なんで僕はここに……いや原因はすぐ隣なんだけど。

「ねえ、なんで僕が呼ばれたの？」

隣で楽しそうに新人——と言っても僕と同年——の動きを見るのは。

僕が話しかけたことに一瞬遅れて気付いたのかその微笑のベクトルを画面から僕へと替えた。

「ん？ どうしたの」

「…ホント、なんで僕がここに……」

「だって、ルイスちゃんが『連れて行きなさい』って」

「……………」

訂正。真の犯人は我が姉だったみたいです。

どっちにしたって実行犯はなのはだけど。まあ、何だかんだ居る僕も僕か。

僕が居るっていうのも意味不明度は高いんだけど…態々へりまで出して見に来てるフェイトさんとはやてさんはさらに謎。

試験官であるリインと教導官のなのはだけでもいいんじゃないのかなあ。

「…頑張るなあ」

モニターを見ながら呟いてしまった。

なのはが再度こちらに視線を向けてくる。

「ついこの前A Aランクを手抜きで一発合格して、三佐になった人の台詞じゃないと思うよ？」

「なのはだって空戦S+で教導官。前線には殆ど出ないのに一等空尉でしょう」

「にやはは……」

そう。僕はこの前A Aランクの昇格試験を受けた。

当然一発合格。そのついでにと何故か昇進させられた。

誰にどういう思惑があるのかわからないし、邪推も出来るけどもらせるものは貰っておこうと思う。

地位が上がれば知れることも増えるし。

最近ではわかったことも随分増えた。

一番大きいのは、父さんがある広域指名手配の人物と現状では同行しているらしいと言う情報。

なんでそういう状況になってるのは全く分からないけど、父さんなら大丈夫だろう。

同時に、最近では積極的に父さんを探そう！ といった感じもなくなってきた。

手に入る情報は貰うけど、あとは成り行きでいいかなって。

僕も普通なら高校に入って親離れを始める頃。それでも男だし、あまり親にべったりなのもね。

よく考えたら父さんなら生存確認だけ出来れば元気そうにやってるんだろうな、なんて。

まあ、出来れば成長した僕らを見て欲しいかな…くらいかな。今は。

軽く頭を振って思考を切り替える。

何故か無理矢理こじつけるみたいに決められた新しい役職上、彼女たちは僕の部下になる可能性もある。



どんな動きをするのか確認しておこう。

S  
i  
d  
e  
F  
a  
t  
e  
.  
T  
.  
H

「ああっ、なんやもう！ もうちょっと話をするとかないんか!？」

あ、こんにちは。フェイト・テストロッサ・ハラオウンです。

……誰に自己紹介してるの？ 私。

今はヘリの中で新人の昇格試験を見ている。

幾つかのモニターで、新人の様子や登録情報、残りタイムなどを並

行して確認する。

それと、昇格試験と別のモニター。

——そこには、なのはとキラが映っている。

はやてはそっちを見て声を上げていたんだ。

「……なんで二人を見てるの？」

「あれ？ フェイトちゃんには言っとらんかったか？」

「なにを？」

「あのな、私ら仕事ばかりで出会いなんてないやろ？」

「出会い……私、あるよ？」

「はっ!？」

はやてが驚いてこっちを見る。

出会いなんてたくさんあるのに。

「局に入ってから、シャーリーやエリオ、キャロに――」

「ちょ、ちょっと待ってな。…フェイトちゃん、『出会い』って何のことかわかるか？」

「だから人と会うことでしょ？」

「……フェイトちゃんは無垢なんやなあ」

はやてが遠い目をしてる。

私間違っていないよねっ？

「ま、フェイトちゃんが分からんでもええんや。私とルイスちゃん  
でキラ君となのはちゃんをくっ付けようとしてるだけやから」

「くっ付く？」

「……ああ、なんやろこの気持ち……私が穢れてるように思えてく  
るわ……」

はやてがつ、はやてが白くなっていくよ！

あっ、新人たちのモニターが消えた！

えとっ、あのっ、どうしよう!!

S i d e o u t .

あ、モニター消えた。

流れ弾でも当たったかな。

「様子、見に行こうか」

「うん」

「レイジングハート、お願いね」

<All right master.>

最近、MSデバイスに組み込んでる超小型魔導炉の構成を弄って、レイジングハートに組み込むことに成功した。

カートリッジシステムの入っていた場所に上手く組み込めるようにするのは大変だった。

あくまでも補助的意味合いだから出力はそんなに強くない。

それでも飛行魔法やバリアジャケットの展開くらいならなのはに負担をかけずに出来ている。

…高速機動とか耐被弾とかになると結局負担は掛かるんだろうけど。結局は戦闘は可能な限り控えてってこと。

それでもこの人は聞かないんだろうなあ。

「セットアップ」

「セットアップ！」

それにしてもあの二人、怪我とかしてなきやいいんだけど。

## √C Strikers Mission 02 (後書き)

テストがヤバイ…！ 今年で人生終わるかもっ。

と、言うことで更新が遅れました。

絶賛大ピンチです。小説なんて書いてる余裕無いです♪

次の更新は早くても土日になりそうなんだZE☆

なんとなく陰謀っぽいはやとルイス。と、天然すぎるフェイト。

フェイトは天然でいいと思うんだ。可愛いでしょ？

ディステイニープラン様、感想ありがとうございます。

「ねえ、これどういう状況？」

次回、Mission 03 若さ 再試 シナリオはゆっくり進んでいきます

※案その2 一人しりと。あ、これいいかも



## √C Strikers Mission 03

「どう？ ツヴァイ」

「あ、キラ〜。あの子達は順調にクリアしてますよ〜」

小さな…実際手乗りサイズくらいかな。この子はツヴァイ。正式名称リインフォースツヴァイ。

はやてさんのサポート役の融合機。

これも色々と父さんが関係してたらしいけど、はやてさんのデバイスとは問題があったらしい。

その融合機であつたのがリインフォースさんだとか。

でもデバイスを直す際にリインフォースさんの融合機能がなくなつてしまい、はやてさん個人だと制御が甘くなるため製作された。

って聞いた。確かにはやてさんは魔法行使が荒っぽい。広域魔法で荒っぽいのか正直怖い。主に範囲指定が甘いときとかね。

本当ははやてさんは現状でも満足、とか言ってただけで周りの被害とか色々考えてリインフォースさんがこっそり作っただけらしい。

ありがとうございますリインフォースさん。正直はやてさんと組んで仕事するときは気が気じゃありませんでした。

流れ弾が当たること十数回。広域魔法が掠ること数回。それがツヴァイが出来てからほぼゼロです。

あ、はやてさんがへりに居てツヴァイがここにいてことは…他の仕事はリインさんがやってるのか。

…あとで差し入れでも持っていたほうがいいかなあ。

その話は頭の隅に置きながら、モニターから見えなかった彼女たちのようにすを見る。

あれ、なんか暴走してるみたいになんか見えないんだけど……。

「止めた方がいいのかな？」

「危ないですよー！」

「じゃあ私が――」

「だから極力使わないでくださいって。僕がやりますから…」

ホールディングネットを張れば大丈夫だろう。

術式を組んでゴールに向かって爆走する彼女たちの前へ。

そこで僕の個人端末に連絡が。

メールのようなのでさっさと確認する。

「呼び出しにかかったからちょっと行ってくるね」

「あ、はいです」

「任務？」

「ちょっと違うかな。じゃ、ツヴァイ。なのはに出来るだけ魔法を使わせないようにね」

「了解ですっ」

「ちょ、なんでツヴァイにいうの……っ?」

その声を後ろに僕は訓練スペースからの離脱を始めるのだった。

M  
i  
s  
s  
i  
o  
n  
  
0  
3  
  
僕だって仕事してるんですから

「悪かったな」

「いえ、折角のデートのお誘いですから」

「…不謹慎だぞ」

「冗談です」

僕に送られてきたメールの内容はシグナムさんによる呼び出し。

簡素な内容でこの座標と呼び出すことのみだった。

「それで詳細は」

「何かに追われているような不審な男を発見したのでな。後を追ってみたが慌ててこの施設の中に飛び込んだ」

「…なんで僕を？」

「ヴィータたちは別任務中。ここは陸の管轄だ。高町と主は前線に

は出れんしテストロッサは呼び出すと後で面倒だ。

その分、ヤマトなら何とかなる」

「……まあ、いいですけど。突入します？」

当然、といわんばかりにシグナムさんはバリアジャケットを展開した。

僕もB Jモードでビームライフルだけ展開する。

施設内の魔力反応を探る。

魔力反応は1：一人か——消えた！？

シグナムさんも驚いたのか僕と顔をあわせる。

視線だけで会話を交わして施設のドアを蹴り開けた。

そこで見たのは、五機ほどのガジェットドローンと呼ばれる小判型の機械と、血の海に倒れ付す男。

そして——

「管理局か」

仮面をつけた、何処かで見たことがある男だった。

「貴様、何者だ」

「そんな物騒なものを突きつけなくてももらえるかね。恐怖で竦みあがりそうだよ」

「これをやったのは貴様か」

「否定はしない。直接手を下したわけじゃないが」

思い出せ、思い出せ。

この男は……

「……アズナブル、三佐」

「ほう、たった一度だけの出会いだったが覚えていたのか」

「そんなことはどうでもいいだろう。質問に答えないのなら、殺人容疑で逮捕する」

「証拠も無いのに捕まえられては敵わんよ」

「状況証拠だけなら十分だ」

シグナムさんがレヴァンティンを構える。

僕もビームライフルの照準をアズナブル三佐にあわせた。

やれやれと肩を竦めたアズナブル三佐が動くのは速かった。

「行け」

そういうと同時にアズナブル三佐は後方の窓ガラスを突き破って外へと飛び出て行く。

僕たちも追おうとするけど、ガジェットが邪魔をする。

僕やシグナムさんの実力からすればこのガジェットくらいなら一機一撃で倒せる。それでも時間稼ぎにはなる。



五機のガジェットを倒したときには、既にアズナブル三佐は近くに居なかった。

その後の調べで、倒れていた男は即死していて、しかも指名手配中の違法研究者だったことが分かった。

それと……管理局のデータベースに『シャア・アズナブル』という人物は存在しなかった。

## √C Strikers Mission 03 (後書き)

うおっ、クオリティ低っ!?

勉強モードの脳みそでまともなシナリオが考え付かなかった…。

試験期間で更新が遅れました。まだあと三日あるので頑張ります。

ホント、クオリティの低さにびっくりだけど。もしかしたらテスト終わった後にがつり改訂するかも。

ディステイニープラン様、いずむ様、サテライト様、ディオンの様、感想ありがとうございます。

いずむ様、そこらへんは個人の酌量です。そんな主張されてもどうにもなりません。

サテライト様、ご尤もな指摘です。人数が増えるとそれぞれの描写が吹っ飛んでいく傾向ががが。

STS編はゆっくり進めてそういうところもしっかり補完していきたいと思います。

ディオンの様、確かに偏ってます。まあ、作者の年齢上やっぱり最近のに偏りやすいです。

それでも、なるべく宇宙世紀時代の機体とネタを智哉には使わせていきたいです。

キラメインのところはやっぱり種ネタに走りますけど。

ふおお。更新してないのに感想が増えていくとは…。

なんか申し訳なくありますね。とりあえずテスト終わらせて、ちゃっ  
っちゃか書きます。あと文章力上がるように頑張ります。

「きつ、キラ・ヤマト三等空佐ですか!？」

次回、Mission 03 部隊↓一緒↓書類じゃその人のこと  
全部はわからないよ

だめだ、発想力が枯れてる…

## √C Strikers Mission 04

「うわゝ、やっちゃった…」

目が覚めて時計を見れば、普段なら出発している時間の一時間後。  
この頃には隊舎も目前に見えていて、残り数分で到着と言う頃だ。

うん、つまり何がいいたいかというところ、『寝坊した』。

M i s s i o n 04 機動六課、始動

「…おはようございまーす……」

そろりそろりと進入。

ばれなきやオツケー。うん。バレなきやオツケー。

さも当たり前かのように業務について……

「バレとるで？　ルイスちゃん」

「……………あちゃー」

ばれてました。

部隊長室に呼ばれてお説教タイムです。

「あんなあルイスちゃん。確かにルイスちゃんはライトニング部隊の隊長補佐で、今日はフェイトちゃんも居る。」

でも部隊稼動翌日に遅刻はどうかと思うんやけど？」

「えと、ごめんなさい…？」

そう、私の役職はライトニング部隊部隊長補佐。要は執務間職務もあって忙しいフェイトちゃんの補佐役。

フェイトちゃんが外さなきゃいけないときはシグナムさんと小隊を引き受けることになる。

「なんで疑問系なんや〜〜!」

「そこに正座するです〜〜!」

「ええーっ!?!」

部隊長室に、床に正座する小隊長補佐官とお説教する上官と小人、黙々と事務をこなすリインフォースさんという図が出来上がった。

……っっていうかなんでツヴァイにまで怒られてるの？

数時間にも感じられた三十分ほどのお説教タイムが終了し、事務室へ。

今日はフェイトちゃんもいるから教導で私が出ることも無い、となればあとはやることといったら事務仕事くらい。

でも事務仕事は苦手なんだよね。そういうことはキラにお任せ。……戦闘もキラのほうが上だけど。

「おはよう、姉さん」

「……それは寝坊した私への当て付けなの？」

「やだなあ。そんなことないよ」

困ったように笑うキラ。

ただその手は超高速でキーを叩いていてどうかすれば指の残像が見えそうだから怖い。

「ねえキラ。今日の予定は？」

「ん？ 今日……そうだね、午前中は事務で午後からは新人教導のお手伝いかなあ」



あゝ、そうか。なのはちゃんの代わりに実技指導するんだ。

緊急時くらいは見逃してあげるから普段くらい身体に負担かけるんじゃないってね。

もはや周りの人たちにはキラはなのはちゃんのストッパーとして認識されてるよね。

とりあえずキラを間に挟めばなのはちゃんは無茶をしない。まあ事実だけど。

あとその所為かキラの認知度が凄いことについての間になってた。

大怪我から復帰し、次元世界中に知れ渡っているといっても良いかもしれない『不屈のエースオブエース』高町なのは。

そのなのはちゃんを止める役であり、自分も行動しながら補佐を欠かさないことから『不屈の翼』や『魔王の翼』なんて呼ばれてる。

そういえば…なのはちゃんとキラが一緒に行動するようになった理由って何なんだろう……。

私はそんな疑問を一先ず置いて、目の前の仕事を片付けることにした。

S  
i  
d  
e  
  
e  
n  
d.

訓練場でなのはの隣に立ち、新人たちと向かい合う。

昨日は開設式の直後に別件で仕事に行ったから今日が初顔合わせになる。

「スターズ分隊長補佐、キラ・ヤマトです。よろしく」

「スターズ03、スバル・ナカジマです」

「同じくスターズ04、ティアナ・ランスターです」

「ライティング03、エリオ・モンディアルです」

「ライティング04、キャロ・ル・ルシエと召喚竜フリードリヒです」

「とは言っても僕はスバルと同一年だし、エリオとはこの部隊で数少ない男同士だから気軽にしてね」

そう言ったけど何故か四人ともカチカチになってる。

どうしたものかなって苦笑いをしつつ、周りを見てフェイトさんが居ないことに気付いた。

「フェイトさんは？」

「執務官のお仕事。どっちみちまだみんな分けて訓練する状態じゃないしね」

「了解」

さて、じゃあやることといえは……。

「鬼ごっこでもやろうか」

「鬼…」

「ごっこ？」

「あれ、鬼ごっこ知らない？」

新人フオワード四人はきよとした顔をする。

あれ…ミッドに鬼ごっこってなかったっけ。

おずおずと手を上げるティアナを指名した。

「鬼ごっこって、あの鬼ごっこですか？」

「たぶんそれ。鬼に追いかけるやつ。ただしティアナたちが鬼。僕一人が逃げる」

「それだけ…ですか？」

「デバイスの使用は禁止。あとはなんでもあり」

「まずは身体作りだからね。ただ走るだけだと飽きちゃうからちよ  
うどいいかも」

「と、教導官のお墨付きも貰ったので早速始めようか」

なのはが僕たちから離れたのを見て開始の声を掛ける。

同時に後ろの方へ向かって全力疾走。

「って速あ!？」

そんな声を置き去りに走り去る。

設定フィールドは市街地、何処にでも隠れる場所はある。

何時間掛かるかな…と割と楽しみながら逃げ回るのがあった。

## **√C Strikers Mission 04 (後書き)**

はい。試験終わりました。第四話をお送りします。

わーい、全然筆が進まないやつ。話が思い付かーん！

という感じで機動六課の日常的な部分をお届け。

いずむ様、デイスティニープラン様、感想感謝です。

次からいつもどおり更新できる：つもりです。

「えっと…まだ僕のターンなんですか？」

次回、実戦訓練。

※あえて普通のタイトル。

## √C Strikers Mission 05

「はい、今日はここまで」

「」「はいっ!」「」

四人仲良く返事。いや仲が良いから声が揃ってるわけじゃないのは分かってるけどね。

そしてなのははにっこりとこちらに視線を寄越す。

「ここからは、交代ね?」

「と、いうことは…」

「一撃当てたら今日の訓練は終わりだよ」

なのはの死刑宣告とも呼べるその一言。

フォワード組は今度は仲良く揃って絶望的な表情をした。

「それじゃ、始めようか」

僕はビームサーベルを抜いた。



日の当たらないラボ。

人間日光に当たらないと体内時計やらなにやら全部おかしくなるから二日に一回くらいは外に顔出して日光に当たる。

「あゝゝゝ」と意味の無い発音をしながら身体を伸ばす。

身体を動かす機会が無いわけじゃないし、むしろ次から次へと子供ナンバーズが群がってきて休む暇の方が無い。

それでも朝日の下じゃ身体を伸ばしたくなる。これはもう人間の本能なんじゃないか？

そんな無駄な思考を意識しつつ、俺を追う様に出てきた奴に背中越しに声を掛ける。

「スカリエッティがおかしくなるのは日に当たらない所為じゃないかとしばしば思うんだが」

「それは言いすぎですよ、主」

ゆったりとした動きで俺の横に並んだこいつが誰か、もうお分かりいただけただろうか。

いつだったか……ああ、三ヶ月くらい前だったかな。

こいつは俺の居場所を探し当てて、追いかけてきたんだ。

まあ、その話はまた今度でもいいだろ。とりあえずは――――

「だからそのメイド服を脱げ」

「あ、主…こんなところで？」

「やめろお前もうっ。なんかそういう趣味だって色々勘違いされ始めてんだぞ!？」

「どうやらこいつ——ティファも俺を探す道中結構大変だったようだなかなか強かになってる。」

「…どころか、随分イイ性格になってる気がする。」

「冗談です。あ、ウーノが探してましたよ」

「了解。どうせスカリエッティを止めるのを手伝え、とかだろ？」  
あのバカ

「どうでしょう」

「十分にも満たない光合せ…日光浴を終えてラボの中へ。」

「閉鎖された場所だからといってジメツとしてるわけでもなく、むしろ快適に設定された通路を歩く。」

「アイツは…こっちか。」

「さて、「止めろ」ということは目処が立ってたってことだろうな…。」

「おーい、バカリエッティ」

「おおっ、浪川君！ 丁度呼ぼうと思っていたところなんだ！ 見  
てくれこの光景を！ 圧巻だろう！！」

「お」

「こんなにも心躍ることはなかなか無いよっ。いや久しぶりに楽し  
かった……」

「あ、主…その方法は大丈夫なんですか…？」

「お互いに慣れてるから気にすんな」

高笑いする首筋に一撃かまして気絶させたスカリエッティを待機し  
てたトーレに渡す。

トーレは無言で一礼してスカリエッティを寝室に運んでいった。

苦笑いしながらウーノが出てくる。

「ありがとうございます。ドクターは今日で5徹目でしたので…そ  
ろそろお休みいただきたかったところですよ」

「あれだけ楽しそうに物作ってるところ止められないわな」

「はい」

そうしてウーノも一礼して立ち去る。

これでここにいるのは俺とティファだけ。

そして……目の前に立つ、数え切れないほどの――――ザク。

サイズはちよつと小さめな人間くらい。カラーリングはどちらかと  
言えばガジェットのままだ。

スカリエッティは以前俺がネタで作った小型のザクプラモにインス  
プレーションを刺激されたのか、

製造済みだったガジェットを作り変えやがった。

しかも俺の作ったなんちゃってザクじゃなくて、もっと完成度の高  
いもの。

基本外形は俺が作った奴と遜色ないが、中身は全然違う。

こちらで操作しなくてもある程度の判断が出来る簡素なAIを積ん  
でるし、各パーツの動作ももっとスムーズだ。

動力源もちゃんとガジェットのものを使ってるし、武装も実弾。

うん、すごいなこりゃ。

「MSデバイス完成させたキラといい、ザク作っちゃったスカといい。みんなすごいなー」

「どちらも主が元を作ったものでしょう」

それでもどっちも俺が作ったものは当然実践なんかじゃ匍にすらならない品だった。

それをちゃんとしたものに作り変えた二人に感服だ。

がやがやと騒ぎ声が聞こえてくる。

ナンバーズたちが朝飯を求めて食堂に集まったんだろう。

この騒ぎ声の九割を占めている後期ロットナンバーたちを宥めるため、肩を落としながら食堂に向かった。

## √C Strikers Mission 05 (後書き)

こっそりと、本当にこっそりと。

べ、別に言われたから出したわけじゃないんだよっ？ 元々その予定だったんだよ！？

サテライト様、いずむ様、ディステイニープラン様、感想感謝です。  
ちなみにキラ君はサブ主人公なノリです。

なぜかちやっかり合流してたティファ。

ちやっかりです。探しにきちゃいました。ティファさん最強っす。

テスト終わったのに、レポートに終われ、もう眠いので寝ます。

寝かせてください……！！

「さて、どれだけ強くなったかな」

次回、桃栗三年、柿八年…も待たなくても、スーパー行けばいつでも食える。

※久しぶりの諺ネタ。



## √C Strikers Mission 06

さて、これからフォワード初出動イベント…もといリニア強襲作戦。  
とりあえずは…

「お前初出動の子供<sup>ガキ</sup>どもにどれだけ戦力当てるつもりだ」

「アダッ」

拳骨一閃。

振りぬかずに当てて止めることで衝撃倍増。

ちゃんと真上から面で押さえつけるように殴りましたと。

「さ、流石に今のは痛いよ…智哉君」

「お前ドンだけ鬼畜なんだよ。なんでガジェット十機のところがザク十機になってんだよ」

「性能チェックも兼ねてやってみようかと思って——ふべっ」

「アホか」

もう一発。

とりあえず殴って吹っ飛んだ感覚からして四徹目。ハイになって判断おかしくなったか？

……殴ってこいつの徹夜日数分かるようになったのってどうよ。

「……ありがとうございます、智哉様。正直私もどうかと思ってました」

「じゃ、ザクは四機。あとは適当にガジェットにしておいて」

「了解しました」

「終わったらでいいと思うけどスカリエッティ寝かせておけよ。流石に床は可哀想だ」

「はい」

ウーノがやるなら安心できるから俺は俺で準備をする。

こっちの予測では原作のなのはのポジションでキラが動く。

なのはは出てきても後方か指示くらい。

問題はルイスだな。

あいつはどんなポジションにつくのか。

「いやどっちにしても余裕で蹴散らすんだが」

「主、独り言ですか？」

「……………歳なのか？　それとも歳なのか？」

俺も27だしなあ……………もう立派なオッサンだよな……………。

ああ…何やってんだろ…俺。

正直な話さ…27にして定職も持たずに中二病張りに「司法組織をぶっ壊す！」なんて……………はあ。

ため息が止まらない。

手の中に各ビームライフルを出したり仕舞ったりしながら、どうでもいいIfを想像してみる。

普通に大学出て、普通に就職して、リーマンやって…ちょっと早けりゃ結婚して。

可愛い奥さんと平和に生きて…まあ、夢だね。夢。

少なくとも今やってるのが現実。

とりあえずもう一度ため息ついとくか。

Mission 06 人間段々面倒になると無計画になる。

「あー、マイクテス。マイクテス。聞こえるか？」

<感度良好。目標は見えるかい？>

「まだ見えね——じゃなくてお前もう起きたのか」

<三十分ほど仮眠を取らせてもらった。君が出るのに私が何もしいわけにはいかないじゃないか>

「微妙に義理堅いよな。お前」

ため息を付きつつ、換装。

とりあえず新人仕様の――ジムIIで行こうか。

S  
i  
d  
e  
  
T  
i  
a  
n  
a  
.  
  
L

何とか新型のガジェットも撃破して、レリックを確保。

おちびさんたちもどうにかミッション完了した様。

「終わったねーティア」

「スバル、油断しないで。何が来るのかわかんないのよ?」

「でも多分増援はこれないと思うけどなあ…」

スバルが見るのは、リニアの外——空で戦う二人の魔導師。

こうやって見るだけで私たちとの圧倒的な実力の差が伺えるその光景。

スバルなら少しは見えるんだろうけど、私には全く捉えられない高速機動を繰り返し、

さらには射撃、砲撃もこなすオールレンジな執務官、フェイト隊長。へりから出た直後、バリアジャケットではなく、まさに装甲と呼べるような装備を展開。

圧倒的な火力で敵を薙ぎ払うキラ隊長補佐。

スバルみたいに「ほえ〜」なんて間抜けな声は漏らさないけど、流石の私も見惚れるような情景だった。

——その所為で、反応が遅れたのかもしれない。いや、そうじゃないなくても気付かなかったかもしれないけど。

「新人風情が、余裕だな？」

「っ!!!？」

「——!!」

不意に後ろからかけられた声に、私は振り向きざまにデバイスを向けた。

スバルもすばやく構えを取っている。

キラ隊長補佐のような装甲。でも、全く違う迫力。

外見の装備は簡素に見えるのに、それでも圧倒的な実力差をひしひしと感じ取った。



——この人には勝てない！

そう感じ取った私はすぐに思考を動かす。

リイン曹長——こちらに動けばリニアの操作が利かなくなる。

ちびっこ——論外。私たちとそう差の無いあの子達を呼んでも意味は無い。

キラ隊長補佐とフェイト隊長——あそこからじゃ間に合わない。

部隊長に連絡——何処にそんな余裕が？

真っ向から攻撃——ありえない。戦うという選択肢は無い！

逃げる——一体何処へ？

「ああ、安心するといい。行き成りボス戦なんてありえない。まずは中ボスが必要だろう？」

そういう男——恐らく——が腕を上げると降下してくる影。

男ともキラ隊長補佐とも違う一つ目の装甲が二機落下してきた。

カラーリングはガジェットに似てる気がするけど、形状は全く違って人型。

その着地の動作も腰の銃を抜く動作も凄く滑らかだ。

「せいぜいがんばってくれ」

「スバル!!」

「うんっ」

男がジャンプして天井の穴から姿を消すと同時、その人型の装甲が襲ってくる。

私とスバルはデバイスを構えて迎え撃つ準備をした。

## √C Strikers Mission 06 (後書き)

あら、なんか時間が経ってた……。

ワールドカップを見て寝ちゃったり、土日になんか更新しよう!!

なんて思ってたらハードディスクが一杯なのに気付いて整理に費やしてしまったりしました。

落雷様、いずむ様、デイスティニープラン様、感想有難うございます。

なんか更新遅くなってすみません。

次回は…早ければ良いなあ。

「イッツショータイム!!」

次回、弱い犬ほど…否、強くてもバカな犬ほど良く吼える。

※やっぱり諺が一番しっくりくるね。

※更新が遅れてるのに、Angel Beats!の最終回見てアフターストーリー書きそうになったのは内緒だよ!?

## √C Strikers Mission 07

Side Caro. R

「あのっ、お話を聞いてください!!」

攻撃を仕掛けてくる碧色の装甲のようなものを着た人に声を掛け続けるけど、返事は無い。

さっきの白い方の方は私たちと話していたし、ヤマト隊長補佐みたいな身近な例もあるからこの二人もお話は出来るはず。

やっぱり敵対してるからお話はしてもらえないんでしょうか？

「フリード！ ブラストレイ！」

「はあああああ!!」

エリオ君が切り上げて、フリードが火球を吐き出す。

エリオ君の攻撃は斧のような武器で弾かれ、火球は肩に付いた楯で打ち消されていく。

逆に、構えた銃から無数の弾丸が放たれてきます。

「どうしたらいいの!?!」

「魔力が…!」

「エリオ君!」

もう…、ダメ……。

フリードも疲れてきてるみたい、エリオ君も、私ももう魔力が無くなっちゃう。

「ぎゃあっ」

「キャロ!？」

バリアが簡単に破壊されて、振り下ろされる斧。

それを止めてくれたのは――

「大丈夫っ!？ キャロ！」

「フェイト…さん」

フェイトさんは至近距離でフォトンランサーを放ち、装甲の人を弾き返します。

「キャロ、エリオ、下がって」

「はい」

「わかりました」

今の私たちは足手まとい。

だから大人しく下がることにします。

フェイトさん、気をつけてください。

『フェイトさん、こいつら生体反応はない。ただの機械兵だよ』

「わかった。ありがと、キラ。それなら遠慮なくやれる！」

その後の光景は、私たちが苦戦していた相手を圧倒するフェイトさんの姿でした。



M i s s i o n   0 7   物事が予想の上を行ったときは驚くけど、  
下を行ったときはなんか気が抜ける

むう、意外と新人組は大したことは無いな。

初出動でガジェットをやった後にザクとやれっというのが無理なのか？

結局フェイトとキラに助けられてるし。

今回連れてきた奴は初期型の雑っ魚い奴だから流石にあの二人なら瞬殺されるんじゃないかな。

「スカリエッティ。俺らの計算って間違ってたのか？」

『どうだろうね。思ったよりもガジェットたちがいい動きをしたからそこはわからないよ』

「なんだかなあ…」

またため息が出た。

なんか癖になってるな。気をつけよ。

「お？」

「時空管理局機動六課一等空尉、高町なのはです。関係者ですね。拘束します」

「いえいえ、通りすぎりですよ」

「抵抗しなければ弁護の余地があります」

「普通は抵抗するだろ」

「後ろめたいことが無ければ必要は無いと思います」

「追われたら何となく逃げるじゃん？」

「…逮捕します」

わーい。なんか出てきたよ。

なんだかなあ……あ、またため息出た。

こいつ、俺のこと捕まえられると思ってんのかね？

レイジングハートを構えた高町なのはに対して、ビームサーベルを抜く。

瞬間、足下からの射撃！

即座に回避行動を取る。攻撃を視認、三本の射線。全ての回避は無理と判断。

二本を回避して一本は技と掠らせる。

「まさか、避けられるなんてね」

「いやいや、十分びっくりだから」

良く見てみれば、随分下——地上からこちらにデバイスを向けるルイスの姿が。

目測で100m越えの距離をここまで正確に撃ち抜く實力からして、実質上の二対一。

手負いのエースと地上の射手とはいえ地味にジムじゃやりづらい。

元々ザクをあっさり倒した新人とやるつもりでのチョイスだからな。

隊長格なんて想定外。

だからといって目の前で換装するなんて情報はやりたくない。

戦うにしても地上のルイスには手を出せない。こっちの攻撃届かないし。

ジムスナイパーとかだったらまた話は違ったかもしれないけど。

……よし、行動を決定。

『スカリエッティ、記録は取っとけよ。あと適当に次元転移するか拾ってくれ』

『了解だ。少し時間を貰うことになるがいいかい？』

『オーケーオーケー』

と、いうことで転移の準備開始。

時間稼ぎに適当になのはでも撃ちますか。

「ほらほら。当たったら一撃だぞ」

「くっ」

残り三秒、二秒…一秒…転移開始。

ぷらぷらと手を振ってお別れの挨拶をば。

「それじゃ」

「あつ、待て!!」

結果としては俺たちの敗北だ。

まあ、ある意味予定通りッちゃあ予定通りだな。

## √C Strikers Mission 07 (後書き)

これにて終了。相変わらず戦わない主人公。

戦わないチートに意味はあるのかと思ってしまふ今日この頃。

微妙に勘違いしちゃったキャラが可愛い件。

ディスティニープラン様、いずむ様、落雷様、WSS様、感想感謝です。

<<WSS様。

出来れば出したいな〜とは思ってます。なかなか難しいですが。

次の話は智哉サイドではのぼのバカ話な予感。

「ふにゃ〜〜〜〜」

「おいバカリエッティ!! お前なに作った!?!」

次回、目からウロコ：ボロス。

・追記。

空佐↓空尉。

サテライト様報告ありがとうございます。素で間違えて入力してたです。自分の設定メモにも空尉だったです！



## √C Strikers Mission 08

さて、ファーストミッションが終わり、次へ向けて準備をする今日この頃。

いつかやって失敗した情操教育について今日はお話しようと思う。

え？ 前にちゃんとするようになったって言ったろうって？

……人間ってさ、慣れる生き物なんだよ。

一部に居たっては羞恥心も一週回ってどうでもよくなってる奴とかいるんだよ。

ティファが来たときくらいは一時期雰囲気引き締まった感じだったんだけどなあ…。

予定にあった全てのナンバーズがロールアウトしてから一年。

つい先日。それも片手で数えられる日数圏内で発生した事件（？）を元に彼女らの反応を報告しようかと思う。

M i s s o n      0 8      本気で恥じらいってもんを覚えろお前ら  
たーんず

引きこもってだけいるわけにも行かないし、いくら戦闘できる程度  
の身体能力が維持されるからって

感覚や瞬時の判断能力までその限りであるわけじゃない。

そのため今日も今日とて身体を動かす。

身体を動かせば当然汗をかく。

汗をかいたらどうするか。……当然、汗を流しに風呂へ向かうだろう。

そう、実に分かりやすい状況ではあるが、風呂場でぼったりといったシチュエーションのものだ。

「ああ……………」

意味も無く漏れる声。

適当に暖まったところで、さあ出ようかという時。

「なんで皆で？」

「たまにはいいじゃないッスか」

扉の向こうから聞こえる声。

無常にも開かれる扉。

真っ裸の俺。

身体にバスタオルを巻いたり巻かなかったりの女性陣。目測…十二名。

交差する視線。空間を支配する沈黙。そして――――

この後の反応はそれぞれ別に見ていこうか。

C a s e 1 正常な反応。

「きゃあっ!?!」

「な、なんで!?!」

「あわわわわわわ」

巻いていたタオルを抑えるようにティファ。

きよろきよろと隠れる場所を探して何故かウーノの後ろに隠れるチンク。

あたふたする前にまず隠せディエチ。

以上。十二人（ナンバーズドゥーエ+ティファ）のなかでまともな反応は半分もいただけなかった。

## C a s e 2 謎の反応。

「あら」

「……………」

バスタオル巻いてる所為なのか何なのか知りませんがその余裕の意味が分かりませんウーノ。

なんで真っ裸の自分の身体じゃなくてトーレの身体を隠すんだセツテ。

これはどう判断していいのかわかりません。

ウーノの余裕は根拠が分からんし、セツテに居たっては羞恥心が無いのか羞恥心を愛が超えたのか。

Case 3 理不尽&おい、な反応

「アンタ……！」

「あ…」

「む……」

お前らが後から入ってきたのに何故拳を握るんだノーヴェ。

そしてお前らは俺の股間をガン見するなオットー、デイド。

確かにここは男っ気少ないし見たこと無いのも分かるけど本能的に

察しろよ。

あとノーヴェの理不尽さは酷すぎね？

C a s e 4 最も問題。羞恥心皆無

「やっほ」

「なんだ、居たのか」

「あ、智兄」

「お兄様じゃないですか♪」

ひらひらと手を振るウエンディ。タオルで隠せ。

隠す気も無く仁王立ちかトーレ。

嬉しそうにこっち来るなセイン。

むしろお前は何でタオルを外すんだクアットロ。

こいつらはホントダメだ。救いようが無い。

しかもほぼ初期メンバーなのが救えない。どーにもならない。

以上、全メンバーの反応でした。

とりあえず呆然とした後でまずは一部からの視線が降り注ぐ股間を隠すことにする。

そして一つ深呼吸。

まずは頭の中をK O O O O O O O Lにして状況を整理、言いたいことを纏めて、結局は一言に集約する。

「お前ら恥を知れてか俺が入ってるの普通分かるだろ!!!!?」



後日談。

ラボ内のとある一室。スカリエッティと男だけの座談会。

「お前あれどうにかしろよ」

「どうにかもなにも、羨ましい限りじゃないか。男としては満更でも無いんだろう？」

「まあ…可愛い女の子の身体が見れて嬉しくないわけじゃないけど…話が違うわっ」

「はっはっは」

二人で珍味をおかずにビールをちびりちびり。

けらけら笑うスカリエッティに頭を抱える俺。

「最近全てが終わった後のことを考え始めてね…」

「ん、何だ？ 唐突だな」

「目先のことばかりではやっていけないからね。それで考えたんだが……」

なにやら真剣みを帯びた様子なので一度ビール缶を置いて聞いてやる。

逆にスカリエッティはビールを一口飲んで、一拍置いてから言い放った。

「『娘たち』を、よろしく頼むよ」

「……………は？」

「おや、ここは『お前のようなものに娘はやらん！』の場面だったかい？」

「……………」

うん。とりあえず把握。

こいつ、俺で遊んでやがる。

「てめふざけんなこの野郎っ」

「あだっ、いだ！ 痛いよ智哉君」

「自業自得だ」

「とにかく娘の身体を見た責任は取ってもらわねば――」

「まだ言うかつ。しかもあれはアッチが見せてきたんだよ！」

「世の中性的な案件は何事も責任を取るのは男と相場が決まってい  
てね」

「お前洒落にならんこと言うなっ」

「はっはっはっは」

「うがくくくっ」

やはりけらけら笑うスカリエッティと頭を抱える俺の図が出来上がる。

なんかこの状態は抜け出せないらしい。

ただ、けらけら笑っているうちにアイツが少し遠い目をしたことを見逃しはしなかった。

「…本当に何かあったら、娘たちを頼むよ」

「……………おう」

カチン、とグラスをぶつけることで友人の頼みに同意を示した。

## √C Strikers Mission 08 (後書き)

これ、フラグ回…なのか？

最近忙しくて更新速度が下がってるのが気になっています。

これから八月一杯くらい…下手すると十一月くらいまで尋常じゃないスケジュールだったたり。

ゆとりはゆとりらしくゆったりと過ごしたいです。

ディステイニープラン様、いずむ様、落雷様、感想ありがとうございます。  
います。

作者は個人的にWが好きです。ネタの方は…わかりませんorz。

サテライト様、誤字指摘ありがとうございます。修正しました。

さて、次も…フラグ回な気がする。

いい加減個人√へ……。

「な、んで…こんな…」

次回、どんぐりの背比べってどんぐりスケールでは結構な差だと思  
うよ

## √C Strikers Mission 09

装備を確認。

今日の内容から考えてなるべく小型で素早いものがいいから、換装はF91を選択。

ビームライフル、ビームサーベルはある。

スカリエッティから情報を貰って準備すること四日。

俺はプロジェクトFのプラントに来ていた。

今回の研究所はスカもジャマだと考えてるようだし、俺は不当な扱いを受ける子供を助けたいという利害の一致があり

目処が立ったところで破壊することに決まった。

証拠隠滅の手はずもついている。

ただ今回のプラントは管理局直下のもの。警備も付いているし、なかなか防御は硬い。

自重しないレベルで暴れる必要があるかもしれない。

情報ではA Aランク以上がやたらいるらしいし。『人手不足の管理局』は何処へ行った。

こんなところで無駄遣いしてるからだろう。

M i s s i o n 09 世界の不条理・前



認識範囲を拡大……外に三人、中は……わからん。多分たくさん。

進入経路は唯一つ。他にも幾つかの抜け道があるがそっちは全部罠。

外の見張りの動きを見て———今だ!!

唯一の進入口である二階通気口に飛び込む。と、同時に同じところに飛び込んでくる人影。

黒いバリアジャケットに、長い金髪———フェイトっ？

余談だが、F91のMEPEとブリッツのミラージュコロイドはどちらも装甲系である。

ぶっちゃけだからどうしたって訳じゃないんだが、問題はMEPEの方だ。

熱による金属剥離のこれは何か装甲に効果を持たせようとする発熱してMEPEが発生してしまう。

要はF91とミラージュコロイドは滅茶苦茶相性が悪い。

と、いうことでミラージュコロイドを使うために現在は装甲を展開していない。

ここの局員だけでなく、フェイトに見つかってもアウト。

なのにどんどん近付いていくフェイト。あっちに俺は見えていない。若干俺のほう飛び出しが早かったらしい。タッチの差で先に通気口に到着しそうだ。

「ぐほおっ」

「きやつ」

二人分の短く小さな悲鳴。

ああ、速さを売りとするフェイトそんでした。タッチの差ならこうなるよね。

今の俺たち。

俺が下、フェイトが上のくんずほぐれつ。手足が微妙に絡まった上、俺の顔はフェイトの胸の中へ。

………こらそこ、役得とか言わない。むしろこの状況誰得だよ。

「な…なに…?」

フェイトに俺の姿は見えていないはずだから、一体何が起きたのかわかっていないだろう。

と、その時。物音を聞きつけたのか見張りたちが近付いてくるのを感じ取る。

——結構派手な音立てたからなあ…。

なんて心の中で呟きながら先ずはフェイトの口を塞ぐ。

同時にミラージュコロイドを解除して、フェイトも含める状態で再設定、も一度起動。

少々暴れかけたフェイトだが、近付いてくる見張りの声と俺とあわせた視線で察知したのか気配を殺すように息を潜めた。

「どうした、何があった?」

「さあ、分からないですが物音が。鳥の類では無いと思うのですが…」

「侵入者の可能性があるな。各班に通達、警備体制を二レベル引き上げろ」

二人の声が遠ざかっていく。

念のために周囲の確認をしてやっと安堵のため息を付いた。

「あ、貴方は……」

「どうも。指名手配なんてやってます、浪川です。息子や娘がいつもお世話になってます」

「あ、えと、こちらこそ……?」

素直だなあ…。恐ろしいくらい素直な子だ。

何故この場面でこんな挨拶に流されるか。

「息子？ 娘？」

「あ、やべ…言ってねえんだったか。まあいいや。忘れて」

「……貴方、広域次元指名手配、浪川智哉ですね」

「そうでございますよ。フェイト・T・ハラOWN嬢」

デバイスを構えるフェイト。が、当然派手な音を立てるわけにも行かず動けない。

俺は飄々としたもんで全くやる気は無かった。

「ここで事を起こせば君も見つかる。こんなところから侵入した辺り、正規の手順は踏んでないんだろう？」

「くっ…」

「大体なんでこんなところに」

「何で貴方に教えなければならいんですか？」

「呉越同舟とか乗りかかった船、類友？」

「……ここで違法研究をやっているって情報が入って、でも許可が下りないから…事後承諾でいいかなあ…って」

「おい」

強引過ぎるぞ執務官。

「やましいところが無いなら検閲くらいいい筈なのに…」

「んなことばっかやってると消されんぞ」

「え？」

「当然組織なんて裏でなにやってるか分からない奴アホほど居るんだから、お前の身が危ないっての」

「……そういう貴方は、何故ここに」

「野暮用だ。邪魔すんなら付いてくんなよ」

ちやっちやか換装。

視界の端に入力しておいたマップを表示。

現在地を記して、どう進もうかプランを再考する。

内部構造は分かっているけど何処で何をやっているかはわかっていないし、警戒度が上がってるから迂闊なことでもできなくなった。

ふと隣を見れば、フェイトが眼を見開いて固まっている。

「…なんだ？」

「それ……MSデバイス……」

あゝ。納得。

正確には俺のは能力であってデバイスじゃないんだけどな。

どうでもいいから説明もしない。

結局プランは決まらない。片っ端から突入して敵が居たら仲間呼ばれる前に瞬殺すれば良いかな、なんて結論に。

そうと決まれば歩き出す。

傍らに金髪美少女を引き連れて。

## √C Strikers Mission 09 (後書き)

はい、閑話です。そういう名のフラグタイムです。しかも続きます。お分かりでしょうしもうぶっちゃけましょうか。√Cはフェイトです。

何処にそんな伏線があったでしょう。まさかの展開。作者も予想外。

フェイトなら執務官だし、STS原作もちよいちよい席を外してたからこういうことやってるのもアリかなって考えです。

そろそろ矛盾が目立ち始める頃かな……。指摘されたら全力でごまかします。言い訳します。もみ消します。

ディスティニープラン様、落雷様、僚様、サブゼロ様、いずむ様、OOフリーダム様、感想ありがとうございます。  
最近感想をくれる方が増えてきて嬉しい限りです。

<<coolになれたところがkoolみたいになってましたが、アレは誤字ですか？

ネタです。何かはいいません。

<<アギトとかはいつ出ますか？



いつか出ます。まだまだ遠いですね。アギトとかゼストのくだりはほぼ原作どおりに進んでいる…はず…なので。

＜＜違法施設壊してその子供達は何処に行きますか？

智哉が責任を持って里親を探してお願いしに行きます。

みんな元気です。たまにナンバーズとともに遊びにいたりしてます。

＜＜「おまえを・・・殺す」でしたっけ？

それです。「ヒーロー！早く私を殺しにいらっしゃーい！」な感じ  
です。

ふう。疑問質問には答えられた…かな。

とりあえず後2ターンくらいお父さんのターンです。

次も、頑張ります。

「何…これ……」

「これも、現実だな」

次回、聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥、ネットで聞けば恥かかない

P. S. 他の方の作品読んでたら、私の小説って改行しすぎですかね。

P. S. P. 7月30日くらいから八月第二週くらいまで姿消します。家からも離れるので更新できません。ちょっとばかりインターンに。

## √C Strikers Mission 10

「いやいやいやいや、お前なんで付いてきてんの？」

「え？」

「逆になんで？　みたいな顔すんなっ」

この天然娘が！

そしてどうあっても付いてくる気らしい。

「ここが調べ終わった後、貴方も連行します」

「二兎を追うものは一兎をも得ず、だぞ」

「頼もしい相棒が居ますから」

<Yes, sir.>

「そういう問題か…？」

十中八九黒どころか確実に黒なのだから緊急時の戦力が増えたことを喜ぶべきか、面倒が増えたことを嘆くべきか。

はあ…。

「じゃあ、いくぞ」

「はい」

M i s s i o n 10 世界の不条理・中

一つ目の部屋。…空。

二つ目の部屋。…空。

三つ目の部屋。…空。

四つ目…同上。

五つ目、六つ目、同上。

七つ目。…同じ…くない。

「何だ貴さ——」

研究者らしき男が居た。声を上げる前にビームライフルを三発。昏倒させる。

「…いきなりですか？」

「騒がれると迷惑だ」

とりあえずドアを閉める。

そこらにあったケーブルで男をぐるぐる巻きにして、監視カメラが無いことを確認。

装甲を解除する。流石に装甲じゃこれはやりにくい。

「なにを？」

「ここのシステムにハッキング。外にリンクが繋がってなくて出来なかったからな」

「そんな簡単に出来るんですか？」

「その気になればそのデバイスの中身を全部バグデータ、もしくはnullで埋めてやるぞ？」

「…!!」

フェイトはバルディッシュを抱きかかえ自分の身を立てにするように俺に背を向ける。

それがおかしくて俺は笑った。

「あはははっ、やらんっつの」

「か、からかったんですね!？」

男のIDパスを使ってシステムを起動。

ここまでくればこっちのもの。

能力全開でハッキング。内部構造や部屋の振り分け、研究内容等ごっさり頂く。

その中で気になる内容を発見。

「……フェイト嬢、お前は帰るんだ」

「どうしてですか？」

「このデータをやる。これくらいあれば十分ここは正当な理由で検

挙出来る。だから帰れ」

「そうは出来ません。貴方を放置することになります」

「じゃあ今度堂々とお前の前に出てやるから、帰れ」

「何があるんですか？ そんなに私に見せた無いものが……」

部屋の中を物色しながら答えていたフェイトが俺の後ろに回ってディスプレイを読もうと……

つとー！！

ギリギリでディスプレイの消去に成功。見せずにすんだ。

「……………一体なんなんですか」

「頼む……………今だけは、帰ってくれ」

眼を見て、頼む。お願いする。懇願する。

こんなときに、執務官の顔になって首を振った。



「出来ません」

「……………そうか。お前は、現実を受け止められるのか？」

なのは、フェイト、はやての三人娘は基本的に境遇のせいかな年齢よりも早熟している。

が、物事は早ければいいというものではない。

特に精神こころなんてものは時間をかけるべきだ。

心は積み上げた経験じんせいを元に柔軟に、強くなっていく。

この子達は早熟しすぎたがために、その心は硬く、脆い。

特にフェイトにはこの事実が厳しすぎるだろう。

目的地は決まった。

装甲を再度展開。視界の端にマップを表示。目的地二つにマーカーを入れる。

「…付いて来い」

フェイトは首を傾げながらも付いてくる。

一つ目の目的地。こっちは本来の俺の目的だ。

「見張りは…いない。代わりにサーチャーが三つ、監視カメラが二つ」

「…よくわかりますね」

監視カメラは電子反応を見ればいいし、サーチャーの方は魔力反応じゃなくて周囲と違う場所は全部それと判断してるだけだ。

見逃してるかもしれないし、何の確証も無い。

まあ、ニュータイプの方が確定を告げてるんだけどさ。

手早く全部破壊して部屋に侵入。

もうばれても問題ない。この子達を救出した後は力づくでここを破壊するだけだ。

子供たちはいずれも眠っている。恐らく、この中の何人かは睡眠でなく昏睡だろう。

「執務官。この子達はこちらで保護するぞ」

「え？ 管理局の保護施設…まずは病院に――」

「ここが何か忘れたか？ 管理局直下の研究所で措置されていた子供をまともに扱うとでも？ こちらにも医療措置の準備はある」

この部屋全体に転移術式を展開。

子供たちを別世界に待機させてるスカリエッティたちのところに送る。

まず、何故転移が出来るかという俺の能力は既存の魔法じゃないから妨害結界も関係ないってこと。

じゃあ何で直接ここに来なかったかって聞かれれば、能力は『次元間移動』であって、転移じゃないから

知らない場所にはランダムでしか行けないの。それこそ『地球』とか『ミッドチルダ』とか。

知ってる場所などにか補正が聞くけど。

ついでに俺たちはラボという名のアジトだけじゃなく、医療施設用のアジトが別世界にある。

こっちは主に俺がこうやって施設から弱った子供を送ってスカリエッティが治す役割だ。

フェイトが勝手に子供たちを転送したことに異議を立ててくるが無視。

次の目的地へ。

出来れば、フェイトにはここで付いてくるのをやめてほしい。

「やめません。貴方を捕まえます」

「……………」

この一点張り。

それでも子供は逃がしたので今度は堂々と歩く。

魔導師が何人か突っ込んでくるけど全部ビームサーベルでいなして、ビームライフルで撃ち抜く。

…雑魚（Aランク以下）との戦闘なんて一行にも満たないさ。こち

とらSオーバーが二人がかりだ。

「……ここだ」

「ここになにが？」

「…これも、現実だ」

他とは違う一回りも二回りも大きい扉。

この研究所の現在のメイン。

その重い扉を……開いた。

「なに……これ……」

そこにはずらりと並ぶポッドが推定二十機以上。

その中には全て金の髪を持つ少女が浮かんでいた。

## √C Strikers Mission 10 (後書き)

連休だったのでさっくり早めに投稿。

フェイトは予想外だったようで。まあ、八歳差位有って無いようなものでしょう。

……逆算中——

中学生と園児…だと……？

……無いです！ 歳の差は関係ないっただらないんです！！

ギャラリー様、いずむ様、デイスティニープラン様、感想感謝です。

くく∞ジャステイスいつかですか？

ジャステイスですか…多分出すとは思いますが…。

実は種系でジャステイスって単体戦はほぼ最強だけど対複数になると弱すぎませんか？装備的に。

次、目に見える形で暴かれた管理局の闇と、迫る敵。フェイトはどうするのか？ って感じです。

「……………おやすみ」

次回、寝耳にどろり濃厚ピーチ

## √C Strikers Mission 11

「なに……これ……」

呆然とフェイトはポッドへと近付く。

それに倣うように手近なポッドへ接近する。

「NO. 005。デバイスコアとの直接融合」

ポッドに書いてあるナンバーと、先ほど研究者の男の部屋で盗ったデータを参照しながら呟く。

どうもこの子はデバイスコアを身体に直接埋め込んだらどうなるかを試したらしい。

良く見てみれば、胸の辺りに青いデバイスコアが埋まっていた。



こっちは…NO. 003 成長促進。

確かに他の固体に比べて身体の発育具合が段違いだ。かなりエロイ。

……分かんと思うけどポッドの中身は全裸だよ。全裸。

こう無駄に解析とかしてないと視線のやりどころに困るんだよ。オリジナルが目の前に居るだけに。

ぽりぽりと頬を搔いていると、不意に囲まれた気配。

……どれもこれも自分がAA越えだってことを主張するように魔力を放出してる。

「フェイト」

「分かってます」

フェイトは呆然とした状態から脱しバルディッシュを構え、俺はビームライフルを強く握った。

刹那、飛び出してくる騎士と思わしき人物。

ビームライフルを連射するけど、見事にかわされる。……疾いな。

右手のビームライフルを手放す。その落下と同時に騎士に切られた……残像が。

手ごたえを感じたのか、残心が甘い騎士の後ろに移動する。

質量のある残像。それに気付く前に右手で抜いたビームサーベルで袈裟懸けに切り裂いた。

直後後方から切られたが、またも残像を残し移動。

フェイトの後方に立ち、目の前の男の額にライフルを突きつけ引き金を引く、引く、引く、引く。

同時に上空からのフォトンランサー。俺に意識を向け始めていた奴らを死角から襲う。

即興にしてはいいコンビネーション。

最後に背合わせにしてファランクスシフトとビームライフルの連射による弾幕で始末をつけた。

「……これか」

周りの気配を探りつつ、ラボの奥にあった装置を起動する。

空間ディスプレイに表示されたこの研究対象たちの研究内容<sup>マテリアル</sup>。

既に廃棄されたものも数体。

そもそも、この研究所の目的は優秀な魔導師<sup>へいき</sup>の量産だったようだ。

優秀な魔導師、かつ元々が人造的に作られた命のフェイト。

そのフェイトの遺伝子を利用し、同じくプロジェクトFの技術を流用すれば量産が可能となっらしい。

そこでさらに戦力を強化するためここで様々な実験を行ったという。

そして有用な方法があった場合、それが通常の人間一（この場合非クローン）にはどのような影響を及ぼすか調べるために

先ほど保護した子供たちを連れて来たとか。

「ふーん……」

「酷い…どうしてこんなことを…」

管理局が直轄してる研究所なんて大体こんなもんだ。

俺も割りと見慣れたもので、同じような内容を見たことが無いわけじゃない。

しかし、フェイトにとっては衝撃的なことだったらしい。

「戦力が欲しいんだろ。どんな強者も黙らせ従わせられるような戦力が」

「何故…」

「そりゃあ、奴らの目標は『管理局による世界統一、統制』だからな。力が必要なんだよ」

「そんなことは――」

「無いとも言い切れないだろう？」

フェイトは執務官だ。次元世界中に発生する事件を追ううちにいくらでも管理局のきな臭いところは目に付くだろう。

とにかく、もうここに用は無い。

片付けて帰るか。

「お前もう帰れ。ここの片付けはやっておくから」

「片付け…？ この実験体になった人たちはどうするつもりですか？」

「焼却」

「しょ…！！ 生きてるんですよ！？」

「生かされてるだけだ。どっちにしても外に出た方が辛いだろう」

身体にデバイスコアを埋められたり龍種の遺伝子混ぜられて尻尾生

えてたり、まともに生きていけるわけが無い。

それなら、意識も無く外の景色も知らないまま死なせてやるのも一つの救いのはずだ。

「ダメです!!」

フェイトがデバイスを構え、俺に敵意を向ける。

俺は頭を額に手を当ててため息を付いた。……またため息付いちまった。

「じゃあどうしろと？　なんだ、自分が原型だと知って同情した？」

「違います」

「じゃあ管理局で保護しますってか？」

そんなん、上層部にいいように操られて慰み者になるか兵器になるかの二択だと思うぞ」

「なぐさ——!!」

その言葉通りの想像をしたのか、赤面した直後青ざめ、仕舞いには憤慨する。

まあ、自分と同じ顔、同じ身体した奴が顔も知らない薄汚い屑どもに犯されるかもって思えばそうなるわな。

それでも涙目になりながら両手を広げて俺の行動を阻止するフェイトには脱帽ものだね。

「ただ、俺はそれを認めない」

「私はあなたの行動を認めません！」

「じゃあ、認められる必要はない」

「っ————」

既にフェイトの双眸が映していたのは残像。

残像を知覚する前に俺はフェイトの後方へ移動……強く魔力を打ち込む。

くず折れるフェイトを支え、抱きかかえた。

一度目を瞑り、自分の行動への責任とこれから死に逝く命への謝罪

を心に刻む。

「アトミックバズーカ」

出現させたい兵装なんてイメージすれば出せるけど、これはあえて口に出す。

口に出すことでこの兵器を使うことを自分に忘れさせないように。

同時に転移の準備。

引き金を引くと同時に転移。爆発の範囲外へ。

遠くにあの研究所が爆発した様子が見えた。

これで研究所にあった数々のデータと共に不幸な子供たちはひとま  
ずの眠りにつけるだろう。



抱きかかえたままのフェイトを見て思った。

……強制転移で先に外に追い出しておけばなにも面倒なことはなかったんじゃない？

## √C Strikers Mission 11 (後書き)

お久しぶりです。嘆きの夏休み初日PCクラッシャーから復活しました。

親に土下寝してお金借りてPC購入。

…あ、あれ？ 配線の型が違うよ？

そうです。前のPCは古すぎてHDDの配線のタイプが古すぎました。

どうにかする方法はあるんですが予算の関係で保留事項へ。よって今までのデータやプロットなんかの救出は現状不可能に。

とりあえず気合で書きしてみました。でも、断念するかもしれません。

さすがに本当にざっくりとしたものだったとはいえ、プロット無しでこの先の話が成立できるかどうかわかりません。

がんばってみます。

ギャラリー様、いずむ様、ディステイニープラン様、落雷様、いち様、感想感謝です。

なんか、こんなことになってて申し訳ないです。

「いや、智哉君。元々彼女は勧誘するつもりだったが…このタイミングで連れて来られるのは予想外だよ。しかも気絶したまま…一般にこれは拉致、誘拐と呼ぶのではないのかい？」

次回、二階から座葉

## √C Strikers Mission 12

「智哉君、どうしろというんだね」

「とりあえずデバイス没収してAMFの中に寝かせといて。一応鎮静剤用意しとくといいいんじゃないか？」

「いやいやそういう話ではないんだよ」

あれ、珍しくスカリエッティのほうが頭抱えてる。

手近なベッドにフェイトを寝かせて俺も適当に腰を下ろす。

「大体どういう状況なんだい？」

「これ」

あの研究所で手に入れたデータを渡す。

受け取ったスカリエッティは眼を通して獰猛に笑った。

その笑いは俺も微妙に恐怖を感じなくも無い。

「やってくれたね。これは少々私も頭にくるよ」

「それと実験体のFの子達を見てな、説得が面倒だったから黙らせて抱えてきた」

「……いや、智哉君。元々彼女は勧誘するつもりだったが……それは一般的に拉致、誘拐と呼ぶのではないのかい？」

沈黙は金。

元々その光景を見せる状況がミスだったなんて情報は与えない。

ジト目も無視。無視したら無視。

はあ、とため息ひとつついてスカリエッティは作業に当たってくれた。

なんだかんだこいつっていい奴なんだよな。

「あれだよな。世間的に見ればお前のやってることとそいつらがやってることって一緒なんだよな」

「失礼だね。私は命の可能性を見てみたいだけで命を弄びたいわけじゃないよ」

そう、スカリエッティに言わせれば機人やレリックウェポンというのは人の可能性を探求した結果らしい。

機人というのはある意味臓器なんかが不自由な人が人工臓器なんかを入れていった最終形態のようなものだし

レリックウェポンは古代ベルカの王族に受け継がれてきた伝統技能ともいえる。

どんな技術も受け取り方しだいってことだな。

ああ、レリックウェポンといえば――

「ゼストとルーテシアって今何してる？」

「彼らかい？ ……ああ、そうだ。また彼の体調が崩れたらしくてね、ルーテシア君に頼んで無理矢理療養を取らせているよ」

「またかよ」

ゼスト・グランガイツとルーテシア・アルピーノ。

俺の居ない間に襲撃があつて、仕方ないから迎撃したらレリックウェポンの適正ありと判断されて評議会より支持があつた二人。

隊のほうは内部に潜んでいた評議会の刺客により証拠隠滅のため崩壊。

ギリギリ生き残ったゼストとルーテシアの母メガーヌをこちらで救出し、いい具合に評議会を騙してルーテシアを保護。

目を晦ますことは出来ないからレリックウェポンにしたということらしい。

その中でゼストのほうがレリックとの融合率が低く、時折体調を崩す。

そういう時は意外としつかりものなルーテシアに頼んで無人世界で無理矢理にでも休ませてるんだとさ。

「いい年したおっさんが無理して子供に迷惑掛けるなつての」

「まあ、そう言わないでやってくれ。彼にも目指すものがあるし…

…だいたい、私たちだってそろそろ……」

なんか切なくなってきた。

この若者がメインのお話で、俺らみたいなおっさんって…悪い意味で目立つよな……。



S  
i  
d  
e  
  
K  
i  
r  
a  
.  
  
Y

フェイトさんが居なくなって一週間。

行方不明となったのが六課の任務中ではない上、機動六課のあり方としての特殊性から搜索も許されなかった。

さらに行方を眩ませたと思われる地点は広範囲におよび消失。

フェイトさん自身が関連しているのではないかと言われているし、

何よりそこにあった研究施設に無断で捜査を強行しようとしたとも予測されている。

フェイトさんが居なくなったことで六課内もよくない雰囲気だし、特に彼女の被保護者たちがまずい。

少々情緒不安定とも言える状態だ。

「アルフさんに連絡を取ってみても、居場所は分からないけど多分元気だろうって」

「一先ずは安心、か」

「それよりはこれから先のことだろう」

「それでな……キラ君、聞いとるか？」

「あ、すみません」

現在、隊長格だけのミーティングだ。

フェイトさんの抜けた穴をどう埋めるか。

名目上はライトニング小隊をシグナムさんと姉さんで仕切るので十分。

しかし、いざ出動となった時にフェイトさんのポジションを埋める人が居ない。

高速機動とオールレンジ戦闘という動きはなかなか真似できるものじゃない。

「それで『そっち』の方は準備って出来てるんやろか？」

「そっちって…『あっち』？」

「そっち」

「二人が何言ってるかわかんないよ…」

「アタシだってわかんねーよ」

僕とはやてさんだけでわかりあう話。

ただ、ここでお披露目しちゃうの？

「仕方ないやろうな。この場合、言い方悪いかも知れへんけど質より量でカバーや」

「了解。呼び出しておくね」

「え、えと説明してくれないかな…？」

なのはが挙手。

と、いうか僕とはやてさん以外のみんなが教えろと目で訴えかけている。

はやてさんとアイコンタクト。念話を使わずに会話することに成功した。

「秘密」

「はぁっ!？」

「ぶっちゃけ、第三小隊を呼ぶだけなんやけどな」

「裏切った?! 今のアイコンタクトはなんだったんですかつ」

「別に隠すことでもないやろ」

「~~~~~!」

叫びだしたい気持ちを抑えながら、僕はアドレス帳を開いて『ユラ』を選択した。

## √C Strikers Mission 12 (後書き)

東京から帰宅しました。北海道は東京より暑いですが。なぜですか。パソコンの廃熱が恨めしくて仕方ないです。

家の中で一番快適なのはお風呂のぬるま湯の中です。

改めましてお待たせしました。

なんか書き方忘れてクオリティが下がってる気がするのをご愛嬌と  
いうか見逃したくない……。

今までどうやって書いてたかなあ……。

ppo様、ギャラリー様、落雷様、ディステイニープラン様、いず  
む様、僚様、某スーパーコーディネーター様、感想感謝です。大変  
お待たせしました。

くくえっ！あのままお持ち帰りですか！？

お持ち帰りです。

くくアトミックバズーカで研究所吹っ飛ばしたけどフェイトが検挙  
する人は残ってるんですか？

残ってないです。困ったものですね。本来ならフェイトさんは帰っ  
たら怒られるだけじゃ済まないんですが、研究所自体が吹きとんで  
フェイトがそこに何をしにいったか立証することも出来ないので多  
分お咎めは無いでしょう。

くく主人公はガンダム以外にもなれるならマクロスFの機体になっ

てほしいです

残念ながらガンダムだけです。ご了承ください。

くく種と種死をもっとだしてください

バランスを考えつつ、ですね。

さて、今週も実は明後日あたりからまた遠方へ外出します。

週末まで帰ってこないなので次の更新はおそらく来週。

気合入れば明日に更新できるかもですけど……多分無理です。

プロットも無くなったし、散々ですけど皆さんの応援がありますので、√Cくらいは最後まで書き上げたいです。

他のルートは…設定が無くなった以上やっぱりちょっと苦しいので。応援よろしくお願いしますっ。

「アグスタあ？ またなんでそんなところに」

次回、大は小をかねるけど、決して小さいことが悪いんじゃない。

※ことわざ被った希ガス。

追記。 8／10

誤字指摘ありがとうございます。  
修正しました。



「ん……………え……………」

どこことなくぼんやりとする思考回路。

無理矢理押さえつけて目を覚ます。しかし、目を開いて見渡した部屋は見たことの無いものだった。

「どういうこと？ ……バルディッシュ？」

自身のデバイスに聞いてみるが反応が無い。

いつも入れているポケットを探ろうと腰に手をやるが…

そこで自分が着ている服がいつもの制服でなく病人服であることに気がついた。

ようやく頭が回り始める。

デバイスは無い。自分の感覚を信じるならこの部屋は高濃度のAMFで満ちている。

これでは魔法の発動はまったく見込めない。

多少の心得はあるとはいえ、魔法さえなければ自分は所詮20歳にも満たない女性の力しかない。

複数の男性などに襲われればひとたまりも無い……などと思い至り次第に恐怖を感じ始めた。

不意に、ドアの開く音。

嫌が応にも身体がびくりと反応する。

「おや、目覚めたのかい。身体の調子はどうだい？ 問題は無いと思うんだが」

まさか目の前に居たのは宿敵とも怨敵とも言える広域次元指名手配の犯罪者。

自分を初めとした不幸な子供たちを作り出した張本人。

今すぐにでも捕まえて、張り倒して、殺してしまいたいほど憎い人。

それが手配書類では醜悪な笑みを浮かべていたのに、今は人の良さ  
そうな笑みを浮かべて話しかけてくる。

でもそんなのは関係ない。

捕まえない。でも、デバイスも無い。魔法も使えない。

安易な行動には出れない、とフェイトは歯噛みした。

「私に何をしたんですか？」

「…はて、『何』といわれるとデバイスを没収した上で服を着替え  
させ身体の間々まで調べつくし、薬を打ち込んだよ」

「——っ!？」

身を守るものが何もないせい、恐怖で瞬間身が竦んだフェイト。

対して維持の悪そうな笑みを浮かべていたスカリエッティが、後か  
ら入室した秘書然とした女性に後頭部を殴られ地に伏した。

思わずぽかんと固まるフェイト。

女性——ウーノはにこりとフェイトに笑いかけた。

「大丈夫ですよ。デバイスを没収したのは事実ですが、貴方の服を着替えさせたのは女性ですし

健康状態に問題が無いか調べただけ。薬と言うのも栄養剤です。過労で栄養バランスが酷いことになっていましたので」

そこまで説明されてフェイトは暫し黙考する。

これはどちらかと言えばありがたいというべき場面なのだろうか？  
しかし相手は逮捕すべき犯罪者たち。感謝などする必要はあるのだろうか？

考えているうちにスカリエッティが復活したようで、地に伏せたことで身体についた埃を払っていた。

……埃など皆無に等しいのだが。

身なりを整えて改めて不適に笑う。

「さて、フェイト君。これから私たちの存在、行動、管理局の真実についてお話しよう。ここまで来たのも何かの縁だ。

これを聞いてどう行動するかは君の自由だ。

…ただし、我々の邪魔になるようならここでしばらく監禁されてもらうことになるがね。

安心してくれたまえ。もちろん衣食住だけはしっかりと確保させてもらうよ。ただ映画鑑賞気分で待っていてくれればいい」

M  
i  
s  
s  
i  
o  
n  
  
1  
3  
  
第三小队

「キラっ」

「ユラ、すずかさん、アリサさん」

第三小队たる三人を駅まで迎えに来た。

「遅いわよ」なんていうアリサさんに頭を下げつつ今回の事情を説明する。

「ふーん…フェイトがね……」

「それより、三人とも準備は大丈夫？」

「とーぜん！」

ぐっと拳を握るユラ。

三人は第三小隊として機動六課に登録されている。

戦力過多を指摘されないように普段は地球を拠点にしつつ、日常生活と戦闘訓練を行ってもらっている。

囑託だから面倒な書類なんかも殆ど無いから成り立つ生活。

しかし、こういう有事の際には呼び出して協力してもらうことになっていた。

「しかし、こうやって考えるとあたしたち、よくキラに納得させたわね」

「かなりごり押しだったけどね」

「でも勝ちば勝ちだ！」

そう、この三人が管理局に協力すると言う話になったときに色々あったんだ。



ある日、突然ユラに呼び出された。

意味は分からなくても、時間があつたから話に付き合うことにする。

「兄さん。私たちにも、魔法のこと手伝わせてくれないか」

そこにはユラのほかにすずかさんとアリサさんが。

何の話かと思ったらそういうこと。

僕としてはあんな殺伐としたところに行かないで、地球に居てほしい。

まあ、それは個人の自由だからどうしようもないけど

なにより僕やなのはたちを手伝うと言うことは殆ど前線に出ると言う意味と同義。

魔法で戦う術が無い三人には危険だし不可能だと告げる。

そうしたらなにやら不適に笑って、それぞれ手に持ったものを掲げて見せた。

「なっ!?!」

ユラのものは何より、若干形状は違ってもアリサさんやすすかさんのものもそうであると一目で分かる。

あれはMSデバイスだ。

「どうしてそれを!?!?」

「兄さんの部屋から盗み出して、忍さんに複製してもらった」

「……………」

絶句した。

盗み出した、なんて簡単に言われてしまう僕のほうにも非はあるだろうけど

再現・複製が可能な忍さんは何者なんだろう。えっと、魔法世界関係ないよね……。

「兄さんは私たちに出し抜かれた。よって兄さんの負け。反論は聞

かない。だから私たちに協力させて」

「お願いね、キラ」

「えと、お願い」

以上、”高町家式お話”をするまでもなく何故か僕の敗北が決定され、

三人を第三小隊としてごり押しせざるを得なくなった経緯だ。

「ホント、何がどうなってこうなったんだろうね」

「多分、父様のせいだよ」

「案外フェイトも二人のお父様が関係してるんじゃないの？」

「……有り得そうだ」

まったく否定できない。父さんはあれで微妙に抜けてるからなんかどうしようもなくなっ取りあえず拉致でもしたんじゃないだろうか。

……うん。絶対そうだ。ならフェイトさんも安全だし、いいことでしょう。

## √C Strikers Mission 13 (後書き)

以上。

…あれ？ アグスタの話に行くはずだったんだけど……？

今度は釧路から帰宅。疲れた。

でももうすぐ休みも終わる…。なぜ休みのほうが更新できない。  
次回こそアグスタへ。

あ、あれ…？ いつの間にか100万PVだよ。ありがとうなんだよ。

こんな駄文を読んでくれる人がこんなに居ることに感激なんだよも  
ん。

記念とか書いたほうがいいのかな…。何かご希望があれば。どぞ。

ギャラリー様、ドラウプニル様、落雷様、タキオス様、らいぞう様、  
猫背様、ディステイニープラン様、ΨユウΦ様、いずむ様、感想  
ありがとうございます！！

な、なぜに更新の間が空くと感想が増えるのでしょうか……。

作者の驚きが有頂天です。(↑え

今回は…個別にお答えするよな質問系はなかったかな？

ただ、”おっさん”の話についてなんです、私としても出したい

んですよ……。

主人公がまずおっさん予備軍ですし。でも”なのはStS”のおっさんって言ったら……ゼスト、ゲンヤ、レジアス。

……。

どう活躍すれば……ゼストは今活躍すると最後まで行く前に死んじやいそうだし、レジアスは暗躍しかしてないし……ゲンヤとか扱いに困るし……。

強いて言えば……レジアスに焦点を当てるくらいですかねえ。

……がんばります。

「なんだよ。家族総出で俺の敵かい」

次回、三度目の正直……三度目と言わずに最初からやりなさい

## √C Strikers Mission 14

「アグスタ？ 何でそんなところに」

「回収してほしいものがあるんだよ。これが本物だったとして、奴らに渡ると洒落にならないからね」

「何だよこれ」

スカリエッティが口には出さず画面の文字をスクロールさせる。

ああ、確かにこれはふざけた代物だ。

「了解。他は？」

「ここで娘たちを出すのは少々苦しい。キミとガジェット、ザクだけはどうにかなるかね？」

「さすがにエース級に集られたら俺も動けないぞ？」

「そうかね……そうだ、彼女に頼もう」

カタカタと響くタイプ音。

続いて開いたウィンドウには通信中の文字。

接続されると、幼げな風貌を持つ女の子が画面に映っていた。

「ルーテシア君。ひとつ頼みたいことがあるんだが」

「……いいよ。なに？」

「召喚虫を使って囹役をやってももらえないかね。なに、危険の無いところからでいいし何かあったら直ぐに撤退していい」

「…わかった」

ぷっん。

用件が終わると直ぐに向こうから切られてしまった。

「ふむ。つれないね」



「俺は逆にしっかりしすぎだと思っけどな」

「はっはっは。私たちのほうがよっぽど子供だよっ」

「うるせー」

M  
i  
s  
s  
i  
o  
n  
1  
4  
ア  
グ  
ス  
タ

どんどんぱちぱち。

どんぱち。

「すげえ光景。近所迷惑にもほどがあるだろ」

「囧は派手なほうがいい」

「そりゃそうだ」

俺の隣にはルーテシア。それとガリユー。

遠隔操作でガジェットを操ってかく乱してるらしい。

同時にザクも何機か働かせてるから効果は倍増と見た。

「んじゃ、俺も行くか。ガリユー、ルーテシアを頼んだぞ」

こくりと頷いたのに満足して、換装。

一瞬何にしようか悩んで、エクシアにしておいた。

今回は進入してパクって来るだけなのに、背筋がぞくぞくして仕方ない。

ミラージュコロイドだけで乗り切れるものじゃない何かがある気がした。

闇にまぎれる様にして進行。

戦いの音を利用して破壊音を誤魔化し、保管庫の扉をぶっ壊す。

「遅かったな」

「な……？」

金髪、サングラス、口布、本局の制服。——こんな奴は知らない。  
何だこの男は。なぜ目的のロストログアを持っている？

「お前、なんだ？」

「さあ。管理局の人間、ということだけかな？」

そう言って男はワンド状のロストログアを一振りした。

瞬間、黒い何かが渦巻き…現れるのは、『俺』。

「奴を消せ」

「了解」

エクシアの状態に換装している『俺』。

そう、あのロストロギアは任意のものを無限に複製する能力。  
こうなると拙いから回収に来たのに――

「最悪だ…!!」

「じゃあな」

「待てっ!!」

GNライフルを撃つが、それより先に姿を消される。

次いで俺に襲い掛かってくる『エクシア』。

セブンスードをセブンスードで切り返す。

恐らくあの男は最高評議会の手の人間。

予想できる限り最悪のシナリオ。下手をすると俺たちはあの脳みそどもの手の上で遊ばれてる可能性もある。

「クソがつ」

「吼えるなよ」

G Nライフル——弾かれる。

セブンソード——往なされる。

G Nダガー——撃ち落される。

切り上げも袈裟切りも逆の動作で跳ね返される。

戦力は互角。性能はほぼ完璧にコピーされている。

千日手。そう頭に浮かんだ。

「トランザム」

「っ！ トランザム！」

一瞬反応が遅れて、背後に回りこまれた。

しかし、ニュータイプとしての本能が、コーディネーターとしての身体がそれに反応し、背後にセブンスードを振りぬく。

「がっ……！？」

「…は？」

セブンスードが胴体中ほどまで切り込まれていた。

俺の反応のほうを上回った？

思考を一旦止め、まずは振りぬく。

するとあれは闇に解けていった。

換装は出来たのにニュータイプとしての力とかはコピーし切れなかった？

もしかしたら換装も現在の状態をコピーしただけ？

ロストログアの詳細は分かっていない。スカリエッティが解析した

ら分かるかもしれないけど現物は奪われた。

……撤退か。

<ルーテシアっ。引くぞ！>

<……わかった>

それにしても拙い。

あれは絶対に奪われちゃいけない類のものだった。

先手を打たれたということはこっちの動きがばれてる。

早くスカリエッティに伝えないと……！

<スカリエッティ>

………。

反応が無い。



<スカリエッティ？>

<ザ…：…>

<ウーノ！ クアットロ！>

<…：ザザ…：>

ノイズしか帰ってこない。

おかしい。ジャミングの気配は無い。

ならば何故返事が返ってこない？

———簡単だ。

襲撃を受けたから。

俺は毒づいて全力で帰還を始めた。

## √C Strikers Mission 14 (後書き)

相変わらず原作メンバーと微妙にぶつからない主人公。と、いうことで次からオリジナル話スタート。

次話はアナザーサイドをお届けするつもりですが。

いやはや、忙しくて仕方ない。なぜか知らないけど執筆の暇が無い。

ホント更新遅れて申し訳ないです。

某スーパーコーディネーター様、デステイニープラン様、いずむ様、ギャラリー様、落雷様、はろるど様、ドラウプニル様、感想激感謝です！

>ストライクルージュになる予定はありますか？  
どうでしょうね。わかりません(↑おい

>M1アストレイのまま？  
同上ですw

>不可能を可能にする男として出せるんじゃないや・・・  
それ、敵になって一回復活するフラグですよね。

「落ち着いて、ティアナ!!」

次話、あなざーさいど。

※真面目なのかふざけてるのか分からない次話タイトルについて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7501k/>

---

魔法少女リリカルなのは～父で兄で主でチート～

2010年10月12日19時18分発行